

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第178集

東中田A古窯

2013

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第178集

ひがし な か だ こ よ う
東 中 田 A 古 窯

2013

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

豊橋市は愛知県南東部、渥美半島基部に位置する中核市で、東三河の政治・経済、産業・流通、文化の中心地です。近世には市街地を中心に吉田藩の城下町が発達し、東海道吉田宿、二川宿が賑わっていました。現在もＪＲ東海道新幹線・東海道本線・飯田線、名古屋鉄道線、豊橋鉄道渥美線、国道１号線・国道２３号線・国道２５９号線が通じ、日本列島東西の大動脈、奥三河・渥美半島への交通起点として重要な役割を果たしています。これらに加えて、市内南部には国道２３号バイパスが建設されることとなり、このたび、愛知県埋蔵文化財センターは東海道有数の景勝地である潮見坂から続く東細谷地区において、東中田Ａ古窯の発掘調査を実施することになりました。

東細谷地区は昭和４０年代以降の農地の開発によって、豊かな農村地帯へと姿を変えていますが、奈良時代には多数の須恵器窯が稼働する有数の窯業生産地でした。東中田Ａ古窯はすでに窯跡の大部分は失われていましたが、須恵器を生産した工房や灰原などの遺構が検出され、当地域の窯業生産の歴史を研究するための重要な資料を得ることができました。本書はこの成果をまとめたもので、今後、本書の成果が学術的に活用され、ひいては埋蔵文化財の保護につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、地元住民の皆様をはじめ、関係者及び関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して、厚く御礼を申し上げます。

平成 25 年 3 月
公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 加藤高明

例 言

1. 本書は、愛知県豊橋市東細谷町東中田に所在する東中田A古窯（県登録番号79712：愛知県教育委員会1996『愛知県遺跡地図（Ⅲ）東三河地区』、市登録番号91-14：豊橋市教育委員会2004『市内遺跡詳細分布調査報告書』）の発掘調査報告である。
2. 東中田A古窯の発掘調査は、一般国道23号豊橋東バイパス建設工事にかかる事前調査として、国土交通省中部地方整備局名四国道事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（当時、現公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。
3. 調査期間は平成19年7月2日から9月28日である。
4. 調査面積は1,591 m²である。
5. 調査担当者は、酒井俊彦（主査）、岡久雅浩・早野浩二（主任）である。
6. 発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター
国土交通省中部地方整備局名四国道事務所 豊橋市教育委員会・豊橋市美術館 湖西市教育委員会
7. 発掘調査において、大成エンジニアリング株式会社より調査業務全般の支援を受けた。支援体制は以下の通りである。
渡辺宏司（現場代理人） 河野一也（調査補助員） 平出久二（測量技師）
8. 報告書作成にかかる整理作業において、出土遺物の実測・トレースを株式会社シン技術コンサル、出土炭化材の放射性炭素年代測定・樹種同定をパレオ・ラボ、出土遺物の写真撮影を金子和久氏（有限会社写真工房・遊）にそれぞれ委託した。
9. 発掘調査、報告書作成の過程で、次の各氏、各機関からご指導、ご協力を得た。
浅田博造 石川明弘 岩原 剛 大谷宏治 尾野善裕 加藤幹樹 菊池直哉 後藤健一 城ヶ谷和広 鈴木敏則 高橋 透 中里信之 賛 元洋 松本泰典 水橋公恵 村上 昇 横谷朋子 吉田菜穂子 和田達也 豊橋市教育委員会・豊橋市美術館 春日井市教育委員会 長久手市教育委員会
10. 本編の執筆は、第5章（1）をパレオ・ラボAMS年代測定グループ、同（2）を黒沼保子（パレオ・ラボ）、それ以外を早野浩二が担当した。
11. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いたものを踏襲した。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、厳密な統一性はない。
SY：窯体、SK：土坑、SD：溝、SB：掘立柱建物、SX：その他不明遺構
12. 発掘調査および本書で使用了座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠した。ただし、表記は新測地系（世界測地系）による。
13. 本編で使用する土層の色調については、『新版標準土色帳』を参考に記述した。
14. 発掘調査の記録（実測図、写真等）は、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。なお、遺跡の略記号は「4THA07」である。
15. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 TEL 0567-67-4164
16. 本書の編集は早野浩二が担当した。

目 次

第1章 調査の概要.....	1
(1) 調査の経緯.....	1
(2) 調査の経過.....	2
第2章 周辺の環境.....	4
(1) 地形・地質.....	4
(2) 歴史.....	4
第3章 遺構.....	8
(1) 概要.....	8
(2) 灰原.....	9
(3) 東向き斜面の遺構.....	13
(4) 西向き斜面の遺構.....	18
第4章 遺物.....	25
(1) 概要.....	25
(2) 杯類の型式区分.....	28
(3) 灰原の遺物.....	33
(4) 東向き斜面の遺物.....	52
(5) 西向き斜面の遺物.....	58
(6) 粘着資料・転用焼台.....	64
第5章 分析・考察.....	66
(1) 放射性炭素年代測定.....	66
(2) 出土炭化材の樹種同定.....	69
第6章 まとめ.....	72
(1) 須恵器生産関連遺構.....	72
(2) 須恵器の編年的考察.....	75
(3) 有蓋長頸瓶と長頸瓶の蓋.....	79
(4) 東中田A古窯の位置.....	80
遺物一覧表.....	81
写真図版.....	89
報告書抄録	

〈挿 図 目 次〉

第 1 図	遺跡の位置	1
第 2 図	調査前の地形と調査区の配置 (1:500)	2
第 3 図	周辺の遺跡 (1:25,000)	6
第 4 図	東中田 A 古窯周辺採集資料 (個人蔵)	7
第 5 図	主要遺構配置・調査区断面図 (1:500)	8
第 6 図	東向き斜面基本遺構図 - 灰原完掘時 (1:200)	10
第 7 図	灰原土層断面 (1:100)	11
第 8 図	東向き斜面基本遺構図 - 灰原検出時 (1:200)	12
第 9 図	掘立柱建物 051SB (1:100)	13
第 10 図	東向き斜面の遺構 (1:100)	14
第 11 図	緩傾斜面 040SX 土層断面 (1:50)	15
第 12 図	土坑 036SX 土層断面 (1:50)	15
第 13 図	土坑 037SX・038SX 土層断面 (1:50)	15
第 14 図	土坑 036SX 遺物出土状況 (1:50)	16
第 15 図	西向き斜面基本遺構図 (1:200)	17
第 16 図	窯体 001SY (1:50)	18
第 17 図	竪穴建物 002SX (1:50)	19
第 18 図	竪穴建物 002SX 遺物出土状況 (1:50)	20
第 19 図	竪穴建物 003SX 遺物出土状況 (1:50)	21
第 20 図	竪穴建物 003SX-1 (1:50)	22
第 21 図	竪穴建物 003SX-2 (1:50)	23
第 22 図	落ち込み 004SX 土層断面 (1:100)	24
第 23 図	土坑 005SK (1:50)	24
第 24 図	008SK (1:50)	24
第 25 図	028SK (1:50)	24
第 26 図	出土土器 (須恵器・土師器) の重量分布	25
第 27 図	須恵器・土師器器種分類	26
第 28 図	須恵器器種組成 (接合前破片数)	27
第 29 図	須恵器杯類の分類と組み合わせ、計測方法	28
第 30 図	須恵器杯類の組成 (接合前破片数)	29
第 31 図	蓋の摘みの分類	30
第 32 図	須恵器蓋 G・蓋 B 最大径度数分布	30
第 33 図	須恵器杯 G・杯 A・杯 B 口径度数分布	31
第 34 図	杯 B 高台の分類	32
第 35 図	蓋 G と杯 B の組み合わせと焼成時の積み重ねの復原	32
第 36 図	灰原出土須恵器杯類 1 (1:4)	34
第 37 図	灰原出土須恵器杯類 2 (1:4)	35
第 38 図	灰原出土須恵器杯類 3 (1:4)	36
第 39 図	灰原出土須恵器杯類 4 (1:4)	37
第 40 図	灰原出土須恵器杯類 5 (1:4)	38

第 41 図	灰原出土須恵器高杯・高盤 (1:4).....	41
第 42 図	灰原出土須恵器鉢類他 (1:4)	42
第 43 図	灰原出土須恵器壺類・甕 1 (1:4).....	43
第 44 図	灰原出土須恵器甕 2 (1:4)	44
第 45 図	灰原出土須恵器甕 3 (1:4)	45
第 46 図	灰原出土須恵器甕 4 (1:2)	46
第 47 図	灰原出土須恵器フラスコ形長頸瓶・長頸瓶 (1:4)	47
第 48 図	灰原出土須恵器長頸瓶 (1:4)	48
第 49 図	灰原出土須恵器大型長頸瓶・平瓶 (1:4)	49
第 50 図	灰原出土その他須恵器・土師器 (1:4)	51
第 51 図	土坑 036SX 出土須恵器杯類 1 (1:4).....	53
第 52 図	土坑 036SX 出土須恵器杯類 2・高杯 (1:4)	54
第 53 図	土坑 036SX 出土須恵器鉢類・瓶類 (1:4)	55
第 54 図	土坑 036SX 出土須恵器甕・土師器 (1:4)	56
第 55 図	緩傾斜面 040SX 出土須恵器 (1:4)	57
第 56 図	竪穴建物 002SX 出土須恵器・土師器 (1:4)	58
第 57 図	002SX 出土転用砥具 (1:2)	59
第 58 図	竪穴建物 003SX 出土須恵器杯類・高杯 (1:4)	60
第 59 図	竪穴建物 003SX 出土須恵器・土師器 (1:4)	61
第 60 図	003SX 出土砥石 (1:4).....	62
第 61 図	003SX 出土鉄鏝 (1:2).....	62
第 62 図	土坑 005SX・遺構外出土須恵器 (1:4)	63
第 63 図	釉着資料・転用焼台 (1:4)	65
第 64 図	丁子田 1 号窯跡の集積 (1:20)	72
第 65 図	湖西窯跡群における竪穴建物の諸例 (1:200)	74
第 66 図	東中田 A 古窯と白砂ヶ谷 D - 10 号墳の有蓋長頸瓶 (1:8)	79

〈挿 表 目 次〉

第 1 表	出土土器（須恵器・土師器）集計表（接合前破片数）.....	27
第 2 表	須恵器杯類集計表（接合前破片数）.....	29
第 3 表	測定試料及び処理	67
第 4 表	試料 No.12・13・16 の放射性炭素年代測定と暦年較正の結果	68
第 5 表	試料 No. 6 の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果..	68
第 6 表	試料 No.15 の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果..	68
第 7 表	樹種同定結果一覧.....	69
第 8 表	湖西窯跡群竪穴建物一覧	74
第 9 表	器種の構成	75

〈本文写真目次〉

写真 1	調査の経過	3
写真 2	周辺の遺跡	5
写真 3	出土炭化材の顕微鏡写真	71

〈写真図版目次〉

東中田A古窯遠景・全景	91
小支谷の谷底付近に形成された灰原（１）	92
小支谷の谷底付近に形成された灰原（２）	93
小支谷の谷底付近に形成された灰原（３）	94
灰原土層断面	95
東向き斜面の遺構	96
土坑 036SX	97
西向き斜面の遺構（１）	98
西向き斜面の遺構（２）	99
窯体 001SY（１）	100
窯体 001SY（２）	101
竪穴建物 002SX（１）	102
竪穴建物 002SX（２）	103
竪穴建物 003SX 全景	104
竪穴建物 003SX 土層断面・遺物出土状況（全景）	105
竪穴建物 003SX 遺物出土状況（近景）	106
竪穴建物 003SX 竈・焼土	107
竪穴建物 003SX 周辺・付属施設	108
西向き斜面のその他の遺構	109
出土遺物集合写真（１）	110
出土遺物集合写真（２）	111
灰原出土須恵器杯類（１）	112
灰原出土須恵器杯類（２）	113
灰原出土須恵器杯類（３）	114
灰原出土須恵器杯類（４）	115
灰原出土焼成不良須恵器杯（１）	116
灰原出土焼成不良須恵器杯（２）	117
灰原出土須恵器杯類（５）	118
灰原出土須恵器高杯	119
灰原出土須恵器鉢類他・甕	120
灰原出土須恵器瓶類	121
灰原出土須恵器その他の器種・土師器甕	122
土坑 036SX 出土須恵器杯類（１）	123
土坑 036SX 出土須恵器杯類（２）	124
土坑 036SX 出土須恵器瓶類	125
土坑 036SX 出土須恵器甕・緩傾斜面 040SX 出土須恵器杯類	126
竪穴建物 002SX 出土須恵器・転用砥具	127
竪穴建物 003SX 出土須恵器杯類（１）	128
竪穴建物 003SX 出土須恵器杯類（２）	129
竪穴建物 003SX 出土須恵器・製塩土器	130
竪穴建物 003SX 出土石製品・窯壁・鉄製品・西向き斜面出土須恵器	131
釉着資料・転用焼台	132

第1章 調査の概要

(1) 調査の経緯

東中田A古窯（県登録番号 79712、市登録番号 91-14）は豊橋市南東部の東細谷町字東中田地内（北緯 34 度 41 分 33 秒・東経 137 度 28 分 52 秒）に所在する古代前期の須恵器の古窯跡である（第1図）。遺跡の地目は畑地で、周囲には若干の須恵器破片が散布している。

遺跡の位置

古窯跡は一里山窯跡群、または湖西窯跡群一里山支群の一角に分布し、昭和 58 年の時点では畑地の造成時に削られた法面に 4 基以上の須恵器窯が存在していたとされる。しかし、その後の開発によってほとんどが滅失し、調査前は西向き斜面に窯体 1 基の断面が露出した状態で辛うじて残されているのみであった。

4 基以上の窯体

窯体 1 基の断面

発掘調査は一般国道 23 号豊橋東バイパス建設工事に伴う事前調査で、国土交通省中部地方整備局名四国道事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（当時、現公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。調査期間は平成 19 年 7 月 2 日から 19 年 10 月 6 日、調査面積は 1,591 m²（調査担当：酒井俊彦・岡久雅浩・早野浩二）である。

調査の経緯

調査期間・面積

文献

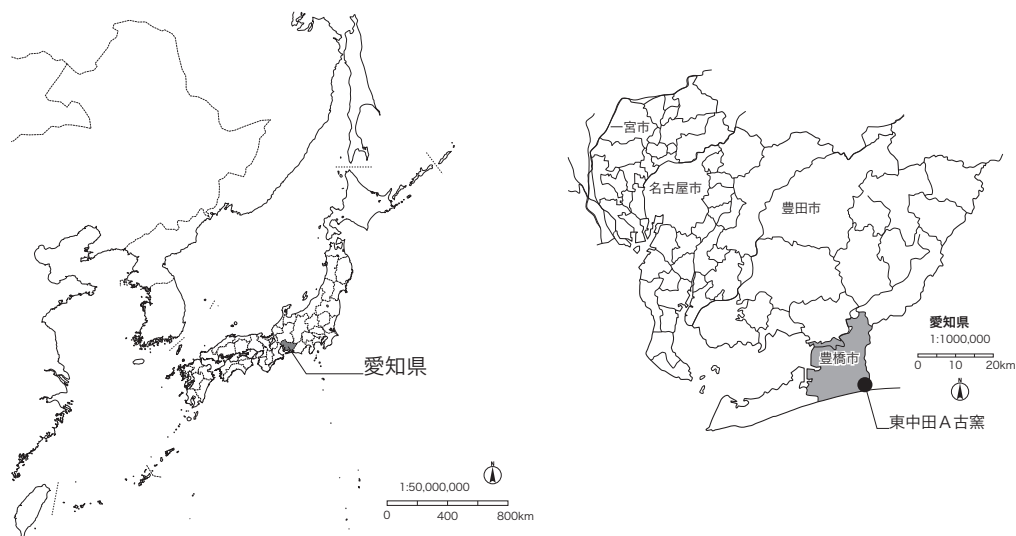
愛知県教育委員会1996『愛知県遺跡地図（Ⅲ）東三河地区』

豊橋市教育委員会2004『市内遺跡詳細分布調査報告書』

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター2007『東中田A古窯現地説明会資料』

芳賀陽2008「歴史的環境」『中田古窯』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第98集 豊橋市教育委員会

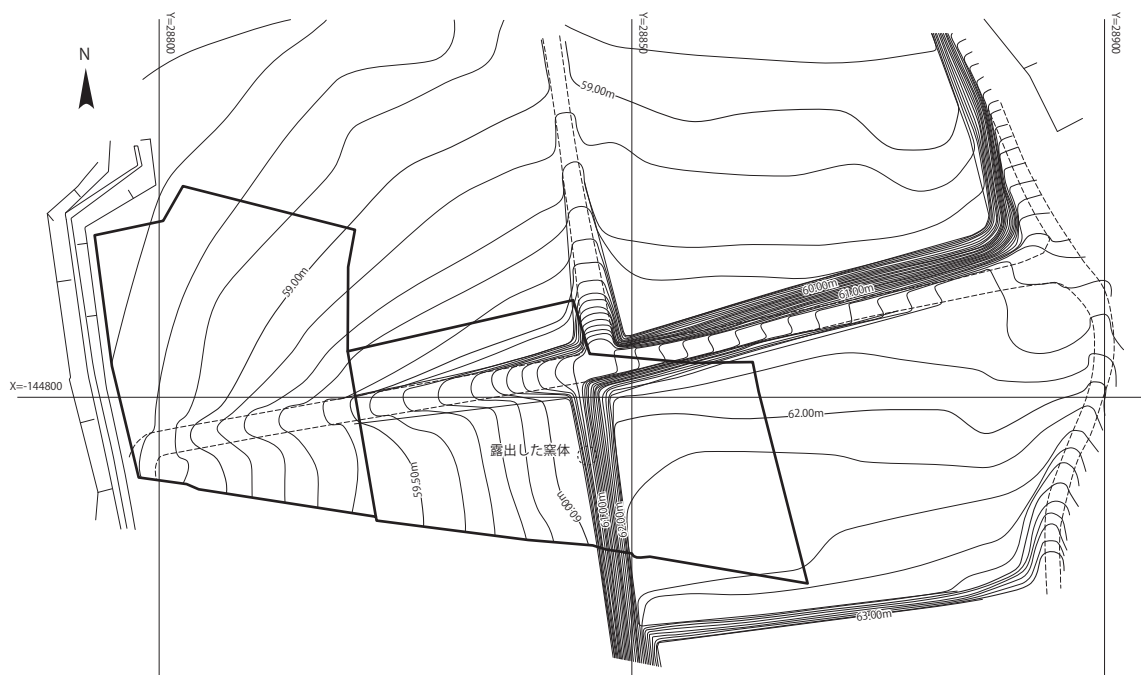
早野浩二2008「東中田A古窯」『年報 平成19年度』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター



第1図 遺跡の位置

(2) 調査の経過

調査区の設定	発掘調査は、事業区域内に露出した窯体を中心として 800 m ² の調査区を設定し、7月17日に重機による表土掘削を開始した。露出した窯体に伴う灰原が検出されないまま、表土掘削を継続していたところ、窯体からかなり離れた位置、地表下約2mで灰原の一部を確認した。しかし、その大部分は調査区外に展開していることが判明したため、愛知県教育委員会を交えて協議した結果、調査面積を変更することを決定した。そこで、範囲確認調査によって改めて灰原の範囲を把握し、調査面積 1,591 m ² の調査区を新たに設定した(第2図)。
調査の着手	
調査面積の変更	
窯体	一方、窯体の周辺を精査したところ、露出した窯体の延長部分は検出されず、結果として、窯体は煙道部分のみが残存しているのみであることが判明した。ところが、予想に反して窯体の背後に竪穴建物が良好な状態で検出され、窯業生産に関連する遺構についての重要な成果が得られることとなった。また、灰原では比較的まとまった量の遺物が出土した。
竪穴建物	
灰原	
記録作業	これらの遺構・遺物の精査と併行して、遺構平面図・土層断面図・遺物出土状況図等の作成、遺構検出状況・遺物出土状況等の写真撮影による記録作業を実施し、遺構・遺物の精査が一定程度進捗した段階の9月13日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。続けて9月15日には現地説明会を開催し、近隣の住民を中心に約80人が参加した。10月3日には記録作業を含めた調査、10月6日には調査区の埋め戻しと資材の撤去までの作業を完了した。
空中写真撮影	
現地説明会	
調査の完了	出土遺物の洗浄は発掘調査期間中に現地で実施し、洗浄した遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにおいて仮収納した。遺物の分類・接合・実測・復元・図版作成・写真撮影・収納等の整理作業、報告書の執筆・編集は平成23年12月から平成24年3月までの4ヶ月の期間内に実施し、平成25年3月に本書を刊行した。
整理作業	
報告書作成	
印刷・刊行	



第2図 調査前の地形と調査区の配置 (1:500)



調査着手前の状況（遠景）



調査着手前の状況（窠体付近）



表土掘削・範囲確認調査



窠体の調査



竪穴建物の調査



灰原の調査



現地説明会

写真1 調査の経過



調査完了後の状況

第2章 周辺の環境

(1) 地形・地質

弓張山地	弓張山地は赤石山脈から派生し、愛知県と豊橋市の東限を画す。これらの山々の標高は250～400 mで、三波川変成岩類や秩父帯の堆積岩類あるいは塩基性火山岩類等から形成されている。その弓張山地の南麓を西流して三河湾に注ぐのが梅田川である。
梅田川	
天伯原面	梅田川左岸、弓張山地南端と遠州灘の間は、海成とされる渥美層群が堆積して上位段丘面の天伯原面が形成されている。天伯原面は渥美半島の基部を浜名湖西岸から渥美半島に連続し、南縁は懸崖をなして遠州灘に接している。一方、梅田川の河谷に向けて緩やかに傾斜する北向きの斜面は境川、精進川、落合川などの支流や多数の小支谷によって谷奥深くまで開析され、複雑で入り組んだ谷地形を生成している。
精進川	東中田A古窯は精進川に向かって開口する小谷の最奥部に近い西向き斜面、東向き斜面に立地する。台地上の標高は62 m前後、谷底付近の標高は57 m前後である。
標高	

文献

石川明弘2003「位置と環境」『東籠田古窯・橋良東郷古窯』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第74集 豊橋市教育委員会
 豊橋市教育委員会2004『市内遺跡群詳細分布調査報告書』
 芳賀陽2008「地理的環境」『中田古窯』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第98集 豊橋市教育委員会

(2) 歴史

古窯と古墳	梅田川上流域左岸において確認されている遺跡は古窯と古墳が大半である（第3図）。
集落遺跡	集落遺跡等の遺跡はごく少なく、梅田川支流の落合川左岸に弥生時代中期から後期を中心として展開する西山遺跡が知られる以外、遺物散布地として、古代・中世の空池東遺跡、
遺物散布地	中世の三弥元屋敷遺跡、牛田遺跡、境川遺跡、古墳・古代・近世の道賢田遺跡、近世の松ヶ谷遺跡等が分布する程度である。その他、静岡県湖西市白須賀の山中において享和元年（1801）において近畿式銅鐸2点が発見され、1点が豊橋市小松原町の東観音寺に所蔵されている（他の1点は散逸）。
白須賀銅鐸	
古墳群	古墳は梅田川右岸、弓張山地の南麓に後期古墳が集中して分布し、上ノ山古墳群、西荒神古墳群、四ツ塚古墳群等を形成するが、すでに滅失した古墳も多い。梅田川左岸の後期古墳は右岸と比較して密集の度合いは低いが、丸山古墳、豊清古墳、比舎古墳、一里山古墳等が分布する。径10 m程度の円墳とされる豊清古墳は農地の開発により滅失したが、6世紀後半の須恵器と鉄器の出土が知られている。
一里山古窯群	飛鳥・奈良時代には梅田川左岸の天伯原一帯に多数の須恵器窯が築かれ、一里山古窯群（湖西窯跡群一里山支群）を形成する。古窯群は4、5 km 程度の範囲に東籠田古窯、弥栄古窯群、牛田古窯群、中田古窯群、一里山古窯群、境川古窯群、深田古窯群等、100基以上が分布するが、昭和40年代以降、農地の開発等によって旧来の地形そのものが失われつつあり、現状で窯跡の存在を認識することは困難となりつつある。東中田A古窯が立

地する谷筋にも、谷の奥部から東中田B古窯、中田D古窯（滅失）、中田C古窯、中田B古窯、中田A古窯が分布し、中田古窯発掘調査団によって1968年（第1次調査）に中田A古窯4基（中田1～4号窯）、1976年（第2次調査）に中田B古窯8基（中田5～10号窯）と中田C古窯2基（中田11・12号窯）の緊急発掘調査が実施されている。なお、第4図に掲載した遺物は東中田A古窯周辺の開発に伴って採集された須恵器である。

周辺の採集遺物

境川遺跡は1990年に国道1号線潮見バイパス建設に伴って財団法人愛知県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施され、灰原と竪穴建物2棟が確認されている。確認された遺構は東中田A古窯と同様、窯業生産に関連し、当地域における須恵器生産の一端を知る良好な事例となっている。

境川遺跡

これらの古窯群における奈良時代の須恵器生産は平安時代には連続せず、灰釉陶器と緑釉陶器は松明峠南西山麓の二川古窯群において生産されるようになる。こうした生産技術の移植と生産地、生産者の移動については、なお未解明な部分が多い。

二川古窯群

江戸時代には白須賀宿から二川宿を経由する東海道が通じ、一里山の由来ともなった一里塚が今なお残されている。昭和40年代には豊川用水の開通もあって、遺跡周囲は急速な農地化が進み、地域有数の農村地帯へと変貌した。

東海道と一里塚

豊川用水と農地化



一里塚



深田古窯群



境川遺跡遠景



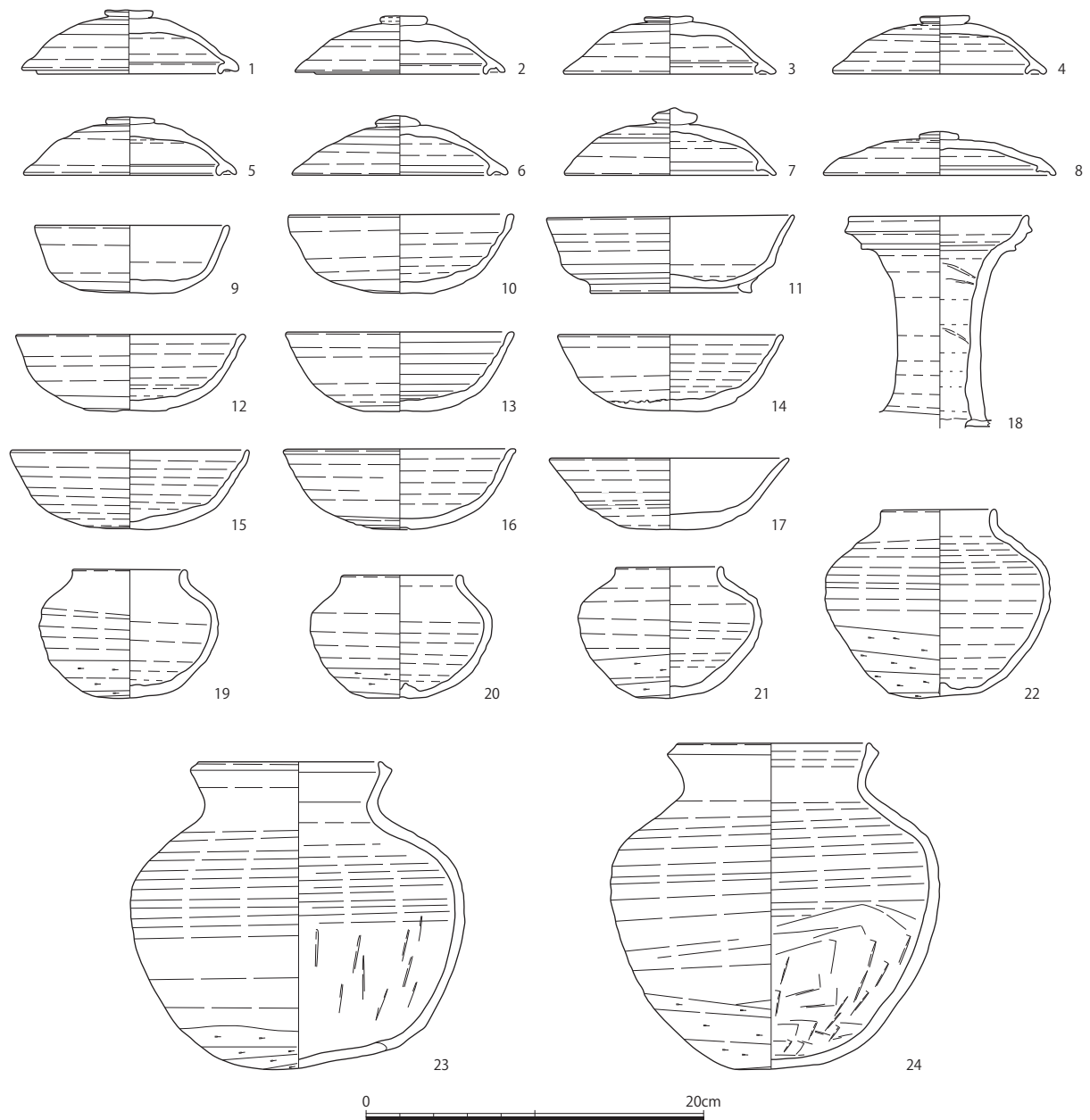
境川遺跡の調査

写真2 周辺の遺跡

東中田A古窯



第3図 周辺の遺跡 (1:25,000)



第4図 東中田A古窯周辺採集資料（個人蔵）

文献

- 愛知県教育委員会1983『愛知県古窯跡群分布調査報告書（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）』
 豊橋市遺跡調査会1988『西山』
 小林久彦1989「二川宿本陣発見の白須賀銅鐸之図」『三河考古』第2号 三河考古刊行会
 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1991『境川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第36集
 豊橋市教育委員会2000『二川古窯址群（Ⅰ）』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第52集
 豊橋市教育委員会2002『二川古窯址群（Ⅱ）』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第61集
 豊橋市教育委員会2003『東籠田古窯・橋良東郷古窯』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第74集
 豊橋市教育委員会2008『中田古窯』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第98集

東向き斜面も段状に地形が改変され、小支谷付近も客土を除去すると灰原が露呈する部分が少なくなかった。調査区内の東向き斜面に窯体は検出されなかったが、灰原の堆積状況、前庭部と思われる緩傾斜面 040SX、窯体に付属すると思われる土坑 036SX 等から調査区南西端付近が窯体の前庭部付近に相当することが想定される。

東向き斜面の遺構
前庭部？
土坑

(2) 灰原

検出状況と堆積状況

小支谷の谷底付近において須恵器窯に伴う灰原を検出した（第6～8図）。灰原は南北方向の小支谷に沿って、約8mの幅で検出された。灰原は調査区南端付近が最も厚く、層厚は最大約0.7mである。灰原は明瞭ではないが、黒色を基調とする下層と、黒褐色を基調として黄褐色土が混じる上層に区分され、灰原上層の上面には黄褐色土が堆積する。灰原の遺物は「下層」、「上層」に区分して採取し、灰原上位の堆積層中の遺物は、客土中を含めて灰原（上層）の上面を完全に露出するまでの過程で出土した遺物と併せて、「灰原上位（の包含層）」の遺物として扱った。斜面の南西部分の灰原の最下層には灰を中心として形成された灰層（灰白色砂質土層）も確認された。

小支谷付近の谷底

下層・上層
灰原上位の包含層

灰層

遺物出土状況

調査区南端の灰原下層中には焼成不良の須恵器杯の集積が確認されたが、遺物は調査区の壁面に一部が露出したのみであったことから、詳細な出土状況を記録することはできなかった。完全に遺物を採取することはできなかったが、須恵器杯は無蓋の無台杯（123～144）のみで構成される。上位の包含層を含め、灰原からは須恵器杯類（1～184）、高杯（185～209）、鉢・盤類（210～238）、壺・甕・瓶類（241～371）、円面硯（377～379）、陶鍾（380～383）、陶馬（384・385）等の各器種、土師器甕（387・388）、杯または碗（389）、その他、釉着資料・転用焼台（615～617・619～635）や窯壁、炭化材が出土した。

焼成不良の須恵器

出土遺物

溝048SD

調査区南端近くの灰原下位には溝状の落ち込み048SDが検出された。048SDは幅約1.0m、深さ約0.6mを計測し、礫層を断面箱形に掘削する。溝内から遺物は出土していないが、上層または灰原（下層）の下位には窯壁片を大量に含む層が堆積する。溝は灰原形成以前に掘削されたことは確実であるが、詳細な掘削時期とその機能を明らかにすることは難しい。

灰原形成以前

灰原の形成と窯体

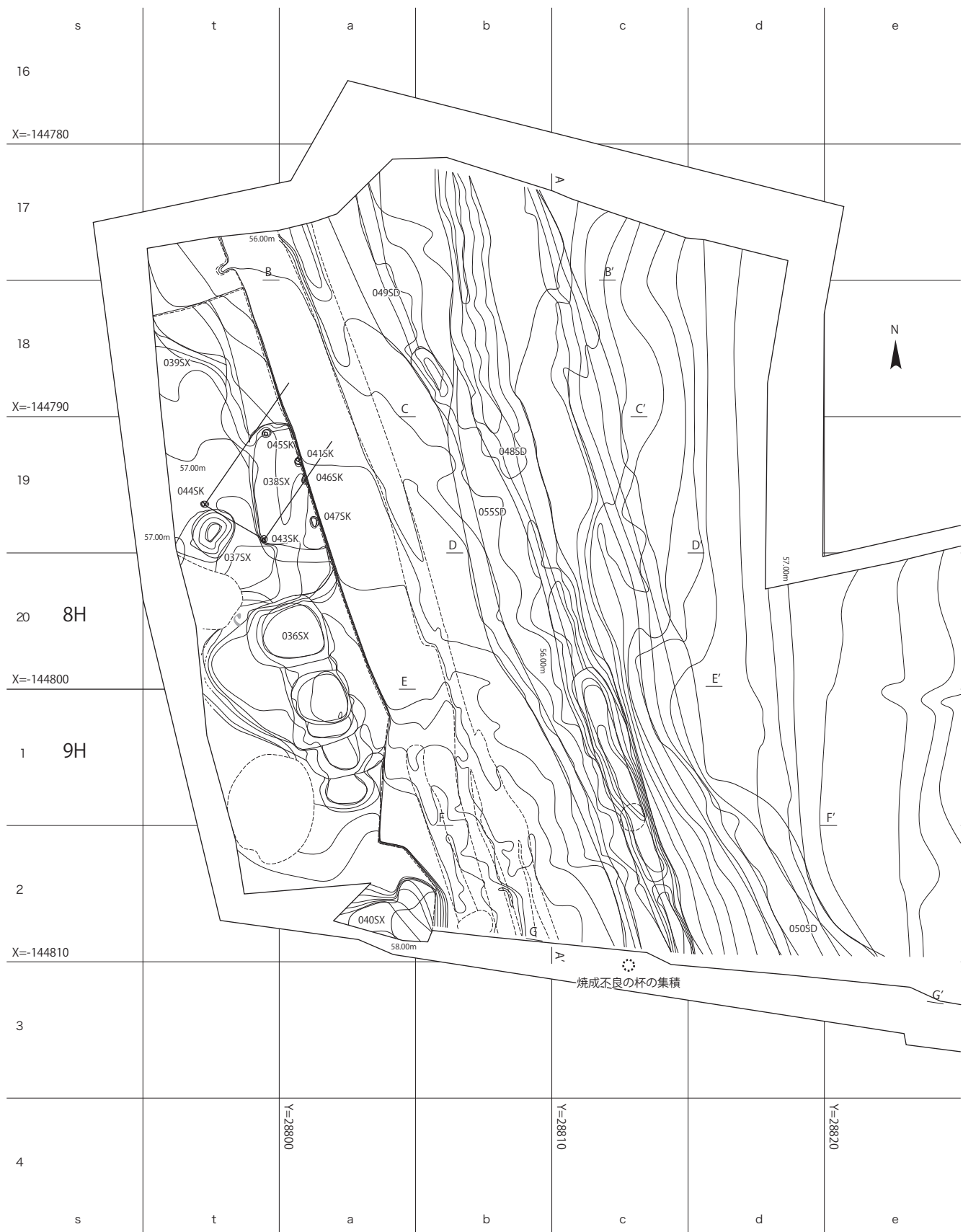
灰原の検出状況と堆積状況から、灰原は西向き斜面の窯体001SYに伴うものではなく、調査区外に存在する東向き斜面の未検出の窯体に伴うものと考えられる。後述する緩傾斜面040SX、土坑036SX等も考慮すると、灰原に伴う窯体は比較的近在に存在するものと思われる。

未検出の窯体

堆積状況から、灰原が複数基の窯体によって形成された状況を積極的に見出すことはできないが、西向き斜面の状況なども勘案すると、東向き斜面には複数の窯体が存在した可能性は高く、灰原が1基の窯によって形成されたことを断じることは難しい。

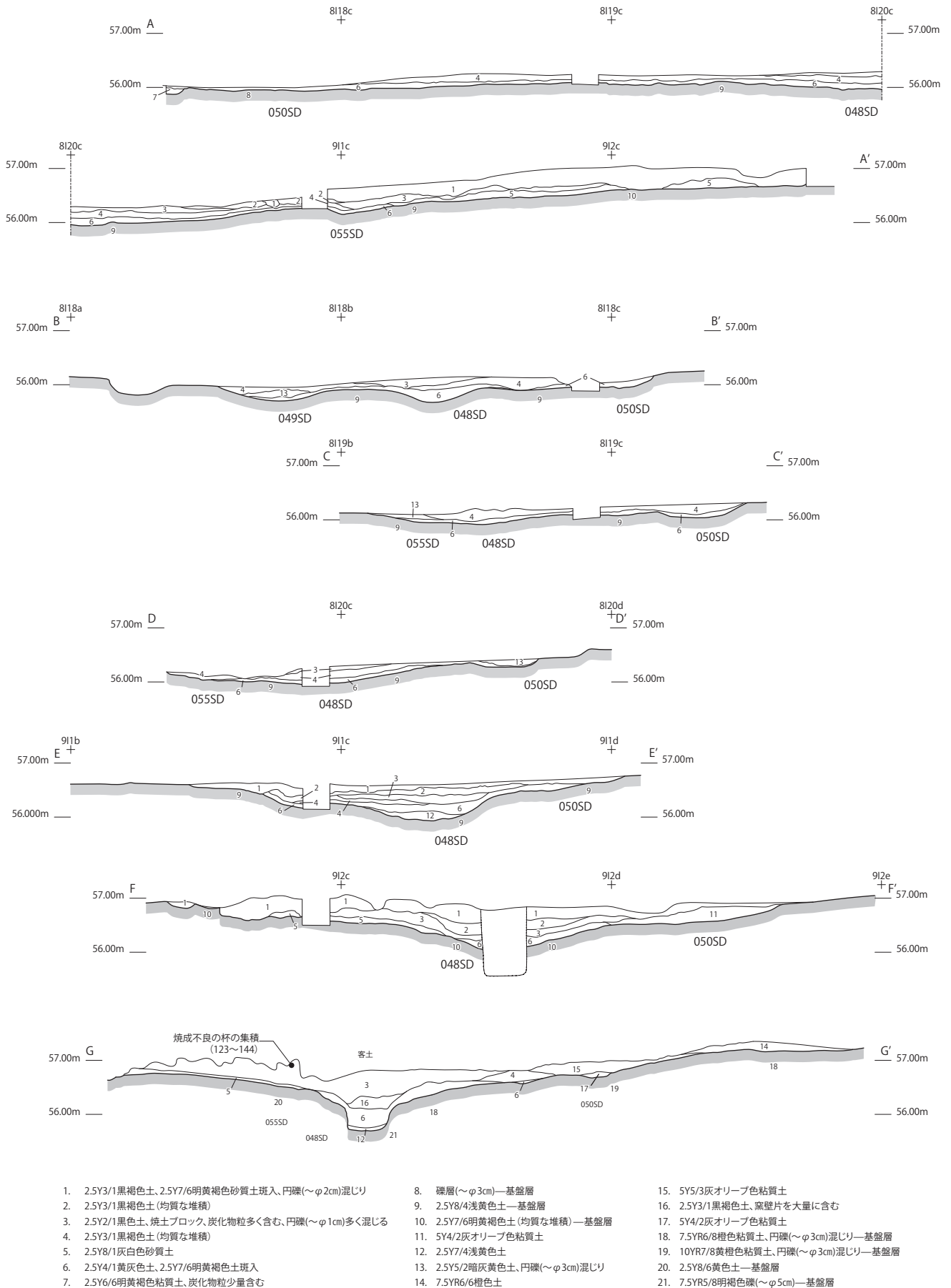
灰原の形成

東中田A古窯



第6図 東向き斜面基本遺構図-灰原完掘時 (1:200)

第3章 遺構



第7図 灰原土層断面 (1:100)

東中田A古窯



第8図 東向き斜面基本遺構図-灰原検出時 (1:200)

(3) 東向き斜面の遺構

緩傾斜面040SX

調査区南西端付近、造成面より約 0.6 m 高く残された部分において、明黄褐色粘質土上に灰を含む層、炭化物・焼土を多く含む黒色を基調とした層が堆積した緩傾斜面を確認した（第 10・11 図）。斜面は約 8° を計測する。堆積状況から、緩傾斜面は窯体に伴う前庭部の一部で、基盤層上の明黄褐色粘質土は築窯時の整地層の可能性もある。また、堆積層の類似から、灰層や黒色土層は小支谷の灰原に連続すると思われる。

040SX の黒色土中からは須恵器蓋（490・491）、長頸瓶（492）が出土している。

土坑036SX

造成された段上において検出された土坑で、土坑の上位は径 8 m 程度の不整形の浅い落ち込み状を呈するが、下位は複数の土坑が連続して掘削されたような状況を呈する（第 10・12 図）。土坑の断面形状も、部分的に袋状を呈するなど、一定しない。土坑の上位は炭化材や焼土塊などを多く含む斑土、黒色土で埋積され、下位は黄褐色を基調とする粘質土が堆積する。埋土中には炭化材や焼土塊に加えて、窯壁、粘土塊、焼成不良の須恵器が多く含まれることから、036SX は東向き斜面の窯体に付属する土坑と考えられる。

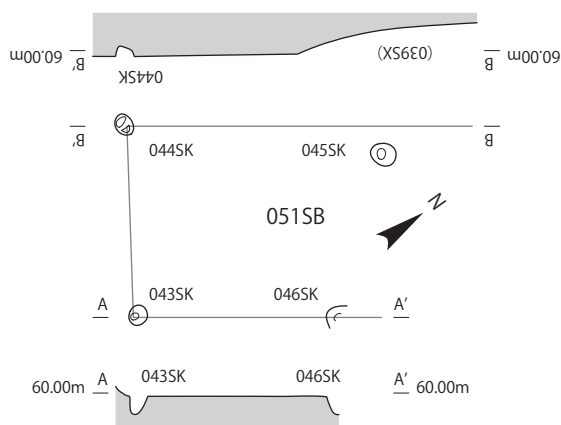
036SX からは須恵器杯類（390～449）、高杯（450）、鉢・盤類（451～459）、壺・甕・瓶類（460～486）等の各器種、土師器甕（487～489）、その他、釉着資料・転用焼台（618）が出土した。炭化材はマツ属、クヌギ節のミカン割り材、コナラ属、クリの破片等である（第 5 章（2）を参照）。

土坑037SX

造成された段上、036SX 付近において検出された土坑で、長径約 2.0 m、短径約 1.5 m の不整円形を呈する（第 10・13 図）。土坑は 036SX の堆積層に類似する黒色を基調とする層で充填されている。図示が可能な遺物は出土していない。

竪穴状遺構038SX

段の成形によって失われる部分が多いが、段上において辺約 5.0 m の竪穴状遺構として検出した（第 10・13 図）。遺構の底面は安定しないが、重複して柱穴と思われる小土坑 041SK・047SK も検出されていることから、竪穴建物の掘方のみを検出した可能性がある。



第9図 掘立柱建物051SB (1:100)

図示が可能な遺物は出土していない。

掘立柱建物051SB

やや不確実であるが、段上において検出した柱穴と思われる小土坑 043SK・044SK・045SK・046SK から復原した桁桁 1 間（約 3.3 m）以上、梁行 1 間（約 2.5 m）の建物である（第 9・10 図）。柱穴から図示が可能な遺物は出土していない。

灰層

前庭部の一部

灰原との関係

出土遺物

形状

堆積状況

出土遺物

炭化材

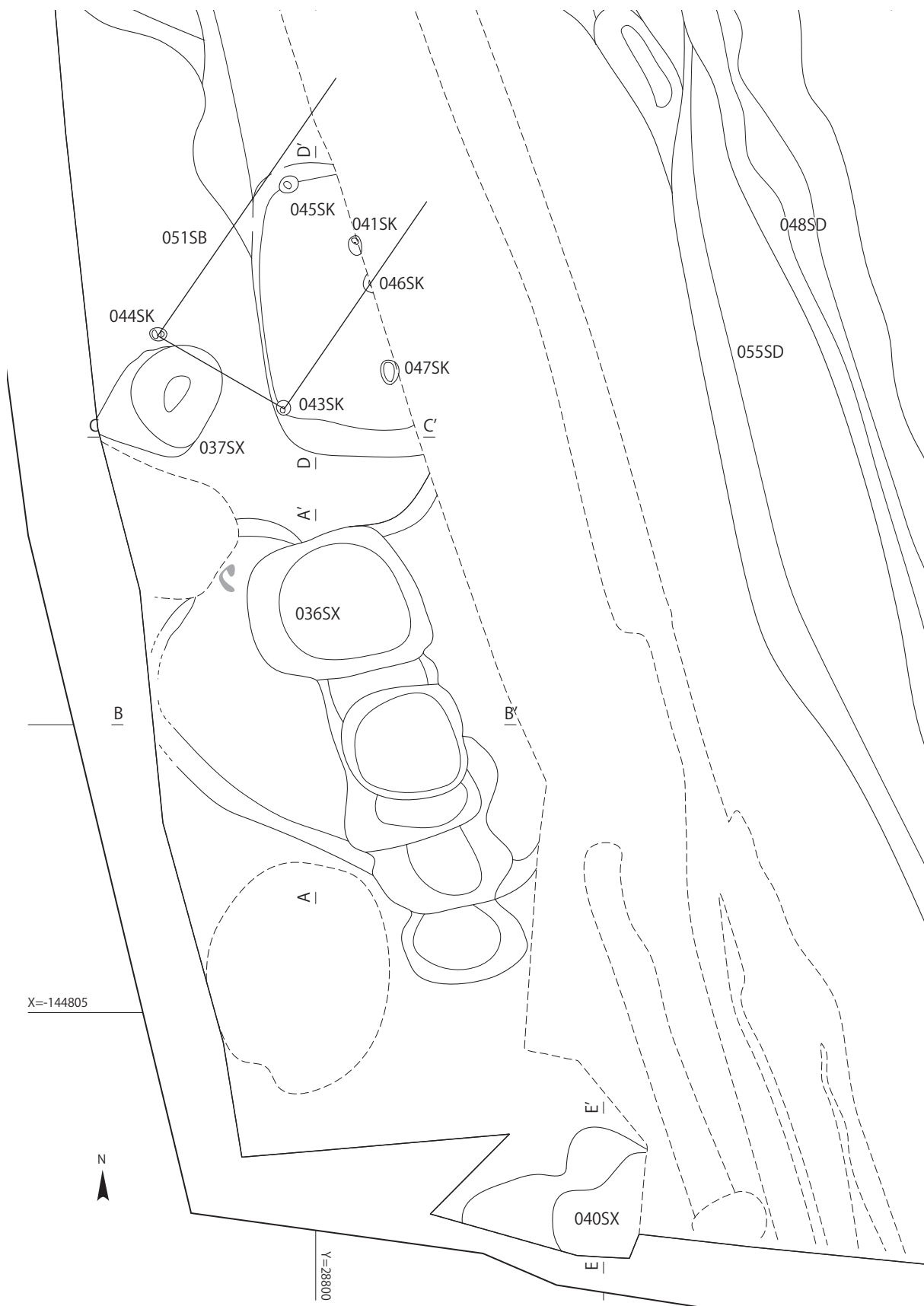
形状

堆積状況

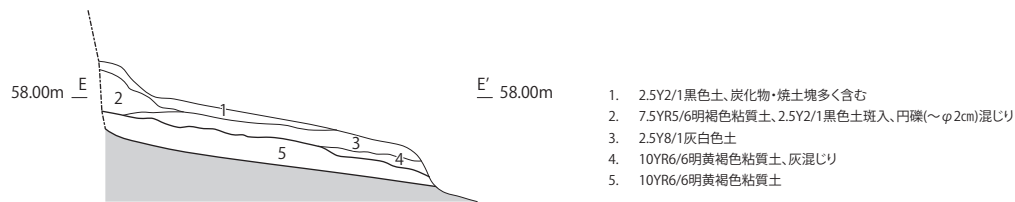
形状

小土坑

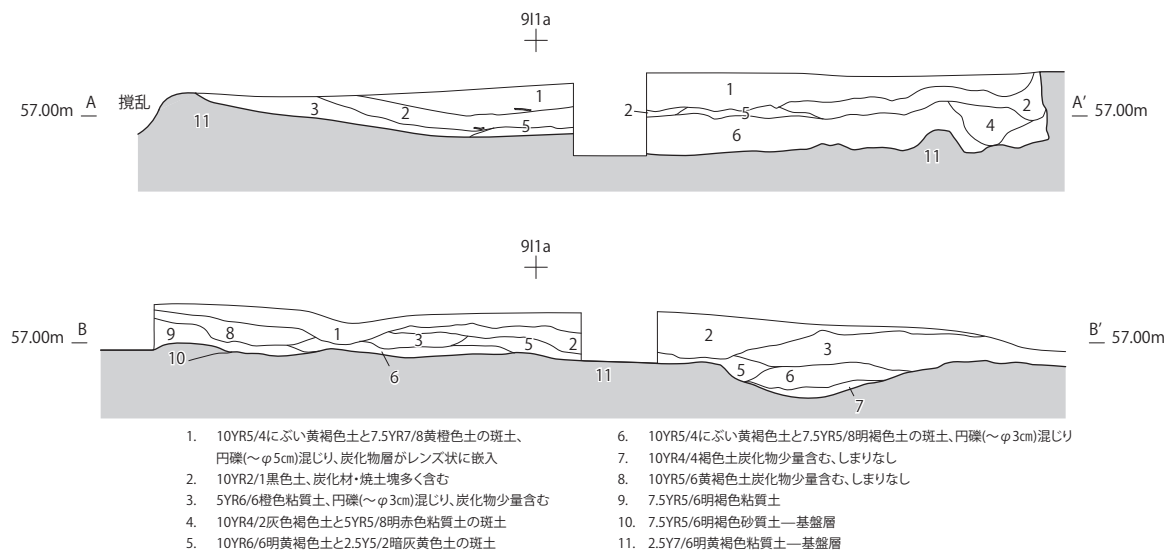
柱穴



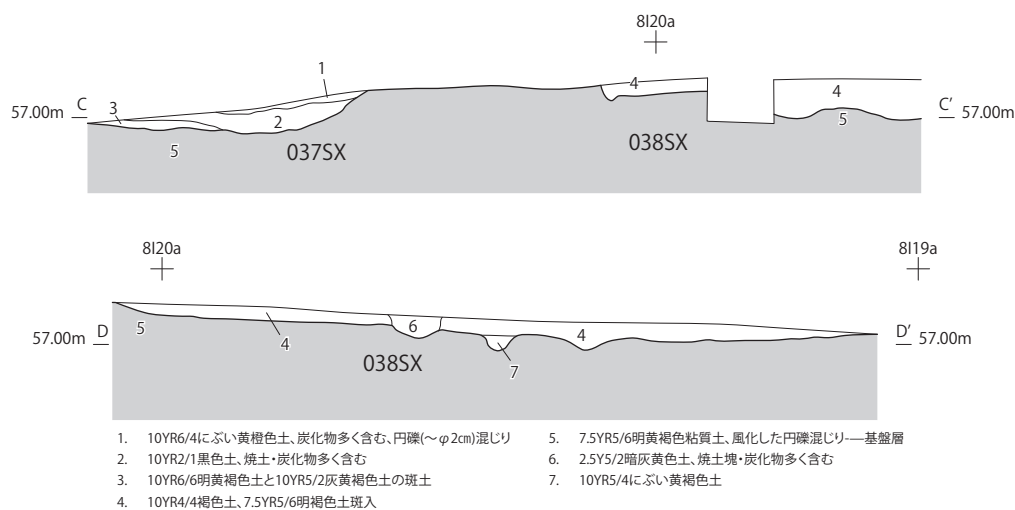
第10図 東向き斜面の遺構 (1:100)



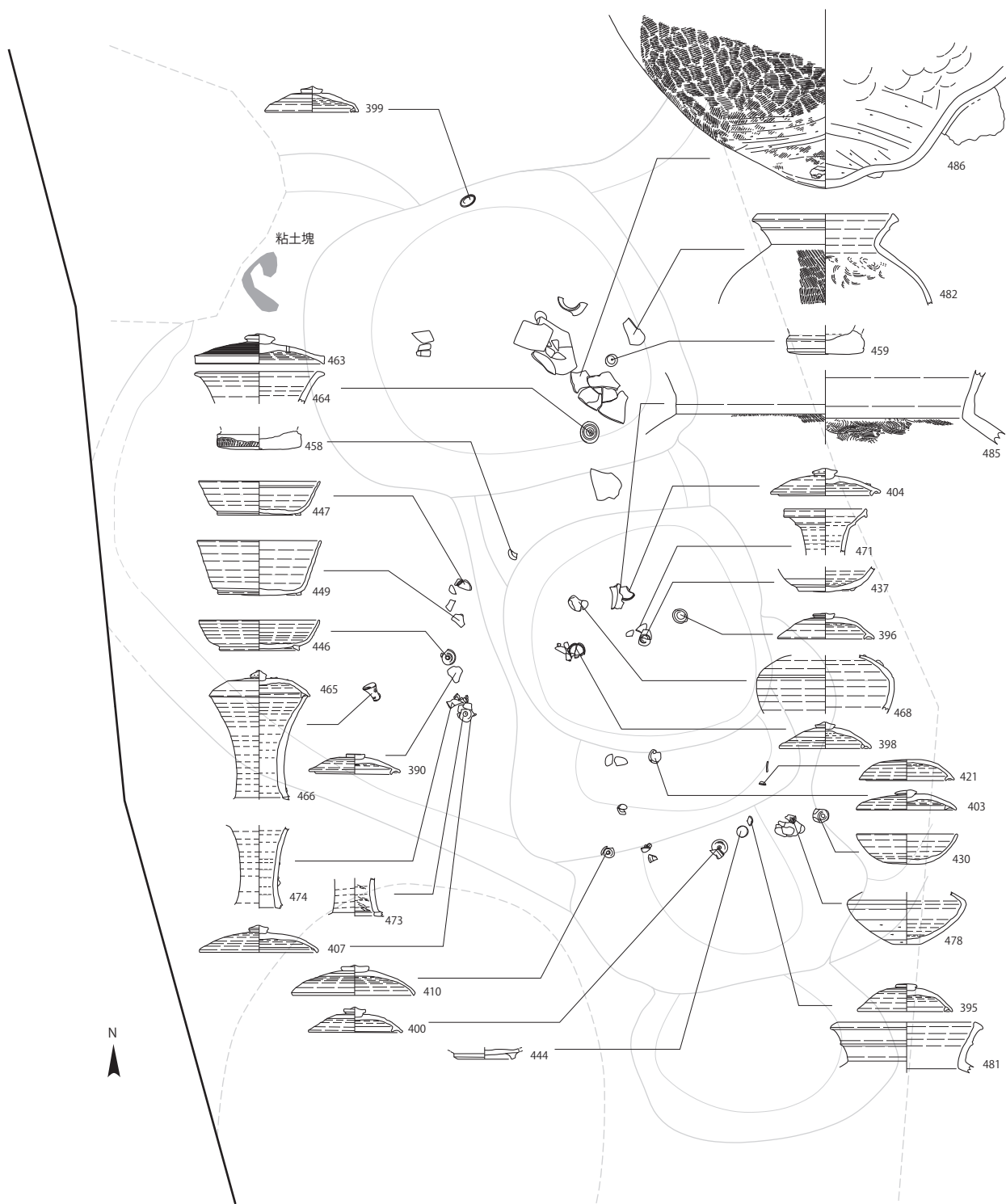
第11図 緩傾斜面040SX土層断面 (1:50)



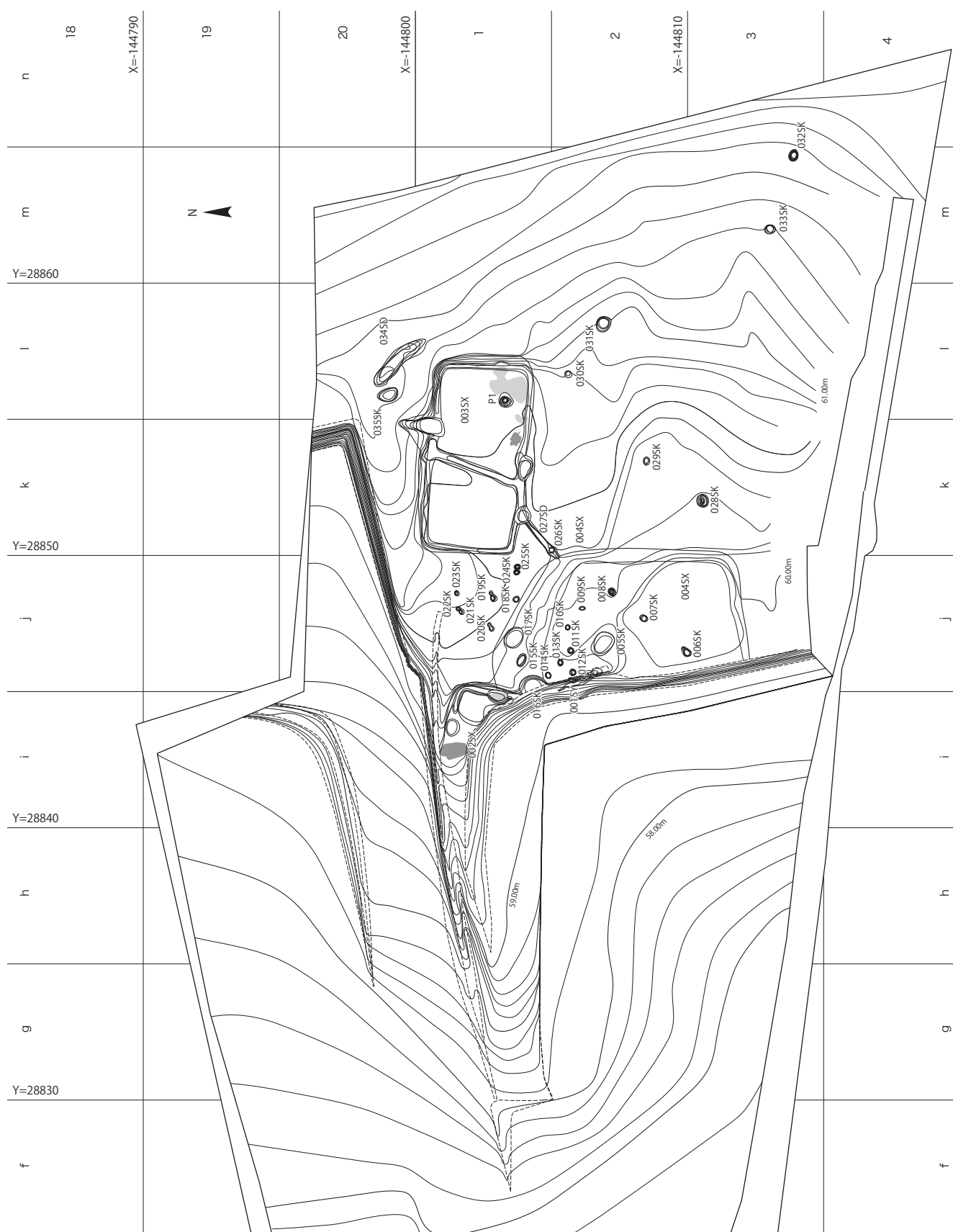
第12図 土坑036SX土層断面 (1:50)



第13図 土坑037SX・038SX土層断面 (1:50)



第14図 土坑036SX遺物出土状況 (1:50)



第15図 西向き斜面基本遺構図 (1:200)

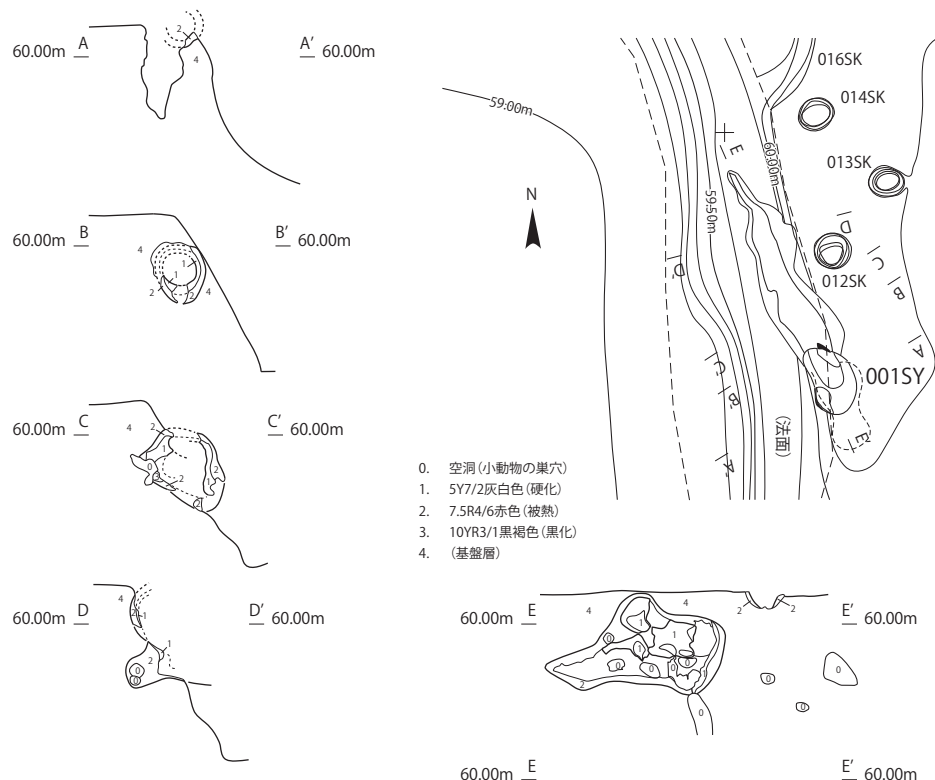
(4) 西向き斜面の遺構

窯体001SY

検出状況	調査前から西向き斜面の法面に露出していた窯体で、窯体の大部分はすでに失われ、煙道付近が残存するのみであった（第16図）。地形を考慮すると、窯体はほぼ東西方向を主軸として築かれていたと思われるが、煙道は基盤層を南東から北西方向にトンネル状に掘削されている。残存する部分における窯体の最大幅は約0.8m、高さ約0.4mである。
規模	
築窯・補修	わずかに残存する部分も小動物の巣穴による攪乱が著しく、詳細な観察は難しいが、煙道部分は地山に灰白色の粘土が貼られるのみで、明確な補修は認められない。窯体内から遺物は出土しなかったが、煙道内にはマツ属の炭化材（第5章（2）を参照）が残されていた。炭化材は年代測定の結果、11～12世紀の年代を示した（第5章（1）を参照）。
窯体内遺物	
炭化材	

竪穴建物002SX

検出状況	西向き斜面、窯体001SYの北側において北東部分のみを検出した竪穴建物である（第17図）。南西部分は土砂の採取によって大きく破壊され、北辺の一部は管の埋設、斜面側は土砂の流出、採取によって失われている。平面形は方形または長方形で、検出面からの深さは約0.45mを計測する。支柱穴、貼床は認められない。北辺に接して焼土、東辺に接して粘土溜まりと焼成不良の須恵器杯類の集積を検出した。
平面形・規模	
支柱穴・床面	
焼成不良の須恵器	
竈	焼土は北辺に接して長約1.0m、幅約0.6mの範囲で検出された。約0.1mの厚さでやや淡く赤変するが、硬化まではしていない。検出された位置から竈の可能性が考慮されるが、構造は明らかでない。焼土中においては須恵器甕の体部破片が検出された。須恵器甕は破片が重なった状態から、潰れたものではなく、破片を重ね置いたものであることを確認した。また、甕は003SX竈内において出土した破片と接合した。
須恵器甕	
接合関係	



第16図 窯体001SY (1:50)

粘土溜まりは長径約 0.75 m、短径約 0.5 m の浅い土坑状の落ち込みに青灰色粘土が検出されたもので、粘土の厚さは約 10cm である。粘土の上面には焼成不良の須恵器杯類が集積していた。

粘土溜まり

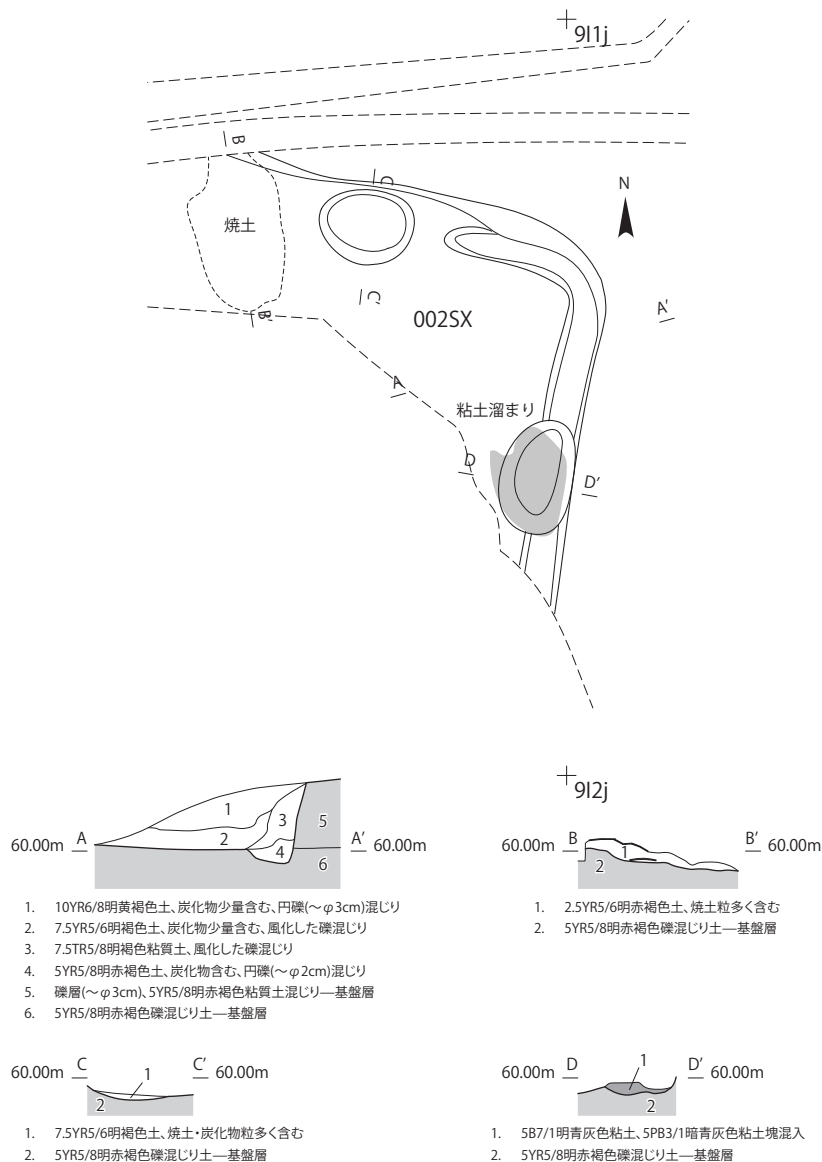
竪穴内からは須恵器蓋 (493 ~ 503)、有台杯 (504 ~ 507)、皿? (508)、無台杯 (509)、広口壺 (510・511)、平瓶 (512)、長頸瓶 (513)、ミニチュアの横瓶 (514) の各器種、土師器甕 (515 ~ 517) に加えて、焼成不良の須恵器杯類を転用した砥具 (518) が出土した (第 18 図)。

出土遺物

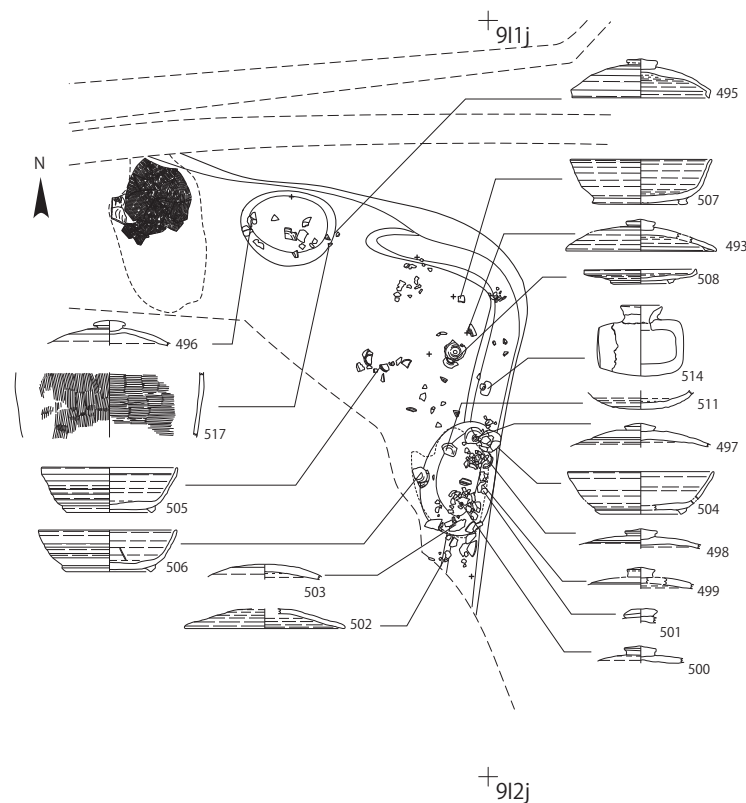
竪穴建物 002SX は後述の 003SX と同様、窯体の付近に位置すること、粘土溜まりが付属すること、出土土器の比率が須恵器 95.9%・土師器 4.1% で、一般的な竪穴建物と比較して須恵器の出土比率が著しく高いこと、竪穴内に焼成不良の須恵器が集積されていること、粘土溜まりが検出されていることから、須恵器窯に関連して設置された居住施設兼作業施設と考えられる (第 6 章 (1) を参照)。また、002SX は窯体 001SY に近接し、003SX と同程度の規模を想定すると、001SY に重複することから、001SY とは併存せず、すでに滅失した別の西向き斜面の窯体に付属する可能性が高い。

遺構の性格

窯体との関係



第17図 竪穴建物002SX (1:50)



第18図 縦穴建物002SX遺物出土状況 (1:50)

縦穴建物003SX

検出状況	西向き斜面、窯体 001SY 北東方向の背後において全形を検出した縦穴建物である（第20・21図）。検出面からの深さは0.6 mを計測し、残存状況は比較的良好である。
平面形・規模	平面形は長軸約7.4 m、短軸約4.0 mの長方形で、外部施設として外周溝 034SD と排水溝 027SD、内部施設として竈、周溝と間仕切り溝、ロクロピット P 1 が付随する。主
付属施設	柱穴は認められない。また、南東隅の P 1 に接した床面上に粘土溜まり、その付近に焼
主柱穴	土を検出した。
外周溝・排水溝	外周溝 034SD は縦穴の北東（斜面上方）側に弧状に掘削される。排水溝 027SD は縦穴の長辺の南西（斜面下方）側から南西方向に直線的に掘削され、窯体 001SY 周囲の落ち込み 004SX に重複する。両端で約0.15 mの高低差が認められ、約3°傾斜する。
間仕切り溝	縦穴内部は短辺に斜行する間仕切り溝によって、平面長方形の空間が台形の二室に分割
床面	される。床面は明黄褐色粘質土を貼って構築されるが、硬化は著しくない。
竈	竈は北辺の中央からやや東側に偏した位置に布設される。煙道までが残存し、天井が落下した状態で埋没していた。竈内の傾斜は約20°、煙道の傾斜は約65°である。竈の両側
竈内出土遺物	壁と床面は被熱によって赤変、硬化する。竈内からは蓋（580・581）、焼成不良の無高台の皿（582）、無台杯（583）、高杯（584）、製塩土器（585）が出土した。なお、竈内から出土した須恵器甕の破片は 002SX の竈に置かれていた須恵器甕と接合した。
ロクロピット	縦穴建物の南東隅において検出された P 1 は、他に主柱穴と思われる小土坑が縦穴内に認められないことから、主柱穴を構成する柱穴とは考えにくく、粘土溜まりが接してい

ること、土坑の断面形が有段状を呈することからロクロピットと推定した。上端の径約0.55m、床面からの深さ約0.45mを計測する。P1において出土した長頸壺の体部片(590)は、ロクロの軸木を固定する目的で埋め込まれた可能性がある。

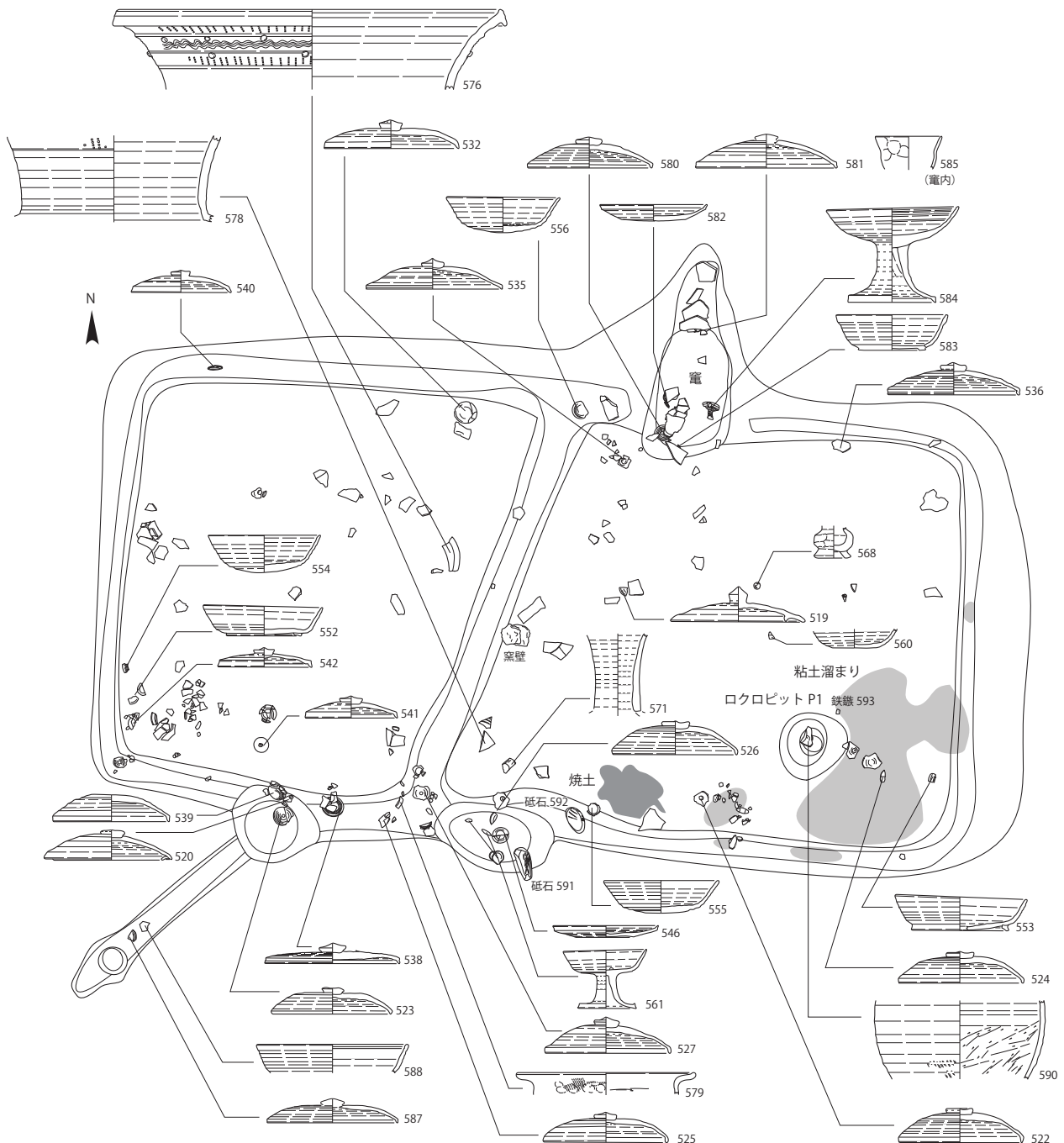
ピット出土遺物

粘土溜まりは床面上、ロクロピットP1に接して1.0～1.5m程度の範囲に灰白色粘土が薄く広がった状態で検出された。粘土の厚さは約3cmである。

粘土溜まり

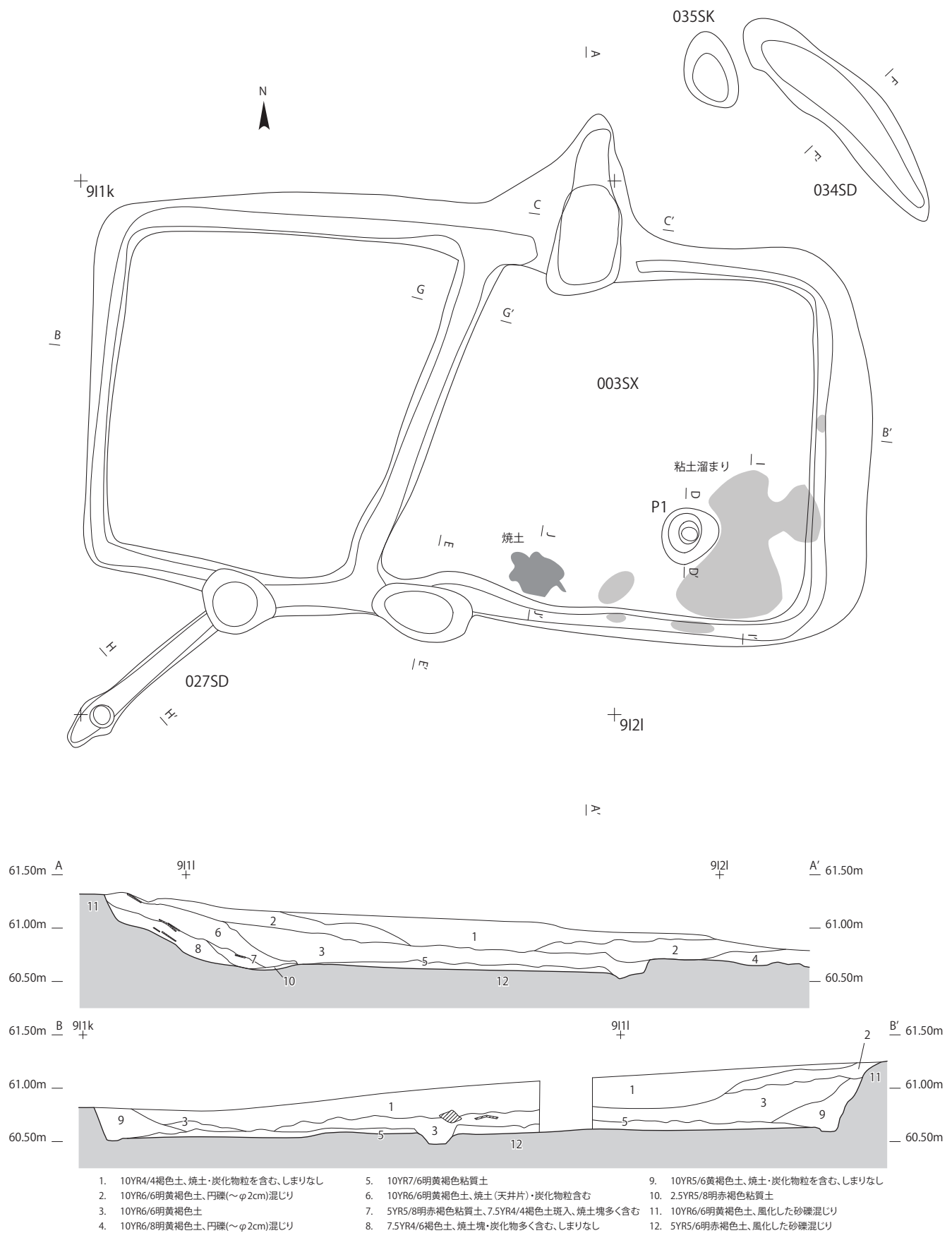
焼土は南辺近くにおいて0.4～0.5m程度の範囲で検出された。竈内と比較しても赤変、硬化が著しい。

焼土

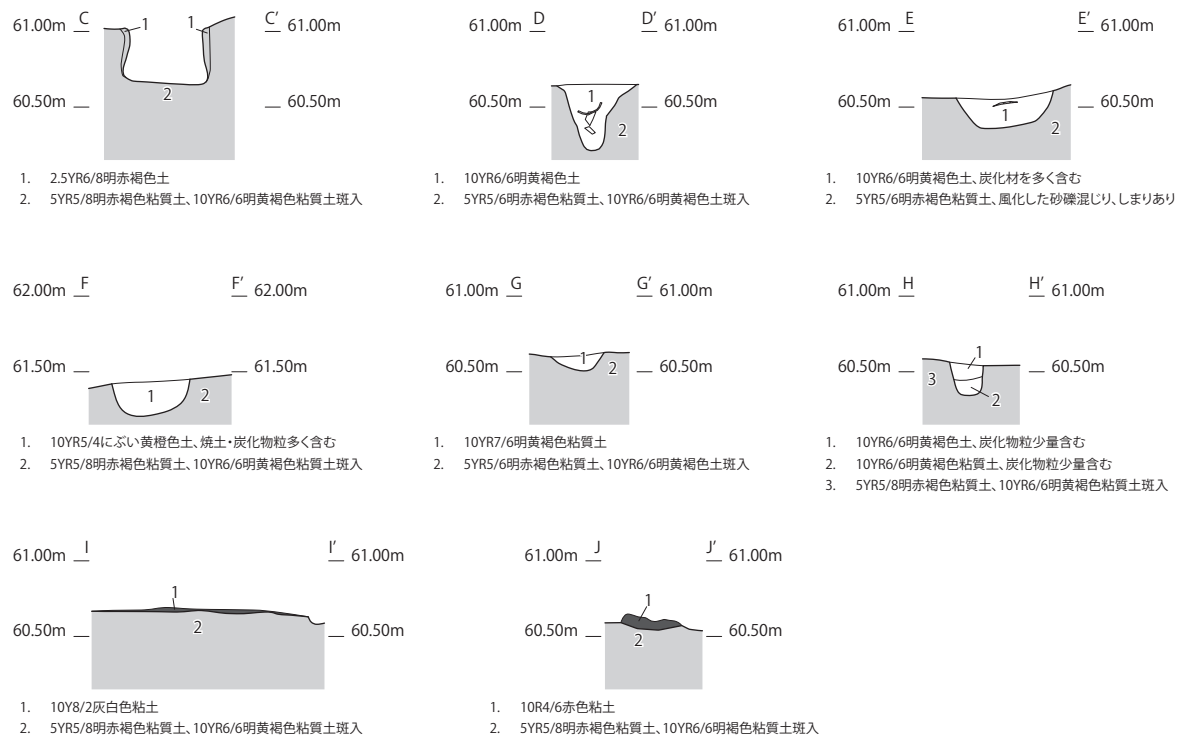


第19図 竪穴建物003SX遺物出土状況 (1:50)

東中田A古窯



第20図 竪穴建物003SX-1 (1:50)



第21図 竪穴建物003SX-2 (1:50)

竪穴内からは須恵器蓋 (519～542)、皿? (543～546)、有台杯 (547～553)、無台杯 (554～560)、高杯 (561)、高盤 (562)、陶臼 (563)、小型壺 (564)、広口壺 (565・566)、甕 (567)、ミニチュア長頸瓶 (568)、長頸瓶 (569～574)、平瓶 (575)、甕 (576～578) の各器種、土師器甕 (579) に加えて、凝灰質砂岩製の砥石 (591・592)、鉄鏃 (593)、その他、窯壁、炭化材が出土した (第19図)。遺物は床面付近から出土したものが多く、南西の周溝付近にやや集中する傾向がある。窯壁は約0.25m前後の大きさで、3.5kgを計測する。出土した炭化材はマツ属の丸木、クリのミカン割り材、コナラ節の破片である (第5章(2))を参照。出土した炭化材については、放射性炭素年代測定を実施した (第5章(1))を参照。

出土遺物

砥石・鉄鏃

窯壁

炭化材

竪穴建物 003SX は窯体の付近に位置すること、「連房式竪穴遺構」を連想させる竪穴の構造、粘土溜まりとロクロピットが付属すること、出土土器の比率が須恵器 97.0%、土師器 3.0% で、一般的な竪穴建物と比較して須恵器の出土比率が著しく高く、器種の構成が灰原とほとんど変わらないこと、窯壁や焼成不良品、その他砥石や鉄鏃等の特徴的な遺物が出土することから、須恵器窯に関連して設置された居住施設兼作業施設と考えられる (第6章(1))を参照。また、003SX は窯体 001SY との位置関係から、001SY に付属する可能性が高いと思われる。

遺構の性格

窯体との関係

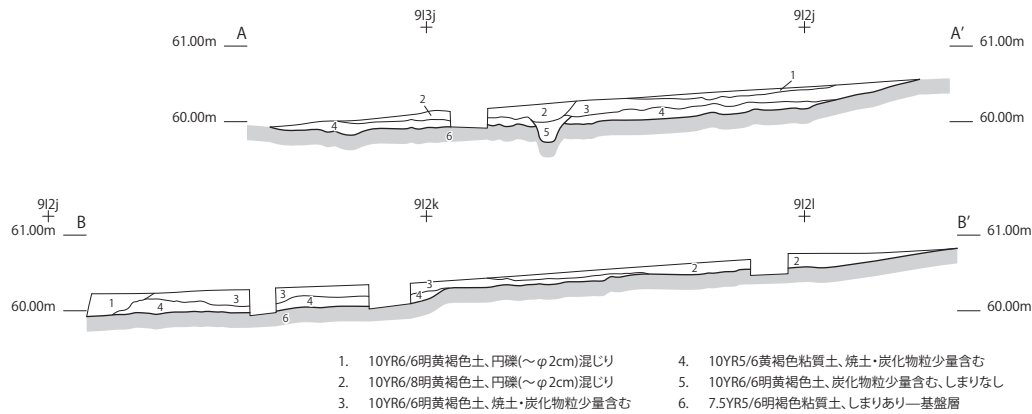
落ち込み004SX

窯体 001SY 周囲に南北約 9.0 m、東西 4.0 m 以上、検出面からの深さ約 0.5 m の浅い落ち込みを検出した (第22図)。重複関係から 001SY に後続する窯体に付属する作業施設と考えられる。出土遺物はごく少なく、須恵器蓋 (602) のみを図示した。

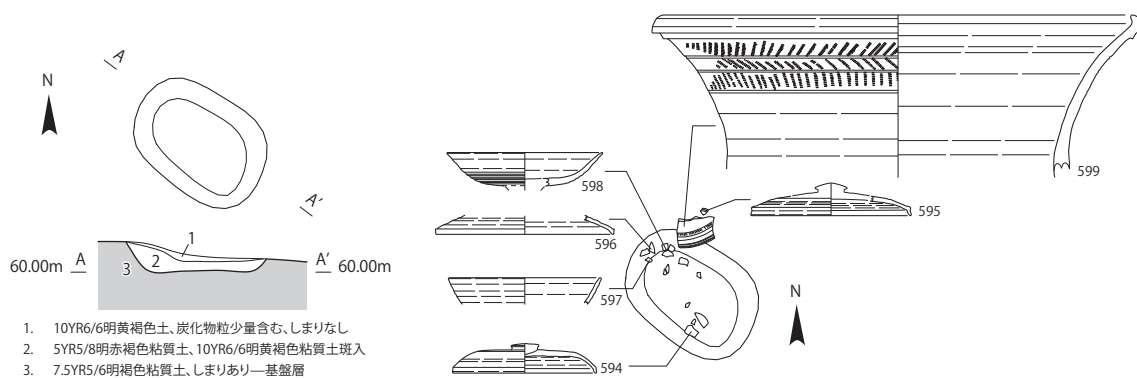
検出状況

出土遺物

東中田A古窯



第22図 落ち込み004SX土層断面 (1:100)



第23図 土坑005SK (1:50)

土坑005SK

検出状況 窯体 001SY 付近、落ち込み 004SX 底面において検出したが、004SX との新旧関係は明らかではない(第 23 図)。

規模 長径約 0.9 m、短径約 0.65 m、検出面からの深さ約 0.15 mを計測する(第 23 図)。

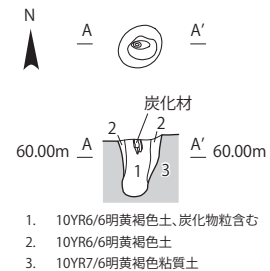
出土遺物 須恵器杯類(594～597)、高杯(598)、甕(599)がややまとまって出土した。

ロクロピット? 008SK

検出状況 窯体 001SY 付近の落ち込み 004SX 内において検出した(第 24 図)。004SX との新旧関係は明らかではない。

規模 検出面における径約 0.3 m、検出面からの深さ約 0.4 mを計測する。土坑中心付近には径約 6 cm のマツ属の炭化材が遺存する。

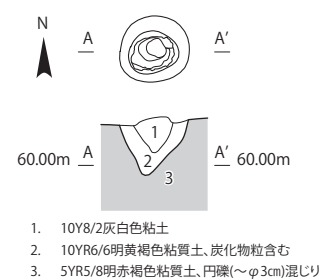
マツ属の炭化材 炭化材をロクロの軸木とすれば、小土坑はロクロピットの可能性がある。ただ、年代測定の結果、炭化材は 15 世紀の年代を示した(第 5 章(2)を参照)。



第24図 008SK (1:50)

土坑028SK

検出状況 西向き斜面において単独で検出した(第 25 図)。検出面における径約 0.4 m、検出面からの深さ約 0.4 mを計測する。土坑内には径約 0.25 m の円錐形を呈する粘土塊が埋められていた。



第25図 028SK (1:50)

第4章 遺物

(1) 概要

東中田A古窯において出土した遺物は須恵器が大部分で、その他、ごくわずかに土師器、石製品、鉄製品等がある。出土した須恵器と土師器の総点数（接合前破片数）、総重量・容積は計17,896点、358.1kg・27 l入りコンテナ54箱分（収納後）である（第26図）。これらの出土遺物について、須恵器蓋は全形の復原が可能な個体、その他の器種は個体識別と一定程度の部位の図化が可能な個体を中心に抽出、図化した。抽出、図化の対象としたのは2,148点（約12%）、80kg（約23%）・20箱分（約37%）である。

須恵器は17,738点（灰原と東向き斜面の西半部15,161点、西向き斜面の東半部2,384点、出土地点不明193点、総点数の99.1%）が出土した（第1表・第28図）。なお、東中田A古窯においては専用焼台は出土しておらず、破片を窯内において製品を安定させる支持具に転用した転用焼台が散見されるが、これら転用焼台についても、製品と同様に集計した。確認した器種は、杯類、（小型の）皿類？、高杯、高盤、鉢、陶臼、甕、広口壺、甕、長頸瓶（無蓋長頸瓶、有蓋長頸瓶、大型長頸瓶を含む）、フラスコ形長頸瓶、平瓶（大型平瓶を含む）、小杯、円面硯、陶錘、陶馬（その他、盤、碗は混入遺物の可能性がある）である（第27図）。出土した須恵器の60～70%は杯類で、以下、甕・瓶類が約20%、長頸瓶を含む壺類が約6%、高盤や陶臼を含む鉢・盤類が約1%を占める（第28図）。高杯を含め、その他の器種は1%に満たない。また、竪穴建物からの出土遺物が主となる西向き斜面の調査区東半部と比較しても大きく変わらない。この集計結果は、前後する時期の長久手市丁子田1号窯跡、同市ヶ洞1号窯跡とも同様の傾向を示し、この時期の須恵器窯として一般的な出土状況を示しているものと思われる。ただし、高杯の数量は東中田A古窯が少ない。

土師器は158点（西半部70点、東半部64点、出土地点不明24点、総点数の0.9%）が出土した（第1表）。確認した器種は甕が多い（143点、90.5%）。その他、製塩土器（14点、8.9%）、碗または杯（1点、0.6%）がある。

出土遺物の構成
点数・重量・容積

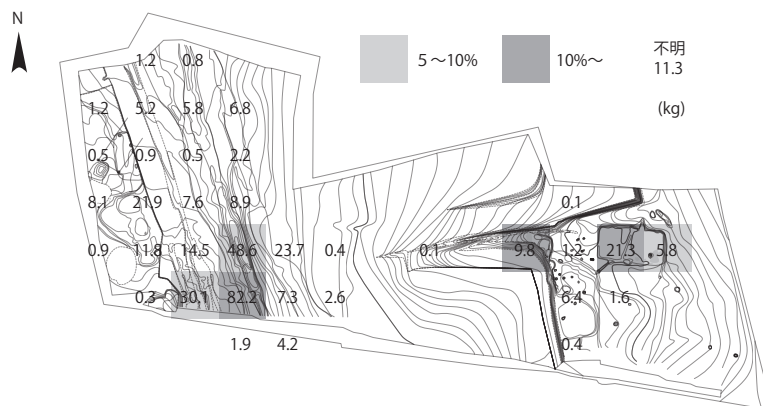
抽出・図化

須恵器
転用焼台

器種

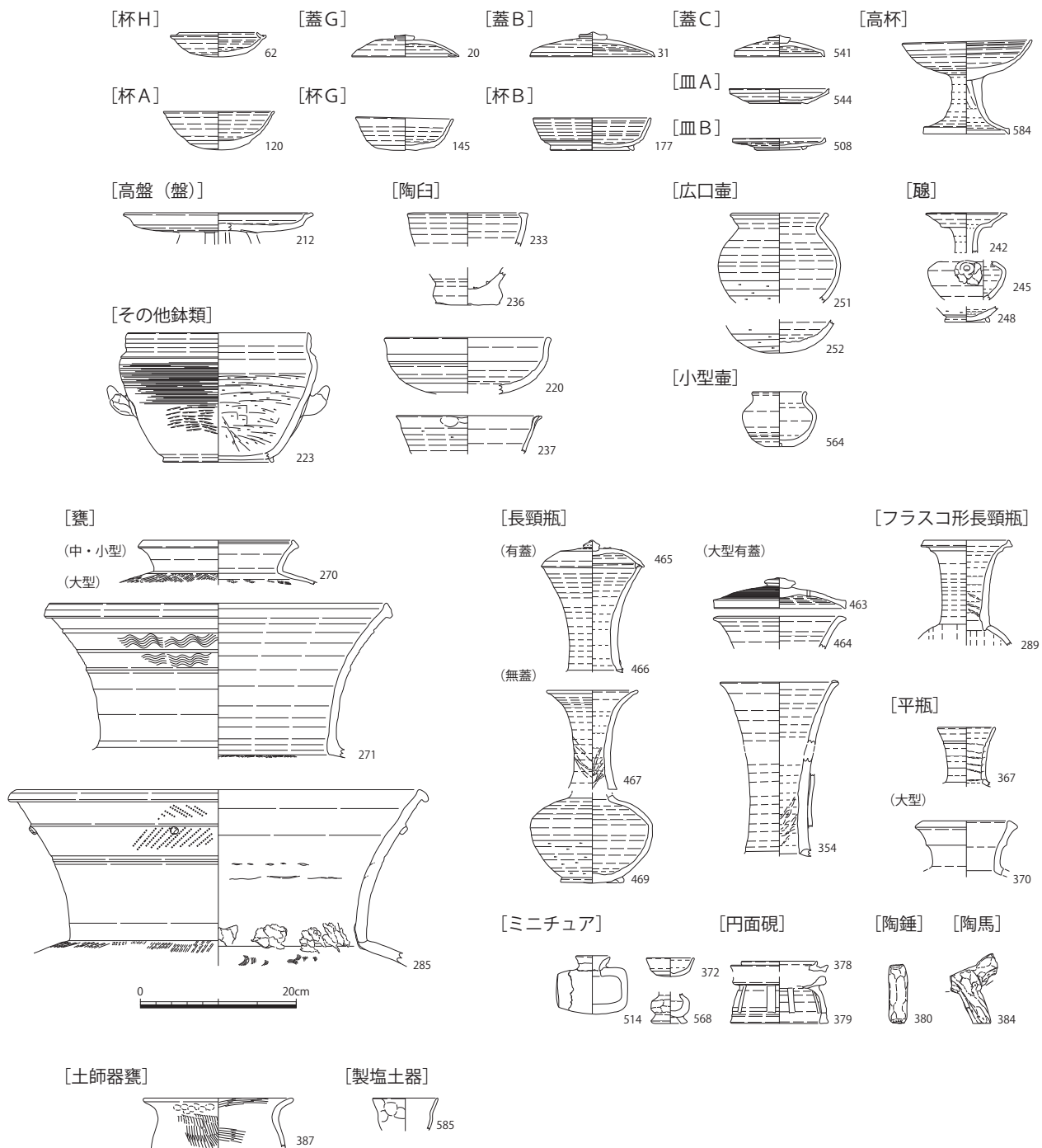
丁子田1号窯跡
市ヶ洞1号窯跡

土師器



第26図 出土土器（須恵器・土師器）の重量分布

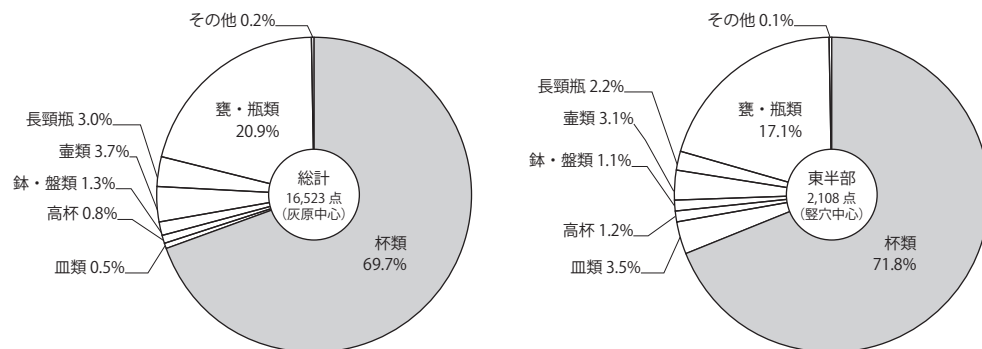
東中田A古窯



第27図 須恵器・土師器器種分類

第1表 出土土器（須恵器・土師器）集計表（接合前破片数）

	杯類	皿類	高杯	鉢・盤類	壺類	長頸瓶	甕・瓶類	その他	計	器種不明	土師器
灰原下層	1829	0	26	37	124	150	1115	6	3287	157	17
	55.6%	0.0%	0.8%	1.1%	3.8%	4.6%	33.9%	0.2%	-	-	-
灰原上層	1665	0	14	29	59	58	473	7	2305	142	4
	72.2%	0.0%	0.6%	1.3%	2.6%	2.5%	20.5%	0.3%	-	-	-
灰原上位	5776	6	57	96	329	198	1331	9	7802	556	19
	74.0%	0.1%	0.7%	1.2%	4.2%	2.5%	17.1%	0.1%	-	-	-
036SX等	608	1	4	22	14	39	140	0	828	84	30
	73.4%	0.1%	0.5%	2.7%	1.7%	4.7%	16.9%	0.0%	-	-	-
002SX	435	10	0	0	7	5	63	1	521	0	22
	83.5%	1.9%	0.0%	0.0%	1.3%	1.0%	12.1%	0.2%	-	-	-
003SX	517	59	21	6	26	28	160	1	818	91	28
	63.2%	7.2%	2.6%	0.7%	3.2%	3.4%	19.6%	0.1%	-	-	-
その他遺構	561	4	4	18	32	12	137	1	769	185	14
	73.0%	0.5%	0.5%	2.3%	4.2%	1.6%	17.8%	0.1%	-	-	-
出土地点不明	129	0	0	0	20	2	42	0	193	0	24
	66.8%	0.0%	0.0%	0.0%	10.4%	1.0%	21.8%	0.0%	-	-	-
調査区西半部計	9878	7	101	184	522	445	3056	22	14222	939	70
	69.5%	0.0%	0.7%	1.3%	3.7%	3.1%	21.5%	0.2%	-	-	-
調査区東半部計	1513	73	25	24	65	46	360	2	2108	276	64
	71.8%	3.5%	1.2%	1.1%	3.1%	2.2%	17.1%	0.1%	-	-	-
総計	11520	80	126	208	611	492	3461	25	16523	1215	158
	69.7%	0.5%	0.8%	1.3%	3.7%	3.0%	20.9%	0.2%	-	-	-

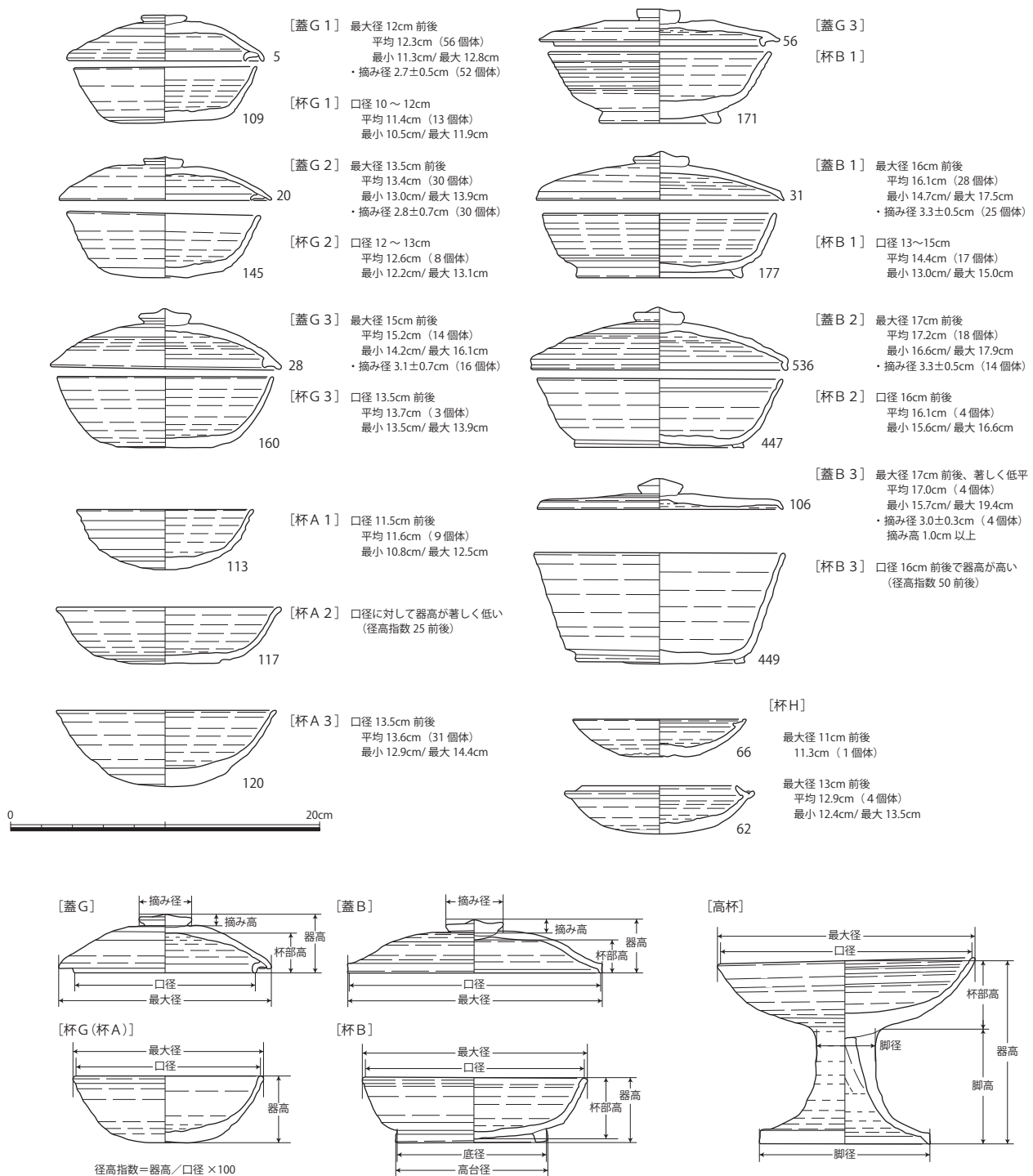


第28図 須恵器器種組成（接合前破片数）

(2) 杯類の型式区分

型式区分

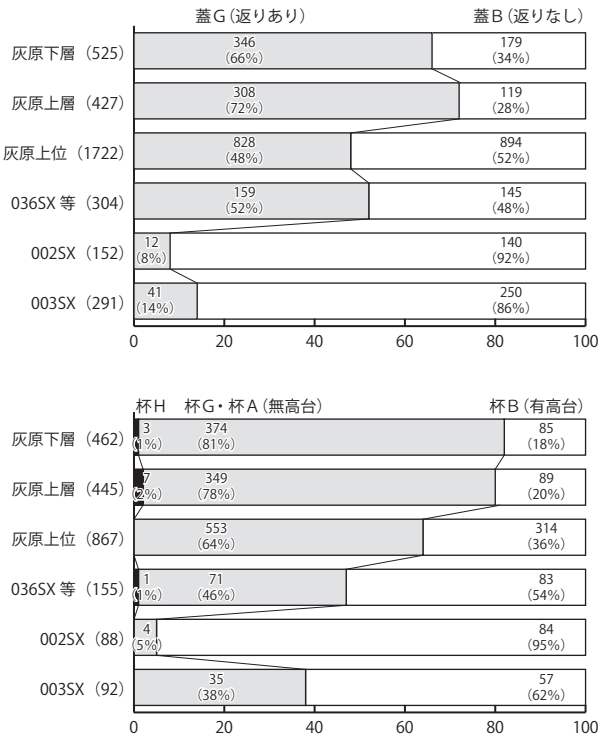
主要な器種である杯類の型式区分を以下に示す(第29図)。なお、ここで付す型式名は、奈良国立文化財研究所(現独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)による分類を参考にして、便宜的に使用するものである。



第29図 須恵器杯類の分類と組み合わせ、計測方法

第 2 表 須恵器杯類集計表（接合前破片数）

	蓋G	蓋B	蓋	杯H	杯G・杯A	杯B	杯	計
灰原下層	346	179	409	3	374	85	433	1829
	18.9%	9.8%	22.4%	0.2%	20.4%	4.6%	23.7%	-
灰原上層	308	119	369	7	349	89	424	1665
	18.5%	7.1%	22.2%	0.4%	21.0%	5.3%	25.5%	-
灰原上位	828	894	1660	0	553	314	1527	5776
	14.3%	15.5%	28.7%	0.0%	9.6%	5.4%	26.5%	-
036SX 等	159	145	44	1	71	83	105	608
	26.2%	23.8%	7.2%	0.2%	11.7%	13.7%	17.3%	-
002SX	12	140	16	0	4	84	37	435
	4.1%	47.8%	5.5%	0.0%	1.4%	28.7%	12.6%	-
003SX	41	250	59	0	35	57	75	517
	7.9%	48.4%	11.4%	0.0%	6.8%	11.0%	14.5%	-



第30図 須恵器杯類の組成（接合前破片数）

蓋

多くは杯（杯G・杯B）に伴う蓋で、内面に返りを有する蓋Gと内面の返りが消失した蓋Bに分類した。一部、長頸瓶に伴う蓋も含まれる（後述）。

蓋G 内面に返りを有する蓋を蓋Gとした。法量（最大径）を基準として（第32図）、最大径12cm前後（56個体の平均12.3cm、最小11.3cm、最大12.8cm）の蓋G 1、最大径13.5cm前後（30個体の平均13.4cm、最小13.0cm、最大13.9cm）の蓋G 2、最大径15cm前後（14個体の平均15.2cm、最小14.2cm、最大16.1cm）の蓋G 3に細分した。

また、摘みの形状について、低平で天井の中央が窪む a、扁平な（1.0cm 以下）宝珠

分類

法量（最大径）

蓋G 1

蓋G 2

蓋G 3

摘みの形状

形のb、やや高い(1.1cm以上)宝珠形のcに分類した(第31図)。

形状と法量

蓋B 1

蓋B 2

蓋B 3

蓋B 内面の返りが消失した蓋を蓋Bとした。形状と法量(最大径)を参考として(第32図)、端部の折り返しが曖昧で、最大径16cm前後(28個体の平均16.1cm、最小14.7cm、最大17.5cm)の蓋B 1、端部の折り返しが明瞭で最大径17cm前後(18個体の平均17.2cm、最小16.6cm、最大17.9cm)の蓋B 2、著しく低平で最大径17cm前後(4個体の平均17.0cm、最小15.7cm、最大19.4cm)の蓋B 3に細分した。

摘みの形状

また、蓋Gと同様、摘みの形状をa～cに分類した(第31図)。



a: 低平で中央が窪む

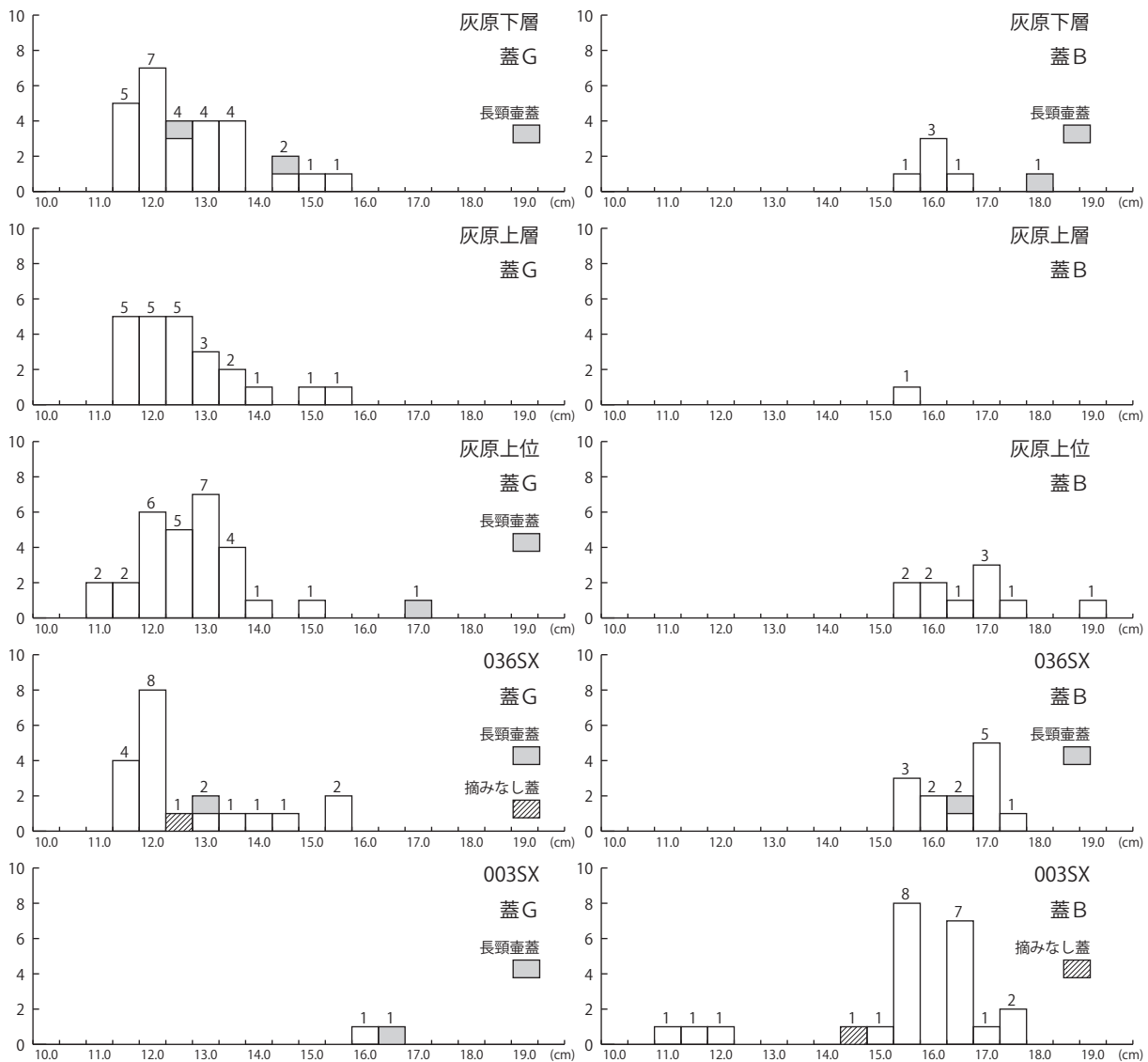


b: 扁平な宝珠形
(摘み高 1.0cm 以下)



c: やや高い宝珠形
(摘み高 1.0cm 以上)

第31図 蓋の摘みの分類



第32図 須恵器蓋G・蓋B最大径度数分布

杯

杯は合子状の蓋杯の身となる杯H、無高台で蓋Gが伴う杯G、無高台で無蓋の杯A、有高台で蓋G・蓋Bが伴う杯Bがある。杯Hはそれに確実に伴う蓋が認められないことなどから、杯ではなく蓋の可能性もある（後述）。

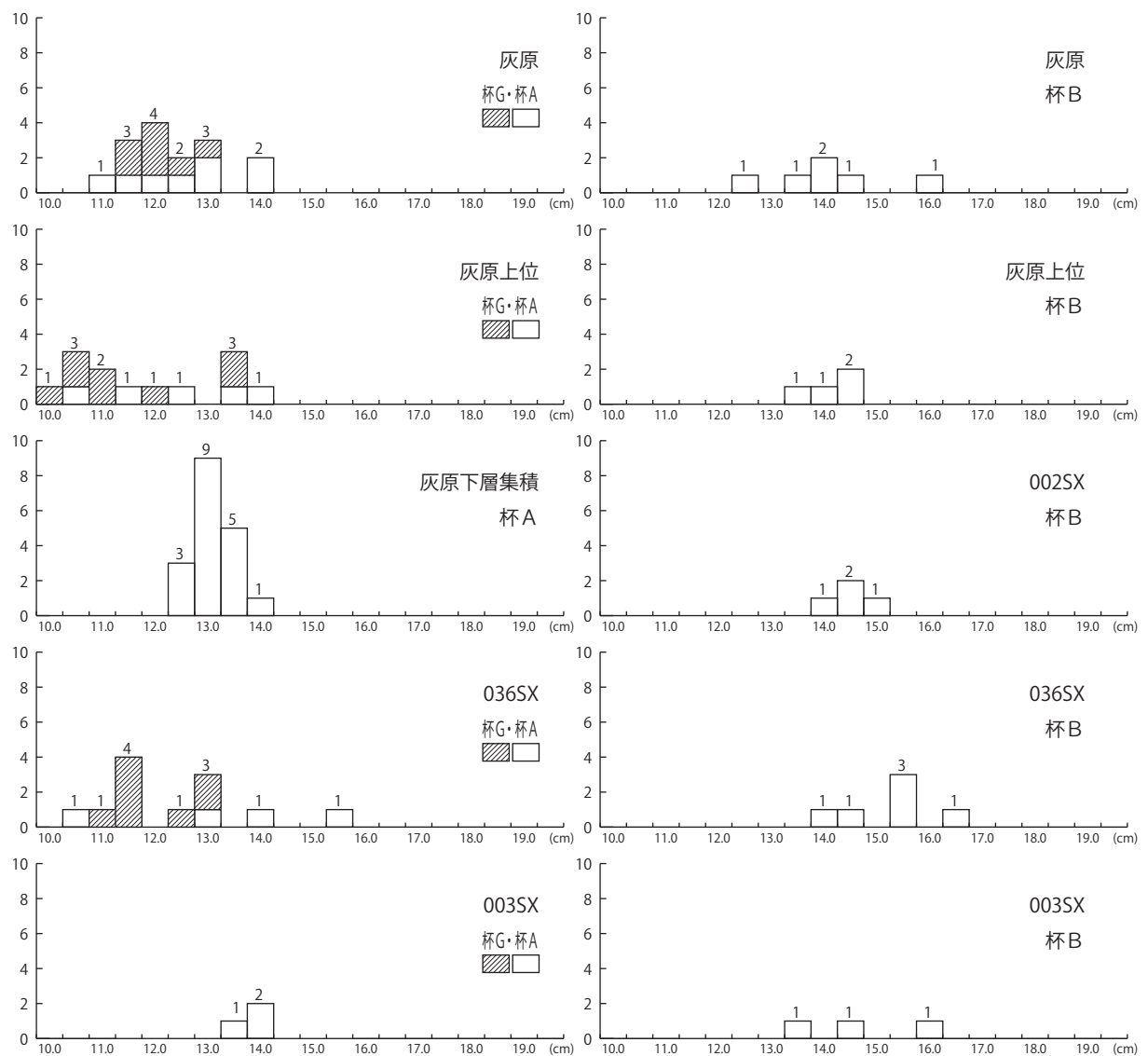
分類

無高台の杯については、灰原下層において検出された焼成不良の無高台の杯の集積（123～144）に蓋が全く伴っていないこと、重ねられた状態で釉着した例（149）があること、内面全面に降灰や窯壁の付着が認められる（焼成時に蓋が被さっていない）例（150・152 など）があることから、無高台の杯に蓋を伴うものと伴わないものの両者が存在することは確実である。ただし、蓋の有無、つまり杯Gと杯Aの判別に苦慮する個体も少なくない。ここでは、口縁部から体部が直線的な形状を呈する杯を杯G、体部が外反し、口縁部先端が外折気味となる杯を無蓋の杯Aとした。また、前者は底部が明瞭なものが多く、後者は底部が曖昧か底径が小さいものが多い。

焼成不良の杯

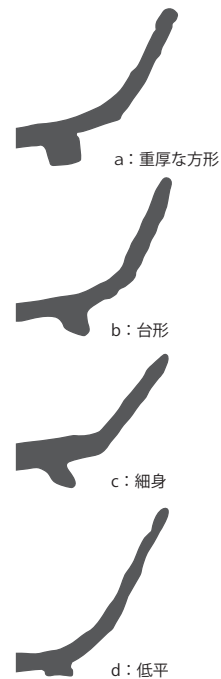
釉着した例

杯Gと杯Aの判別

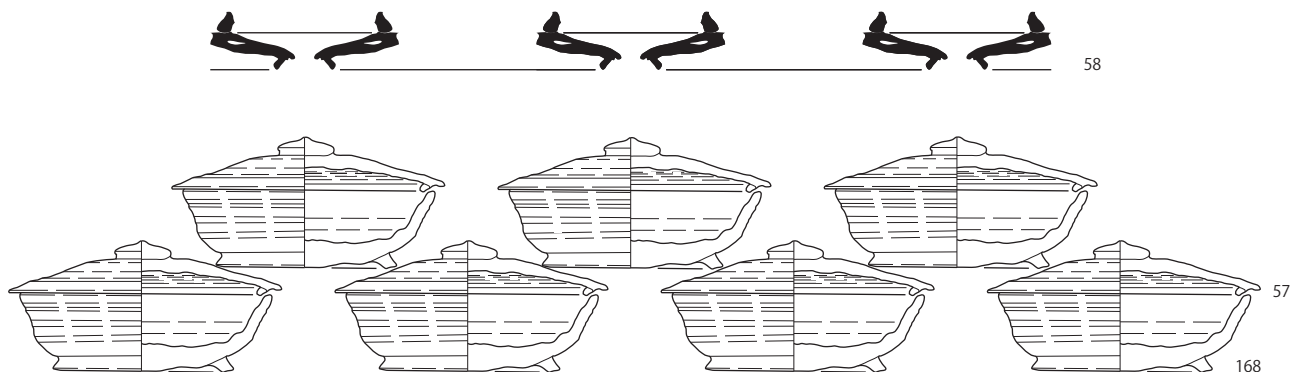


第33図 須恵器杯G・杯A・杯B口径度数分布

分類	杯G 無高台で蓋Gを伴うと思われる杯を杯Gとした。法量（口径）を基準として
杯G 1	（第33図）、口径10～12cmの杯G 1（13個体の平均11.4cm、最小10.5cm、最大11.9cm）、口径12～13cmのG 2（8個体の平均12.6cm、最小12.2cm、最大13.1cm）、口径13.5cm前後のG 3（3個体の平均13.7cm、最小13.5cm、最大13.9cm）に細分した。
杯G 2	
杯G 3	
分類	杯A 無高台で蓋を伴わないと思われる杯を杯Aとした。法量（口径・器高）を基準として
杯A 1	（第33図）、口径11.5cm前後（9個体の平均11.6cm、最小10.8cm、最大12.5cm）
杯A 3	の杯A 1、口径13.5cm前後（31個体の平均13.6cm、最小12.9cm、最大14.4cm）の杯
杯A 2	A 3に区分し、杯A 1、杯A 3の口径の最大値を凌駕しながらも、器高がそれらの最小値にも達しない（口径に対して器高が低い径高指数25前後の）個体を杯A 2とした。
分類	杯B 有高台の杯を杯Bとした。法量（口径・器高）を基準として（第33図）、口径13
杯B 1	～15cm（17個体の平均14.4cm、最小13.0cm、最大15.0cm）の杯B 1、口径16cm前後
杯B 2	（4個体の平均16.1cm、最小15.6cm、最大16.6cm）の杯B 2、杯Bと同様の口径で器
杯B 3	高が高い杯B 3（1個体の器高7.5cm、径高指数50前後）に
器形	細分した。器形は腰が高い位置で明瞭に屈折し体部から口縁部にかけて外反するもの、腰がやや低い位置で弱く屈折し体部から口縁部にかけて直線的なもの、腰の屈折が曖昧で杯部が全体に曲線的なものに区分され、概ね前者がB 1、後二者がB 2・B 3に対応する。また、高台の形状を、重厚な断面方形で外方に踏ん張るa、重厚な断面台形で外方に踏ん張るb、細身で断面が長方形気味のc、低平で高台外端が接地するdに分類した（第34図）。B 1の高台にはa、b、cが多く、B 2・B 3の高台にはdが多い。
高台の形状の分類	蓋と杯の組み合わせ
組み合わせ	法量の比較から（第32・33図）、およそ杯G 1と蓋G 2、
焼成痕跡	杯G 2と蓋G 2、杯G 3と蓋G 3、杯B 1と蓋G 3・B 1、杯B 2・B 3と蓋B 2の組み合わせが想定される。この組み合わせは蓋G 3（57・58・404）に杯Bを積み重ねて焼成した痕跡（第35図）、竪穴建物002SX内の焼成不良の杯類の集積が蓋G 3・蓋B 1・杯B 1から構成されていることから支持される。
焼成不良の杯類	



第34図 杯B高台の分類



第35図 蓋Gと杯Bの組み合わせと焼成時の積み重ねの復原

(3) 灰原の遺物

灰原とその上位の包含層からは須恵器杯類（蓋G・蓋B・杯H・杯G・杯A・杯B）、高杯、高盤、鉢、把手付鉢、陶臼、片口鉢、甕、広口壺、甕、長頸瓶（フラスコ形長頸瓶、無蓋長頸瓶、有蓋長頸瓶、大型長頸瓶を含む）、平瓶（大型平瓶を含む）、小杯、円面硯、陶鍾、陶馬（その他、碗、盤は混入遺物の可能性がある）、土師器甕・杯が出土した（第36～50図）。
杯類

器種

下層出土の蓋は蓋G 1（1～16）、蓋G 2（17～24）、蓋G 3（25～29）、蓋B 1（30～34）で構成される（第36図）。蓋G 1の摘みは摘み形状a（1～9）が半数以上を占める一方で、蓋G 2、蓋G 3、蓋B 1の摘みは摘み形状bによってほぼ占められる。

下層出土の蓋

蓋G 1とした9は端部が折り返し気味となる。蓋G 2とした20は無高台の杯Gを積み重ねて焼成した痕跡が残る。23は穿孔を施していること、高い宝珠形の摘み（摘み形状c）を付すこと、外面全面に降灰が認められることから、長頸瓶の蓋である可能性が高い。蓋G 3とした25についても、摘み径が小さく、摘み高が高い摘み形状の特徴から、長頸瓶の蓋の可能性はある。26は杯の口縁部が釉着する。29は内面の返りが消失し、ごくわずかな痕跡程度となる。また、高台の釉着から、蓋の中央からやや偏った位置に杯Bを積み重ねて焼成したことが分かる。杯Bの高台径は10.8cmに復原される。

蓋G

長頸瓶の蓋

蓋B 1は全体の形状が弧状を呈するものが多いが、34はやや直線的な形状を呈する。端部は折り返しが曖昧なもの（30・31）と、折り返しが比較的明確なもの（32～34）がある。35は最大径が18.2cmとかなり大きいこと、外面全面に降灰が認められること、器壁が厚いことから、大型長頸瓶の蓋である可能性がある。

蓋B

大型長頸瓶の蓋

上層出土の蓋は蓋G 1（36～47）、蓋G 2（48～55）、蓋G 3（56～59）、蓋B 1（61）で構成される（第37図）。構成は下層とほとんど変わるところがないが、摘み形状aは蓋G 1（36・37）と蓋G 2（48）にごくわずかに認められる程度である。また、内面の返りが著しく退化した個体（47・54・55）、ごくわずかな痕跡程度となる個体（59）が散見される。蓋G 3とした57は杯Bを積み重ねて焼成した痕跡が残り、58には焼成時に積み重ねた杯Bの高台が釉着する。高台径は57が9.0cm、58が9.4cmに復原される。60はへうによる刺突文を施した長頸瓶の蓋である。

上層出土の蓋

蓋G

蓋Gと杯B

長頸瓶の蓋

灰原上位出土の蓋

灰原上位の包含層出土の蓋は蓋G 1（67～81）、蓋G 2（82～92）、蓋G 3（93～96）、蓋B 1（98～101）、蓋B 2（102～104）、蓋B 3（105～107）で構成される（第38図）。蓋Gの構成は上層よりも下層に近似し、蓋Bには下層・上層に認められない蓋B 2と蓋B 3が含まれる。97はへうによる刺突文を施した大型長頸瓶の蓋である。摘みはやや高い宝珠形（摘み形状c）である。108は摘みを付さない特異な個体であるが、全体的な仕上げの状態から蓋とした。

大型長頸瓶の蓋

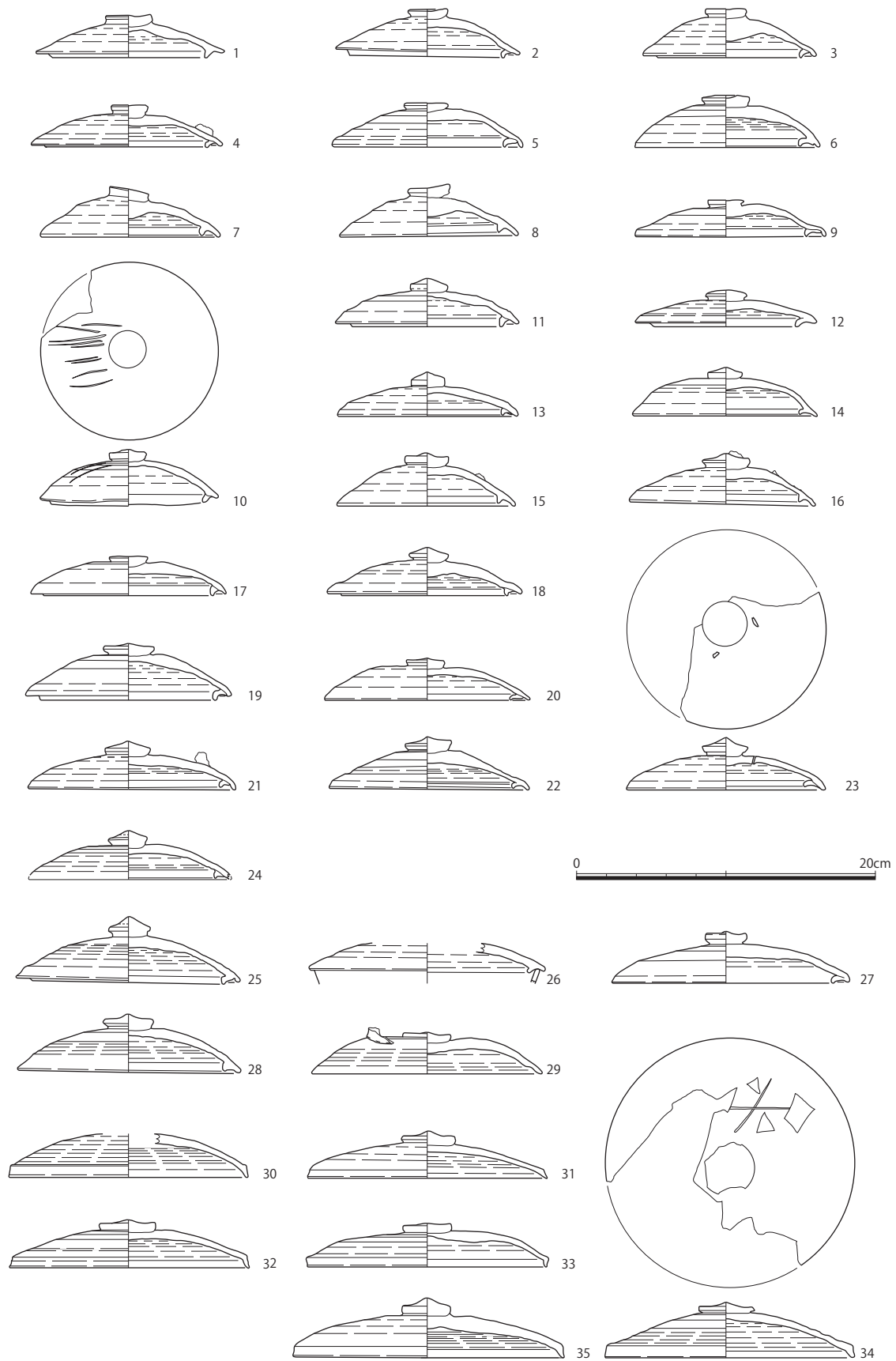
蓋G 1とした81、蓋G 2とした92、蓋G 3とした71は端部が折り返し気味となる。蓋G 3とした95・96には杯の口縁部が釉着する（96は長頸瓶と長頸瓶の蓋である可能性もある）。蓋B 1（98～101）の摘み径は大きく（3.6～3.8cm）、蓋B 2（102～104）の摘み径は小さい（2.8～3.1cm）。摘み径が小さい蓋は灰原下・上層中には認められないことから、102～104は混入遺物の可能性がある。著しく低平な蓋B 3（105

蓋G

蓋B

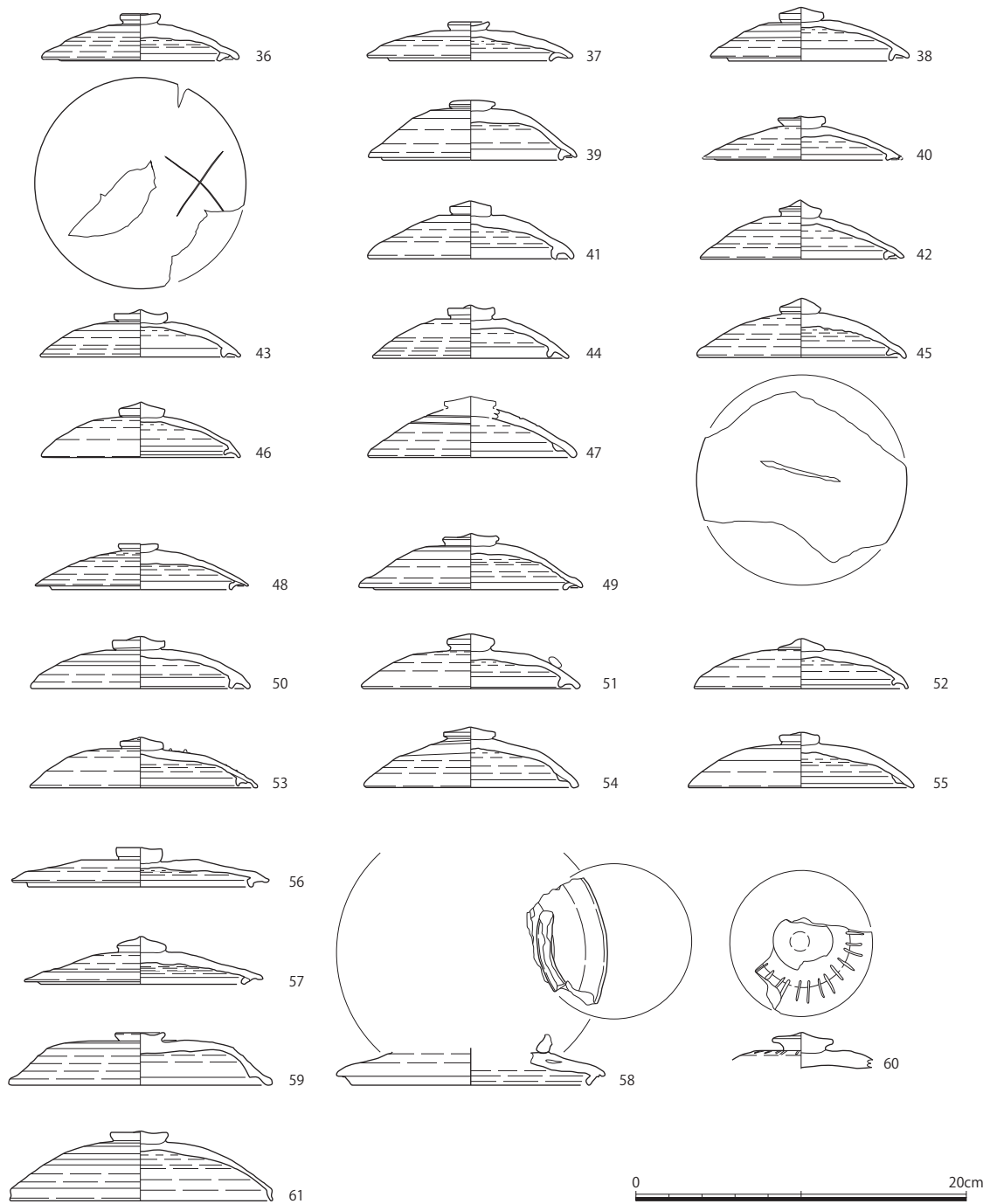
東中田A古窯

下層 (1~35)



第36図 灰原出土須恵器杯類 1 (1:4)

上層 (36~61)



下層 (62・63)



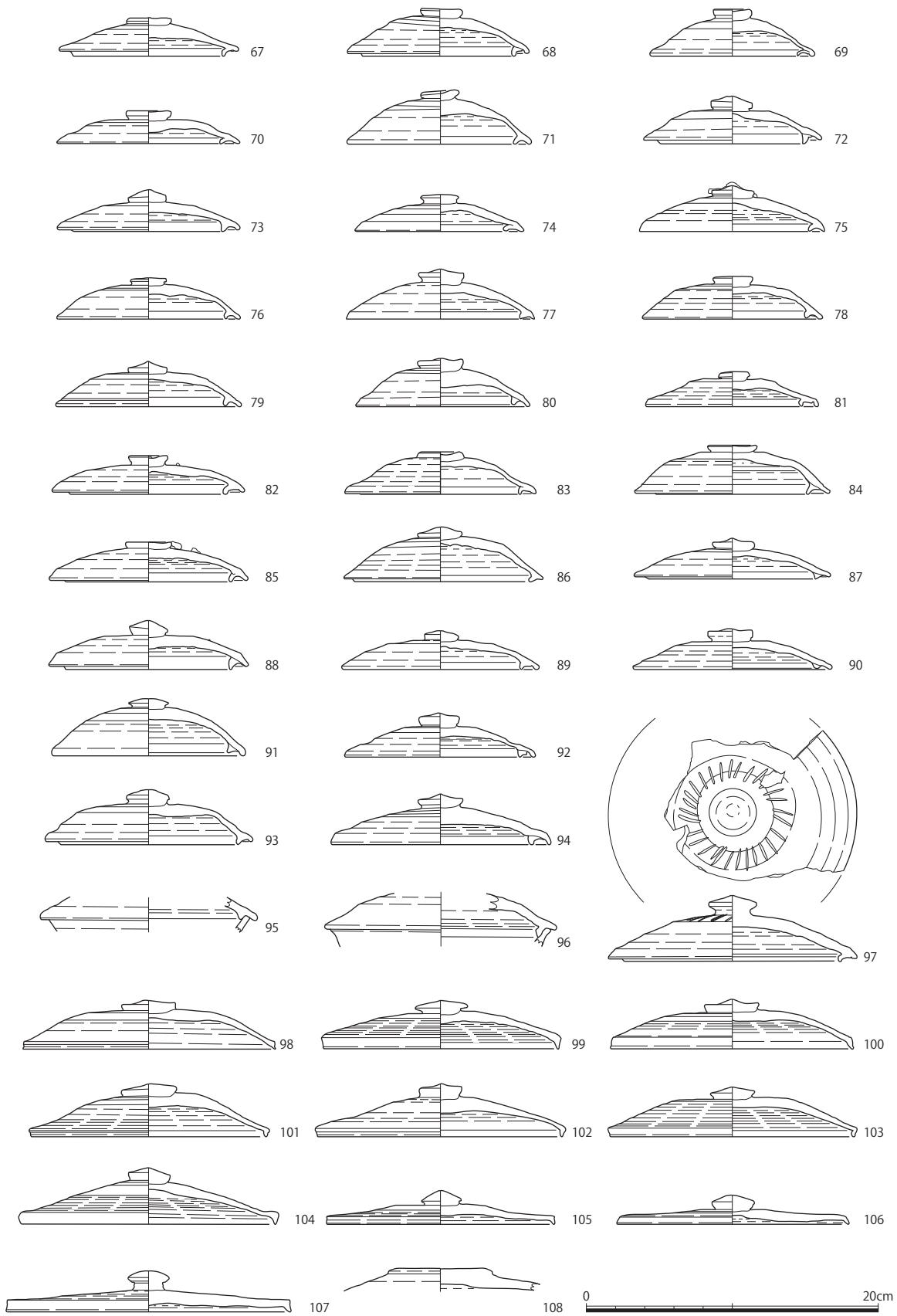
上層 (64~66)



第37図 灰原出土須恵器杯類2 (1:4)

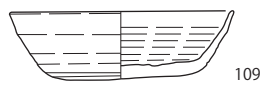
東中田A古窯

灰原上位 (67~108)

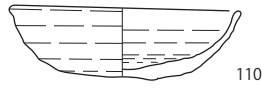
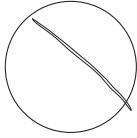


第38図 灰原出土須恵器杯類3 (1:4)

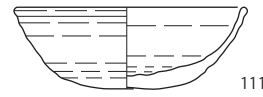
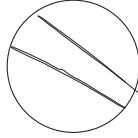
下層 (109~144)



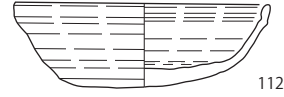
109



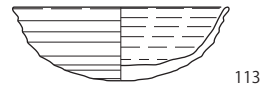
110



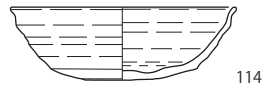
111



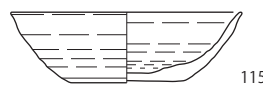
112



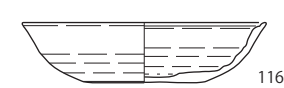
113



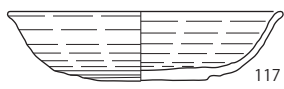
114



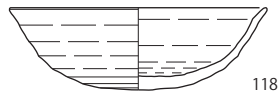
115



116



117



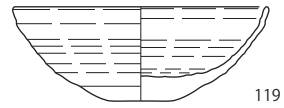
118



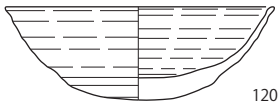
121



122



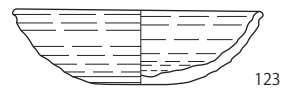
119



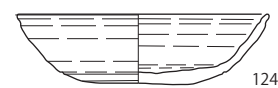
120



焼成不良の杯の集積 (123~144)



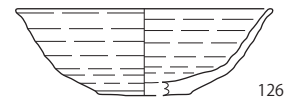
123



124



125



126



127



128



129



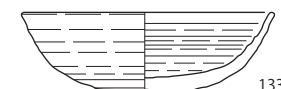
130



131



132



133



134



135



136



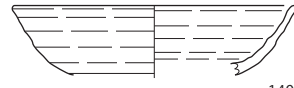
137



138



139



140



141



142



143

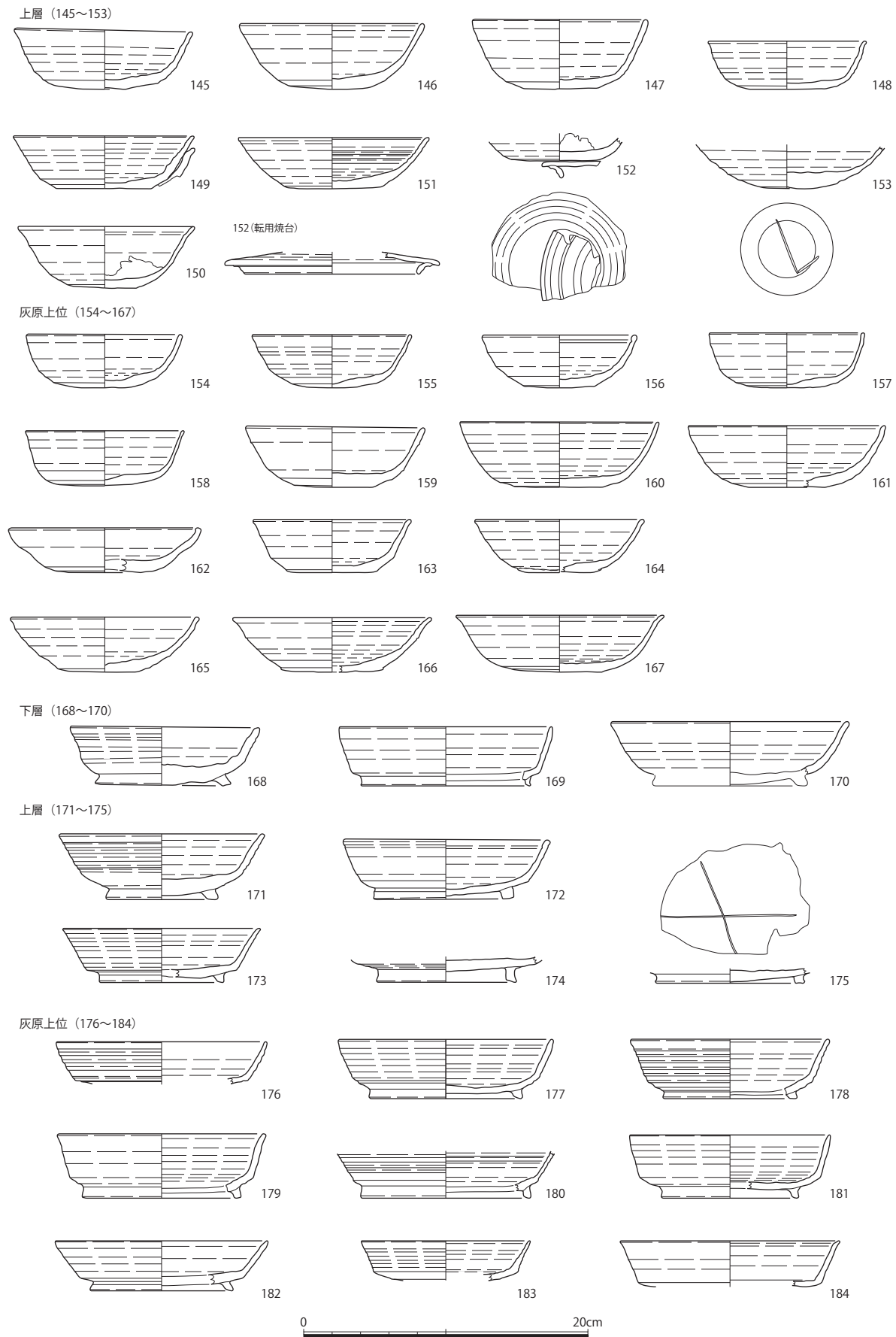


144

0 20cm

第39図 灰原出土須恵器杯類4 (1:4)

東中田A古窯



第40図 灰原出土須恵器杯類5 (1:4)

～107) は焼け歪んでいる可能性もあるが、摘み高がいずれも1 cm 以上と高い特徴から別型式として扱った。

灰原からはごく少数の杯Hが出土している(第37図)。62・63が下層、64～66が上層からの出土で、灰原上位の包含層からは出土していない。先述のように蓋杯の杯とした場合、それに伴う蓋が認められないこと、杯Hとしては著しく扁平な形状を呈することなどから、蓋(摘みを付さない蓋G)の可能性も考慮したが、杯(とした場合)の底面に砂が付着する個体(63・65など)から、焼成時における上下を重視して杯Hとした。

法量からは最大径13cm前後(4個体の平均12.9cm、最小12.4cm、最大13.5cm)の62～65、11cm前後(11.3cm)の66に区分される。底部調整はごく曖昧な螺旋状のヘラケズリを施すもの(63・64・65)と切り離し未調整のもの(62・66)の両者がある。66は内面全面に降灰が認められる。また、蓋Gなど他の杯類の多くが灰白色を基調とする一方で、杯Hとした個体はいずれもやや暗い青灰色を呈する点もやや異質である。なお、杯Hとした個体は焼け歪んでいるものが多いことから、他から意図的に持ち込まれたり、偶発的に混入した遺物である可能性を考慮することは難しい。

下層出土の杯Gは杯G 1(109・110)、杯G 2(111)、杯G 3(112)で構成される(第39図)。いずれも底部切り離し未調整で、板目状の圧痕を残すものが多い。109の底部は明瞭であるが、110～112の底部はやや不明瞭で、無蓋の杯Aである可能性もある。杯Aは小型の杯A 1(113～115)、器高が低い杯A 2(116・117)、大型の杯A 3(118～120、123～144)で構成される(第39図)。なお、123～144は集積された焼成不良の一群である。116、117はそれぞれ杯A 1、杯A 3の口径の最大値を凌駕しながらも、器高は最小値以下を計測する(径高指数25前後)。個体数は少ないが、杯A 1とA 3とは区別して別型式の杯A 2とした。

集積された状態で出土した焼成不良の一群はいずれも杯A 3で、器形、口径が相互に類似する個体が多い(第39図)。器高から4 cm 以下の一群(123～125)、4～5 cm の一群(126～141)、5 cm 以上の一群(142・143)にさらに細分され、口縁部外面の先端付近が沈線状に窪むもの(123・124)、底部を小さくするもの(126)など、細部の特徴をやや異にするものもある。また、多くの底部は切り離し未調整であるが、同心円状の回転ヘラケズリを施すものが1点(144)含まれる。

上層出土の杯Gは杯G 2のみで(第40図)、底部は145が切り離し未調整、146・147は同心円状の回転ヘラケズリを施す。杯Aは小型の杯A 1(148～150)、大型の杯A 3(151・153)で構成される。152の底部には支持具に転用した蓋G 3が釉着する。

灰原上位の包含層出土の杯Gは杯G 1(154～158)、杯G 2(159)、杯G 3(160・161)によって構成される(第40図)。155・160は底部切り離し未調整で、156～159、161は同心円状の回転ヘラケズリを施す。杯Aは小型の杯A 1(163・164)、大型の杯A 3(165～167)で構成される。いずれも底部は切り離し未調整である。162は口径(13.2cm)に対して器高(3.1cm)が著しく低く(径高指数23.4)、他に同様の器形と法量の杯が認められない。最大径13cm前後の杯Hに伴う蓋の可能性も考慮したが、窯内における上下を重視して杯とした。

杯Bは168～170が下層、171～175が上層、176～182が灰原上位の包含層から

杯H

法量

色調

下層出土の杯G

下層出土の杯A

集積の一群

上層出土の杯G

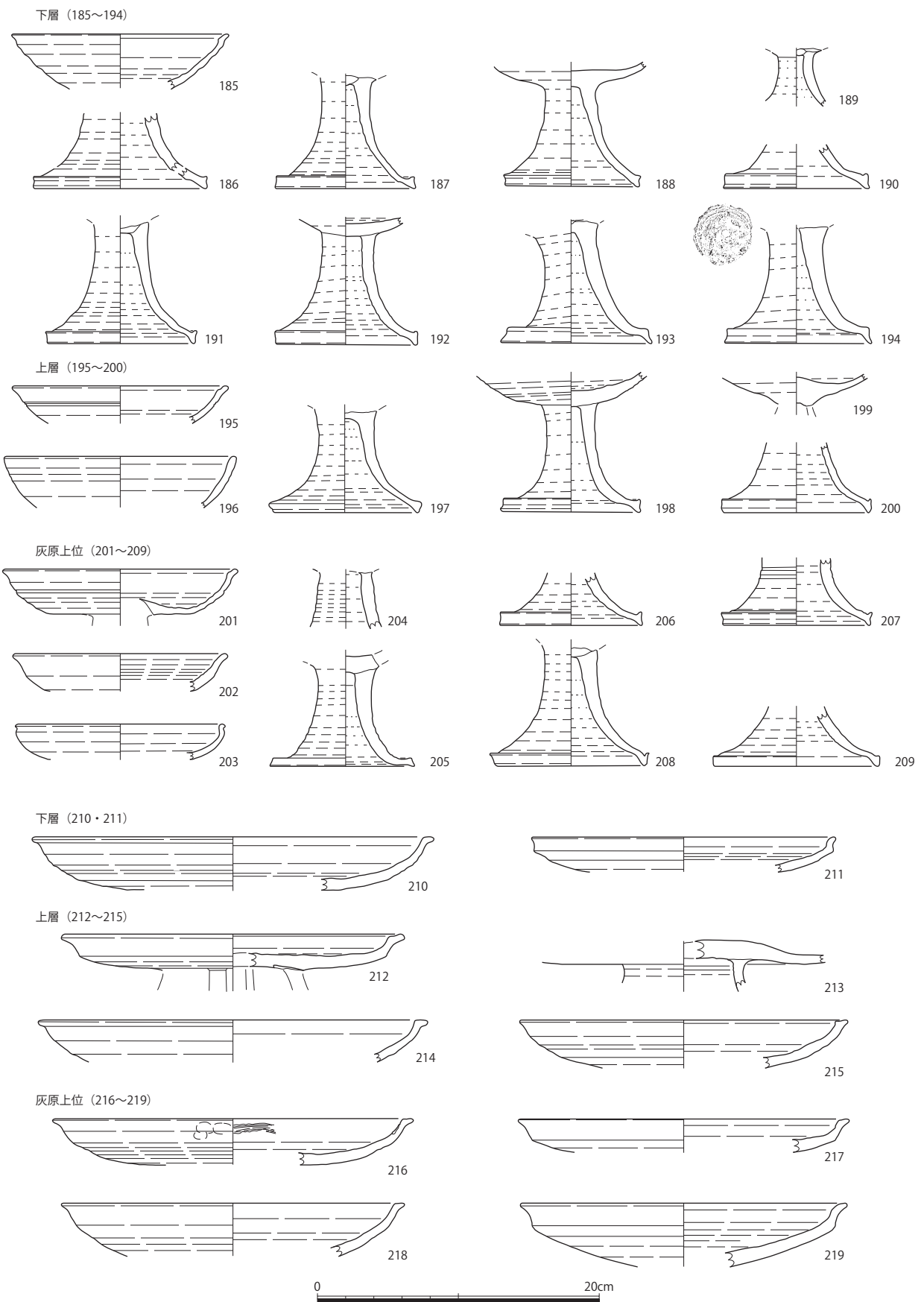
上層出土の杯A

灰原上位出土の杯G

灰原上位出土の杯A

杯B

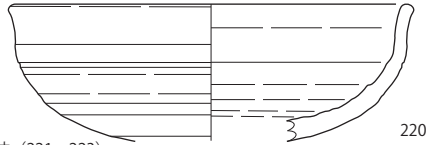
器形	出土した（第40図）。腰が高い位置で屈折し、体部から口縁部にかけて外反するものが多く（168・171～173・176～182）、その他、やや低い位置で腰が屈折し、体部から口縁部にかけて直線的なもの（169）、腰の屈折が曖昧で丸みをもつもの（170）がある。
高台の形状	下層・上層出土の168・171は口縁部から体部が外反し、底部は厚い。168・171・172の高台は重厚な断面方形で外方に踏ん張る（高台形状a）。灰原上位の包含層出土の177～182の高台は断面台形（高台形状b）か断面長方形（高台形状c）のものとなる。
箱形の杯	183・184は杯部が箱形を呈するもので、小破片であることから、混入した遺物である可能性が高いと思われる。
高杯	高杯は全形が判明する個体がない。185～194が下層、195～200が上層、201～209が灰原上位の包含層から出土した（第41図）。杯部（185・195・196・201～203）は浅く、沈線を欠くものが多い。脚部（186～194・198～200・204～209）は脚高が8cm前後を計測するものが多い。いずれも透孔はなく、207のみ痕跡的な沈線を施す。脚部は端部がわずかに窪む形状（187・188・197・205）、上下に拡張される形状（190～192、198・206・207）、下方に突出する形状（193・194）、上方に突出する形状（200・208・209）に分類される。194は脚頂部に接合沈線が施される。
高盤	
盤状部分	湖西窯に特徴的な器種で（第41図）、盤状の部分は口径25cm前後を計測する。210・211が下層、212～215が上層、216～219が灰原上位の包含層から出土した。口縁端部はいずれも外方に引き出される。脚部は抽出されていないが、212は4方向または5方向に透孔（窓）を穿つ。213は透孔（窓）がない。216は成形時に生じた口縁部内面の窪みに粘土が補充されている。
脚部	
脚端部の形状	
接合沈線	
鉢類	
鉢	220～222は高盤（盤）より深手となるもので鉢とした（第42図）。220が上層、221・222が灰原上位の包含層から出土した。
大型短頸の鉢	223は大型短頸の鉢で（第42図）、体部の中位に牛角状の把手、底部付近に杯Bと同様の高台を付す。接合しない破片を図上復原したもので、復原にはやや難があるが、前後する時期の湖西市吉美中村遺跡A地点（有高台）、春日井市高蔵寺2号窯跡（丸底？）、春日井市篠木5号墳（平底）などにおいて類似した器形の把手付鉢が出土している。瓦質に近いやや軟質の焼成で、器表面は青灰色を呈する。体部上半はカキメ状の条線を施し、体部下半には成形時の平行叩きの痕跡が表面化する。
吉美中村遺跡	
高蔵寺2号窯跡	
篠木5号墳	
陶臼	224～236は陶臼などと呼称される器種で（第42図）、口径は20cm前後を計測する。灰白色の緻密な粘土を用い、円盤状の底部には叩き調整が残るもの（229・230・234・235）が多い。224～227が下層、228～231が上層、232～236が灰原上位の包含層から出土した。口縁部は端部が外面側に突出するものに加えて（224～226・228）、内外に拡張されるもの（232）、内面側に突出気味となるもの（233）がある。
片口鉢	237・238は薄手の鉢状の器種で、237は口縁部を片口状とする造作が認められる（第42図）。239は小破片ながら、筒形器台の脚部とした（第42図）。240は円筒状の容器で全体に粗雑である。類例に乏しく、用途も不明である。
筒形器台	



第41図 灰原出土須恵器高杯・高盤 (1:4)

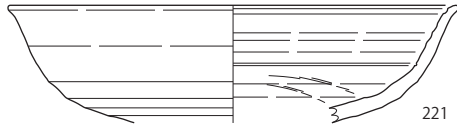
東中田A古窯

上層 (220)

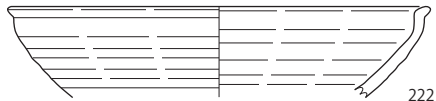


220

灰原上位 (221~223)



221



222

下層 (224~227)



224



225

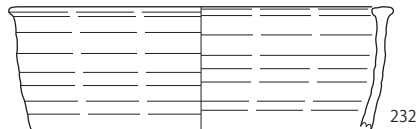


226



227

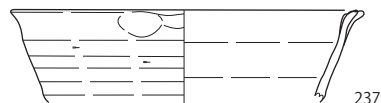
灰原上位 (232~238)



232

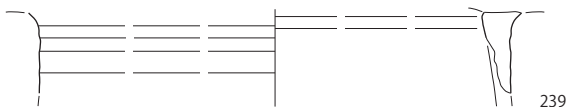


233

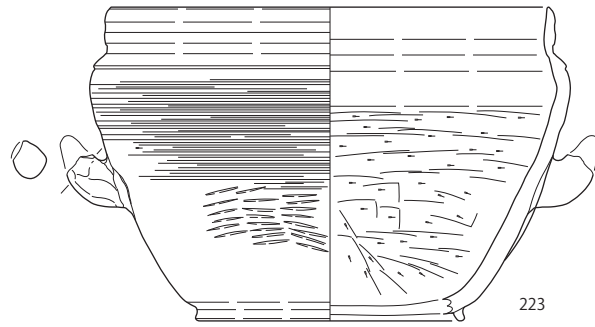


237

下層 (239・240)



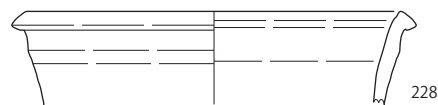
239



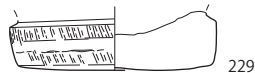
223

0 20cm

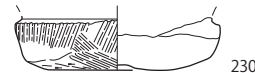
上層 (228~231)



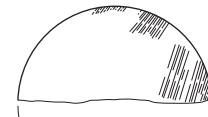
228



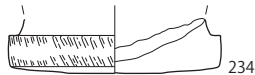
229



230



231



234



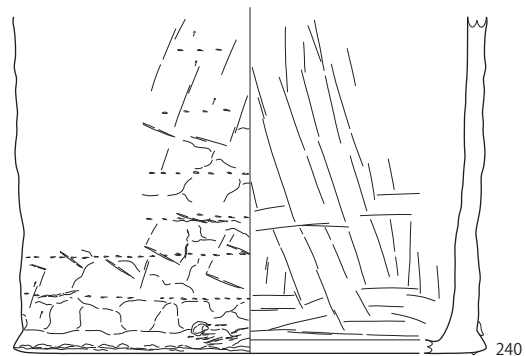
235



236

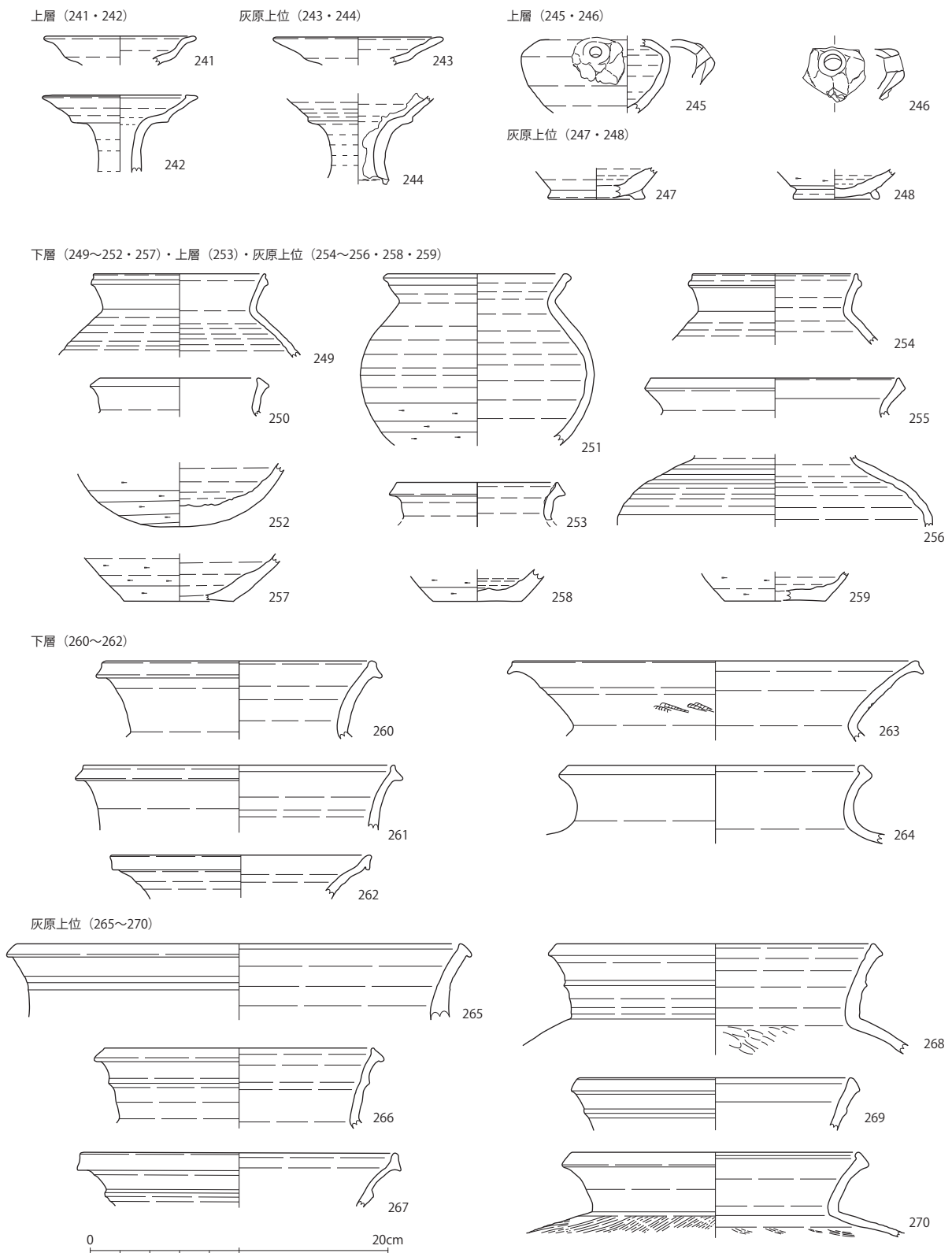


238



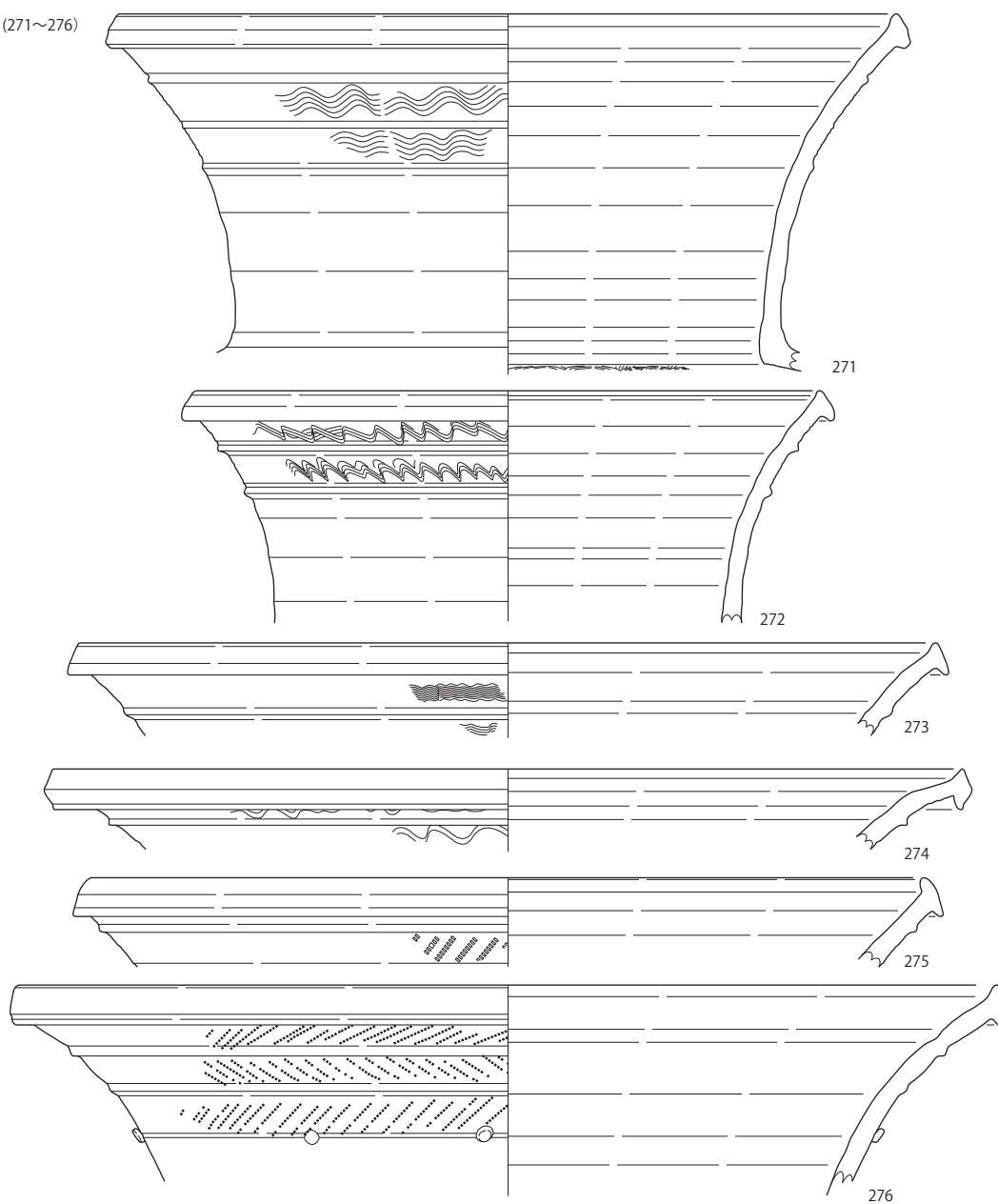
240

第42図 灰原出土須恵器鉢類他 (1:4)

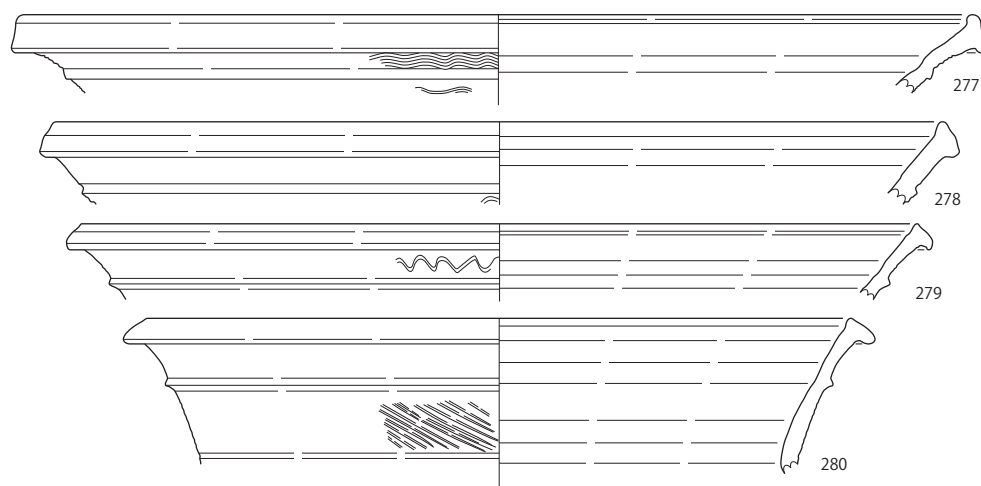


第43図 灰原出土須恵器壺類・甕1 (1:4)

下層 (271~276)



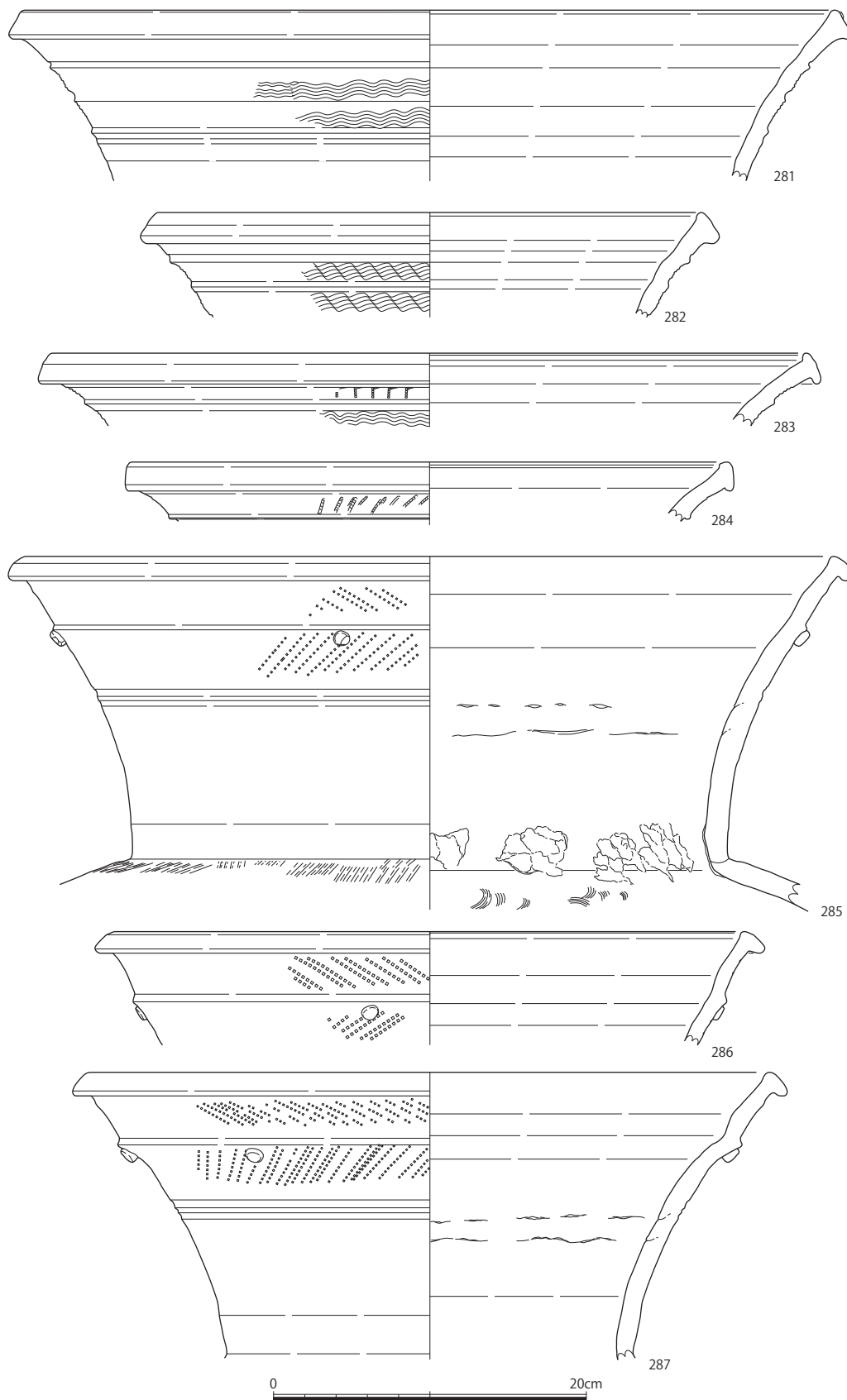
上層 (277~280)



0 20cm

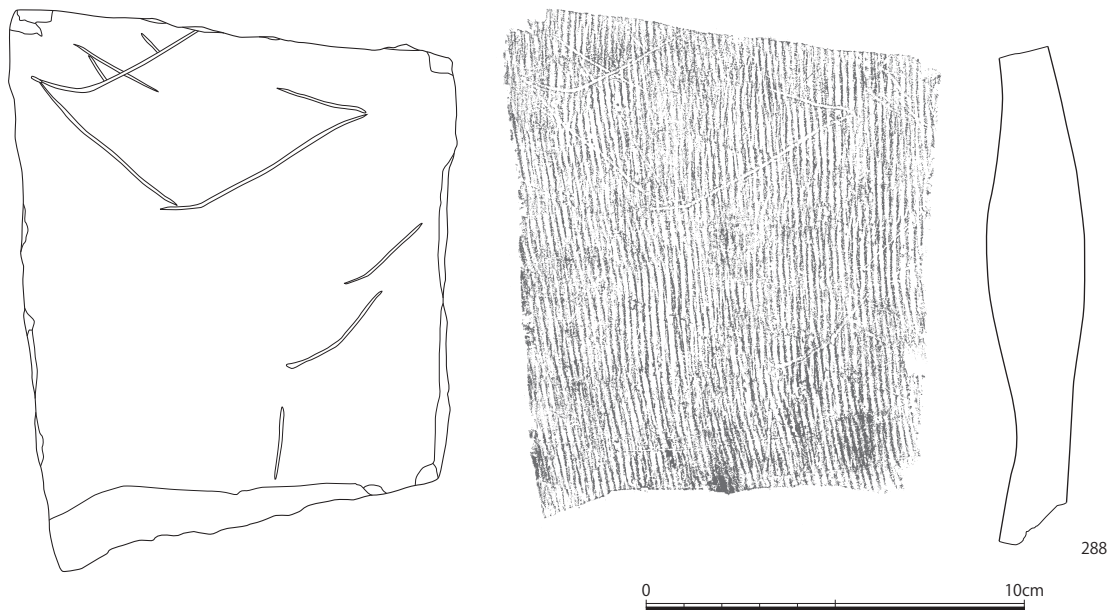
第44図 灰原出土須恵器甕 2 (1:4)

灰原上位 (281~287)



第45図 灰原出土須恵器甕3 (1:4)

下層 (288)



第46図 灰原出土須恵器甕4 (1:2)

甕

甕も全形が判明する個体がない。241・242・245・246が上層、243・244・247・248が灰原上位の包含層から出土した(第43図)。口縁部は単純に外反する241と端部が内面側に肥厚する242・243がある。245・246の注口部分は粘土を付加して突出気味に作出する。高台径が6cm前後の247・248は小型の長頸瓶の可能性もあるが、高台を付す甕とした。247は重厚な断面方形の高台、248は細身の高台を付す。高台付近は回転ヘラケズリを施す。

広口壺

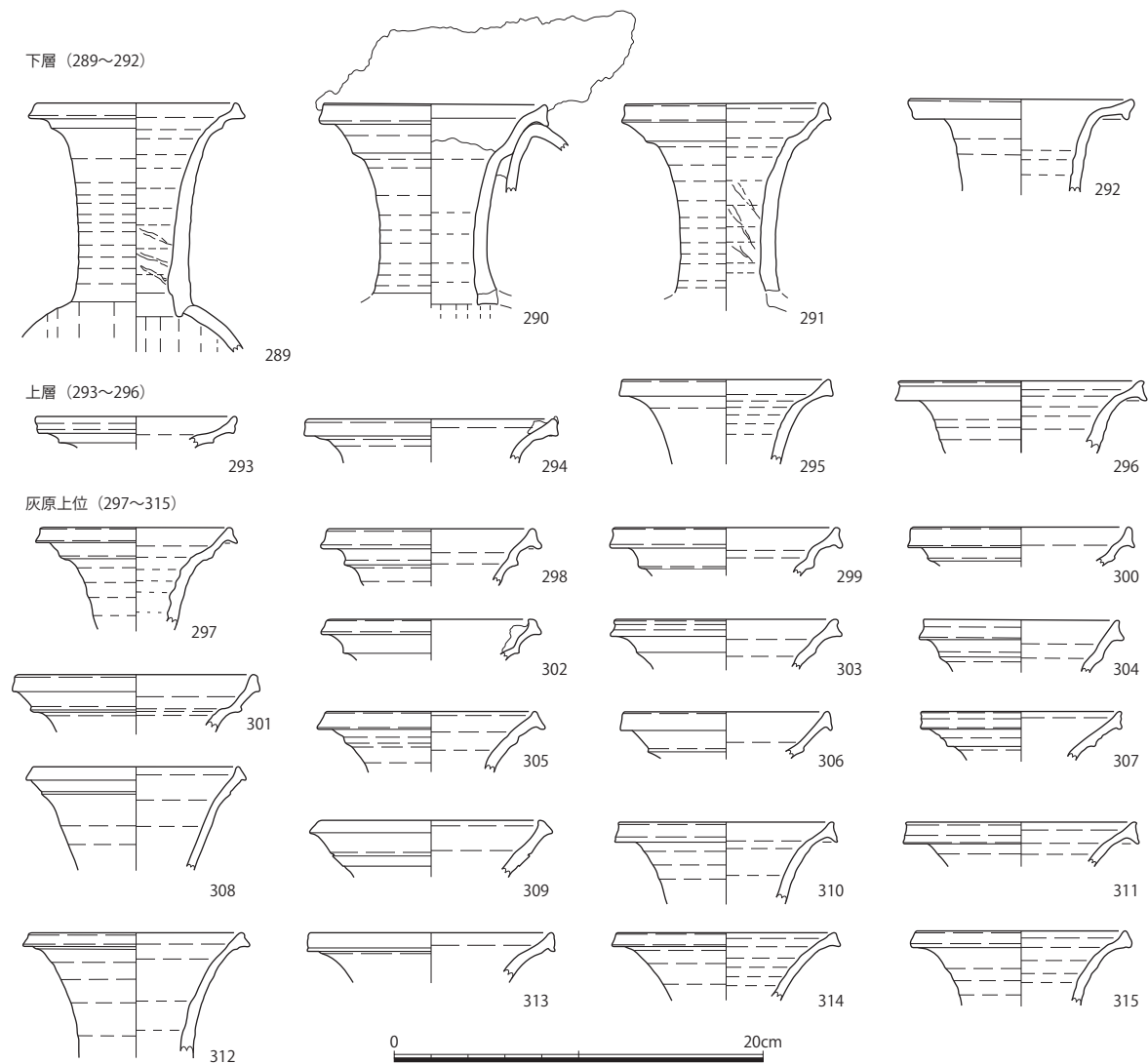
湖西窯に特徴的な器種で、249～252・257が下層、253が上層、254～256・258・259が灰原上位の包含層から出土した(第43図)。口縁部は端部が沈線状に窪むもの(249・254)、内外に拡張されるもの(250・253)、断面三角形状(255)となるものなどがある。体部上半はいずれも丸みをもつ。体部下半は回転ヘラケズリを施す。底部は252が丸底、257～259が平底となるが、257～259は別器種(型式)の可能性もある。

甕

甕は口径10～30cmの中・小型と、口径30～60cmの大型がある。260～264・271～276が下層、277～280が上層、265～270・281～287が灰原上位の包含層から出土した(第44・45図)。

中・小型の甕(260～270)は、列点文を施す263以外はいずれも無文である。灰原上位の包含層出土の個体は、口頸部中位を段によって区画するもの(266～269)が多い。口縁端部は内外に拡張されるもの(260～263・265～269)、内面側に突出するもの(264・270)がある。

大型の甕(271～287)は、いずれも口頸部外面を段や沈線によって区画し、区画内に



第47図 灰原出土須恵器フラスコ形長頸瓶・長頸瓶 (1:4)

は文様を充填する。文様は波状文、羽状の刺突文が主で、円形浮文を付すものもある。下層・上層出土の甕は波状文、灰原上位の包含層出土の甕は羽状列点文・円形浮文の組み合わせが文様構成の主体となる。口縁端部は断面「T」字状に内外に拡張されるもの、断面「L」字状に外面側に屈折するものがある。下層は前者で占められ、上層は両者が混在し、灰原上位の包含層は後者が主体となる。体部外面は平行叩き、内面はナデ・ハケ調整によって当て具痕が消されるものが多いが、同心円状の当て具痕が残されているものもある。285は頸部内面の補強に黄白色の粘土を塗布する。

288は大型の甕の体部外面にごく細い線による描画がある(第46図)。三角形と弧線を用いた表現のようにも見受けられるが、具体的な画題は不明である。

フラスコ形長頸瓶・長頸瓶・大型長頸瓶

長頸瓶はフラスコ形長頸瓶と無蓋・有蓋の長頸瓶(289~351)、無蓋・有蓋の大型長頸瓶(352~365)がある(第47~49図)。下層出土の289・290は体部のロクロの回転方向からフラスコ形長頸瓶であることが分かる。口頸部高は10cm以上で頸部の長大

文様

口縁部の形状

調整

粘土の塗布

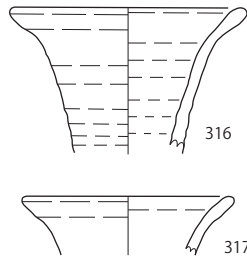
線刻

フラスコ形長頸瓶

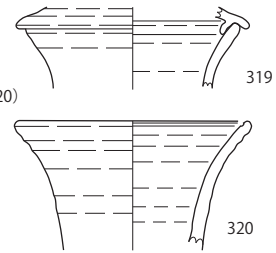
頸部の長大化

東中田A古窯

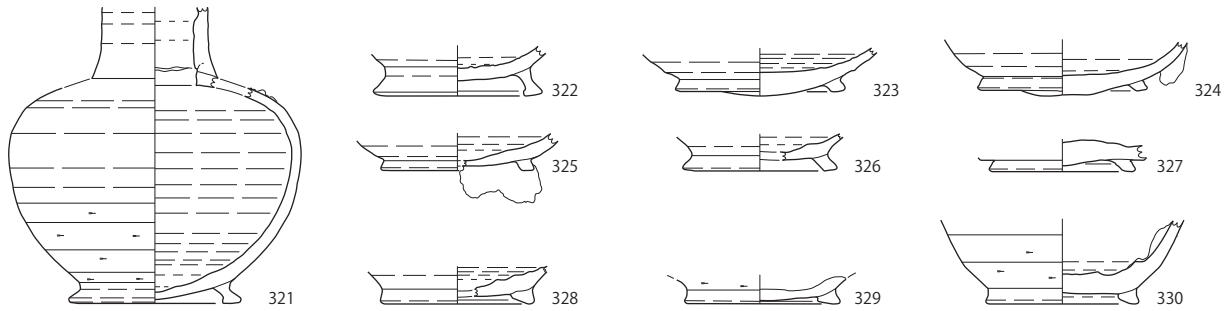
下層 (316~319)



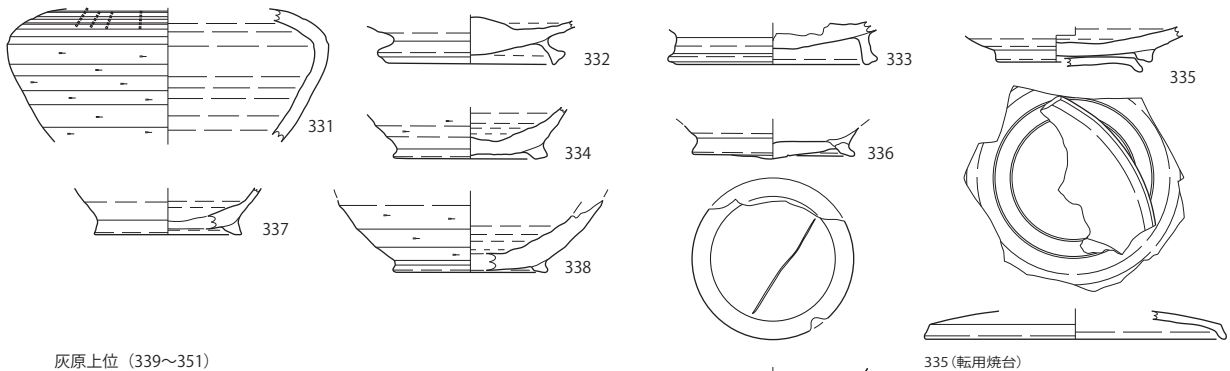
灰原上位 (320)



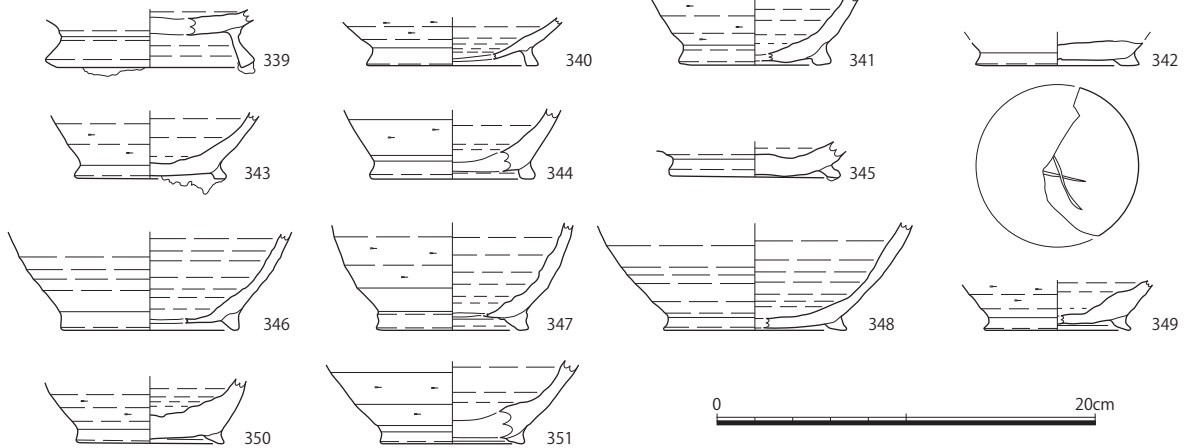
下層 (321~330)



上層 (331~338)

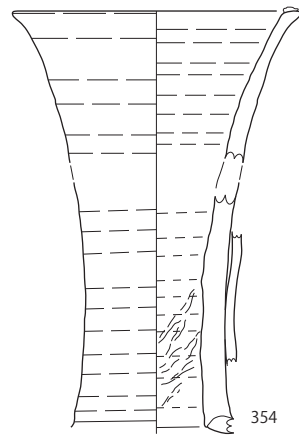
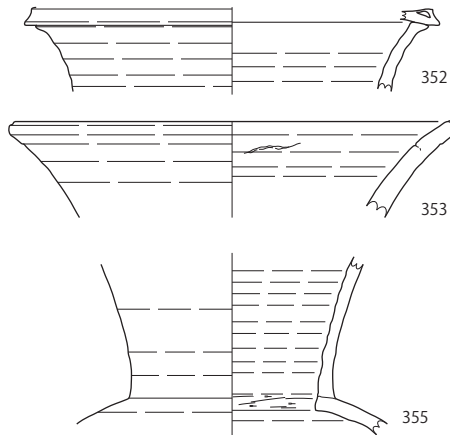


灰原上位 (339~351)

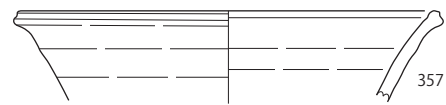
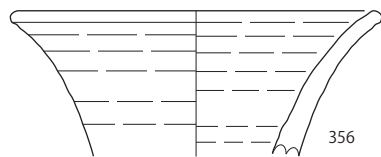


第48図 灰原出土須恵器長頸瓶 (1:4)

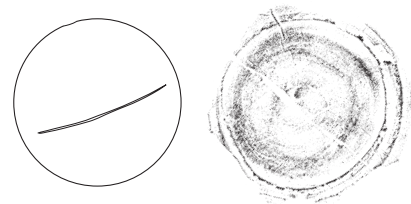
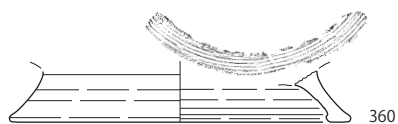
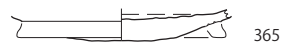
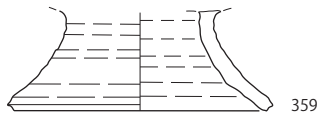
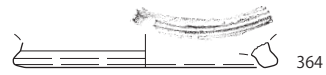
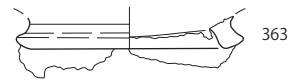
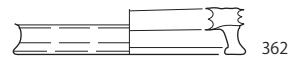
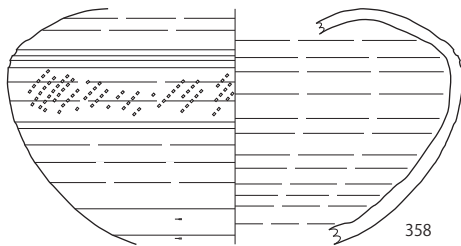
下層 (352~355)



下層 (358・灰原上位 (356・357))

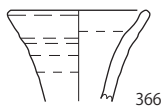


下層 (358・361・363・365)・上層 (360・362)・灰原上位 (359・364)

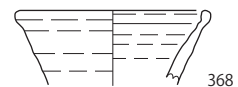
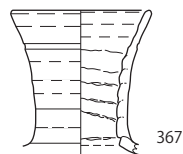


0 20cm

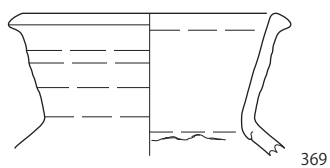
下層 (366)



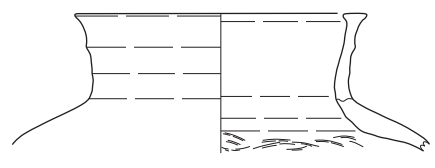
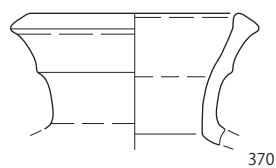
灰原上位 (367・368)



下層 (369)



灰原上位 (370・371)



371

第49図 灰原出土須恵器大型長頸瓶・平瓶 (1:4)

化が著しく、口縁部中位に施される沈線を欠く。これらの特徴はフラスコ形長頸瓶としては型的に後出する要素である。

口縁部の形状 291～315はフラスコ形長頸瓶または有高台の長頸瓶の口縁部であるが、口縁部の形状から両者を区別することは難しい。291・292は下層、293～296は上層、297～315は灰原上位の包含層から出土した。口縁部は有段状となるもの（291・293・297～305）、口縁部外面に段（突線）をもつもの（306～308）、沈線を施したもの（309）、段や沈線を欠くもの（292・294～296・310～315）がある。口縁端部はわずかに窪むもの、上下に拡張されるもの、上方か下方に突出するものがある。

長頸瓶口縁部 316～320は口縁部が単純に外反する長頸瓶の口縁部で、口径は11～12cm前後を計測する。316～319は下層、320は灰原上位の包含層から出土した。319は返りがある蓋（蓋G2）が被さった状態で釉着する。316・317・320は外面に降灰が認められる一方、内面には降灰が認められないことから、319と同様に有蓋の長頸瓶である可能性が高い。

長頸瓶体・底部 321～351は長頸瓶の体部から底部付近で、高台（脚台）が高い一群（後述）を除いて高台径は8～9cm前後を計測する。321～330は下層、331～335は上層、339～351は灰原上位の包含層から出土した。331は体部上半に列点文を施す。体部下半はいずれも回転ヘラケズリ調整を施す。高台（脚部）は高台（脚部）が高いもの（321・322・332・333・339・340）、重厚な断面方形のもの（323～327・334・335・341～344）、断面台形のもの（328～330・336～338・345～351）がある。335の高台部分には支持具に転用した蓋B1が釉着する。

大型長頸瓶 およそ口径15cm以上、高台径12cm以上の長頸瓶を大型長頸瓶とした（第49図）。

蓋の釉着 352～355・358・361・363・365は下層、360・362は上層、356・357・359・364

は灰原上位の包含層から出土した。352は蓋が釉着した状態で出土した。353・354も口縁端部に蓋が付着した痕跡が認められることから、352と同様に蓋を伴っていたとみられる。特に352と354は、口縁端部が外面側に断面三角形に引き出され、蓋を受けるような形状に仕上げられている。355は頸部が広い特徴が他の長頸瓶とは異なる（混入遺物の可能性がある）。内面に降灰が認められることから、無蓋の長頸瓶であろう。357も内

面に降灰が認められる。無蓋の長頸壺であろう。358は体部中位付近に列点文を施す。色

調はやや暗い灰色で、体部上半に濃緑色の自然釉が流れ掛かる。359・360は長脚のもの、361・362は高台が高いもの、363・364は断面方形の高台で、ほぼ例外なく接合沈線を施して脚部（高台）を接合している。

平瓶・大型平瓶

平瓶・大型平瓶は口頸部から体部上半の部分のみを抽出した（第49図）。366・369は下層、367・368・370・371は灰原上位の包含層から出土した。なお、平瓶・大型平瓶は濃緑色の自然釉が流れ掛かるものが多い。

平瓶とした366～368の口縁部は単純に外反する。口頸部は短小なもの（366）、やや長大なもの（367・368）がある。

369～371は大型平瓶とした。369は口縁端部が外面側に突出する。370・371は口頸部中位を段によって区画し、口縁端部は内外に拡張される。

その他

以下、その他の器種をまとめた（第50図）。372・373は無高台の小杯で、372は上層、373は灰原上位の包含層から出土した。374は有高台の小型の碗で、上層から出土した。外面全面に降灰が認められ、窯内においては高台を上に向けて置かれたようである。375は盤で、灰原上位の包含層から出土した。混入遺物の可能性がある。376は深手の碗で、灰原上位の包含層から出土した。

小杯

碗

377～379は円面硯で、378・379は下層（同一個体の可能性がある）、377は灰原上位の包含層から出土した。円面硯としては、輪状の台脚を有する圈足硯、陸の周縁に突出する堤を設けて海と区画する有堤式に分類される。377・378は硯面の部分で、陸から海にかけて緩やかに傾斜する。379は台脚の部分で、透孔（窓）を10方向に切削する。

円面硯

圈足硯・有堤式

380～383は陶錘で、灰原上位の包含層から出土した。いずれも円筒形で、長7.5cm・幅2.5cm前後の小型（380～382）と、長10cm・幅3.5cm前後の大型（383）がある。382は粘土板を筒状に丸めて製作した痕跡が観察される。

陶錘

製作痕跡

384・385は陶馬で、下層から出土した（同一個体の可能性がある）。384は頸部から前肢の部分、385は胴体部分と推定した。残存する部位に馬具等の表現は認められず、裸馬を模したものと思われる。

陶馬

386は透孔（窓）などを切削した際に生じた端切れ状の粘土を焼成したもので、上層から出土した。代用トチとされることもあるが、1点のみの出土で、その評価は難しい。名古屋市高針原1号窯跡、長久手市丁子田1号窯跡等に報告例がある。

端切れ状の粘土

代用トチ

高針原1号窯跡

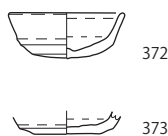
丁子田1号窯跡

土師器

387・388は土師器甕で、387は下層、388は上層から出土した。389は土師器碗（杯）とした。灰原上位の包含層から出土した。

甕・碗（杯）

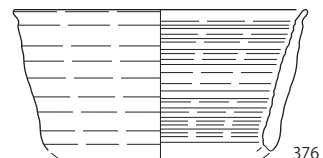
上層（372）・灰原上位（373）



上層（374）



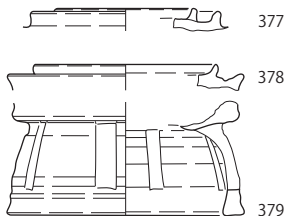
灰原上位（376）



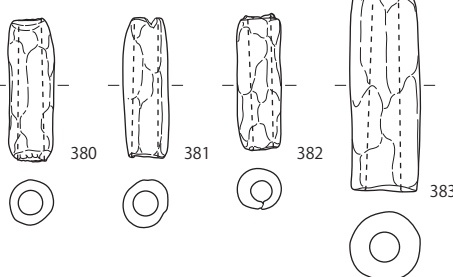
灰原上位（375）



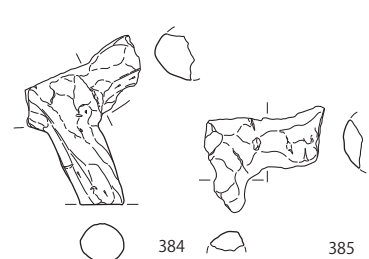
灰原上位（377）・下層（378・379）



灰原上位（380～383）



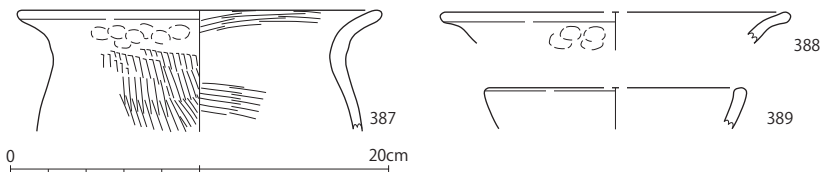
下層（384・385）



上層（386）



下層（387）・上層（388）・灰原上位（389）



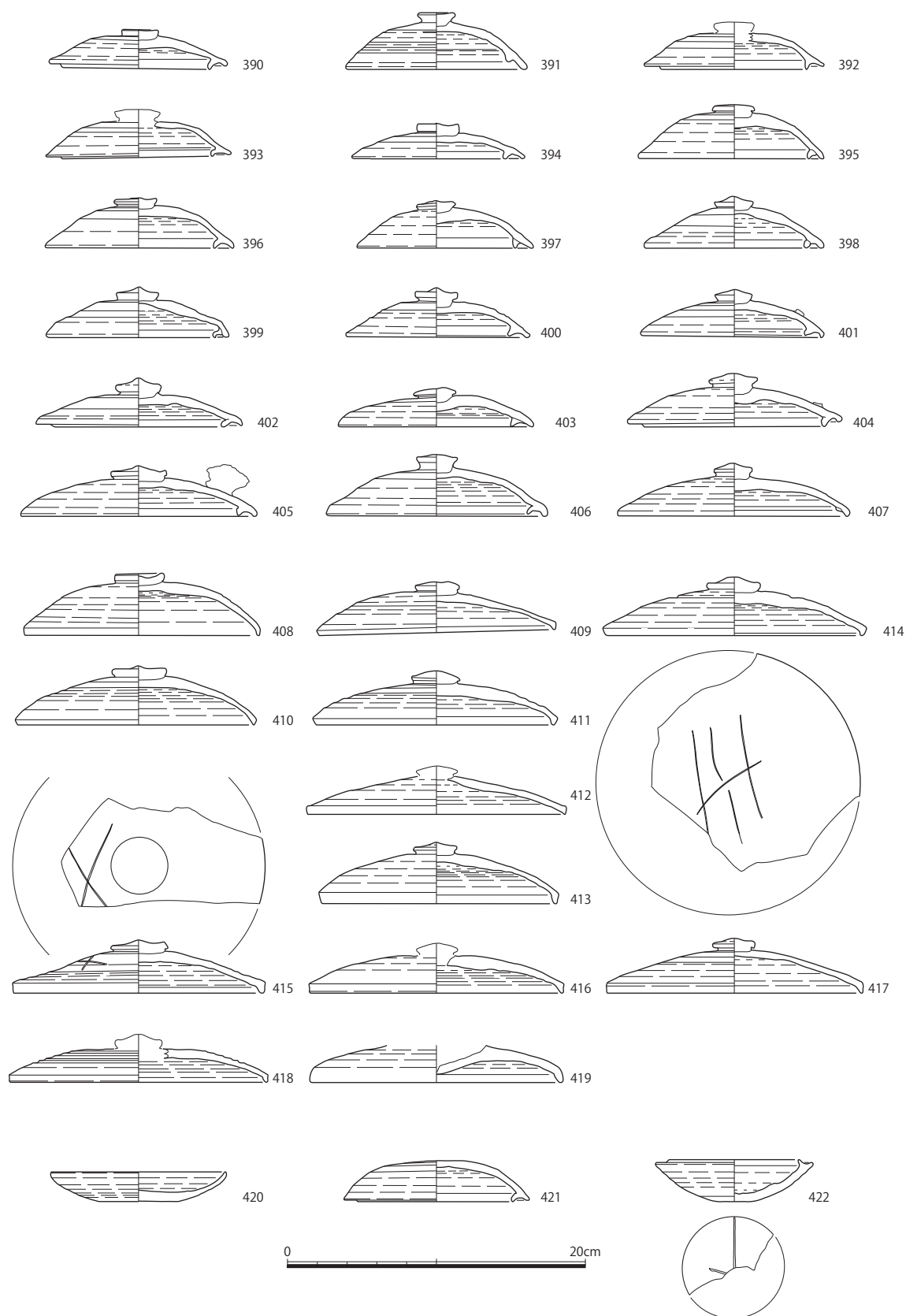
0 20cm

第50図 灰原出土その他須恵器・土師器（1:4）

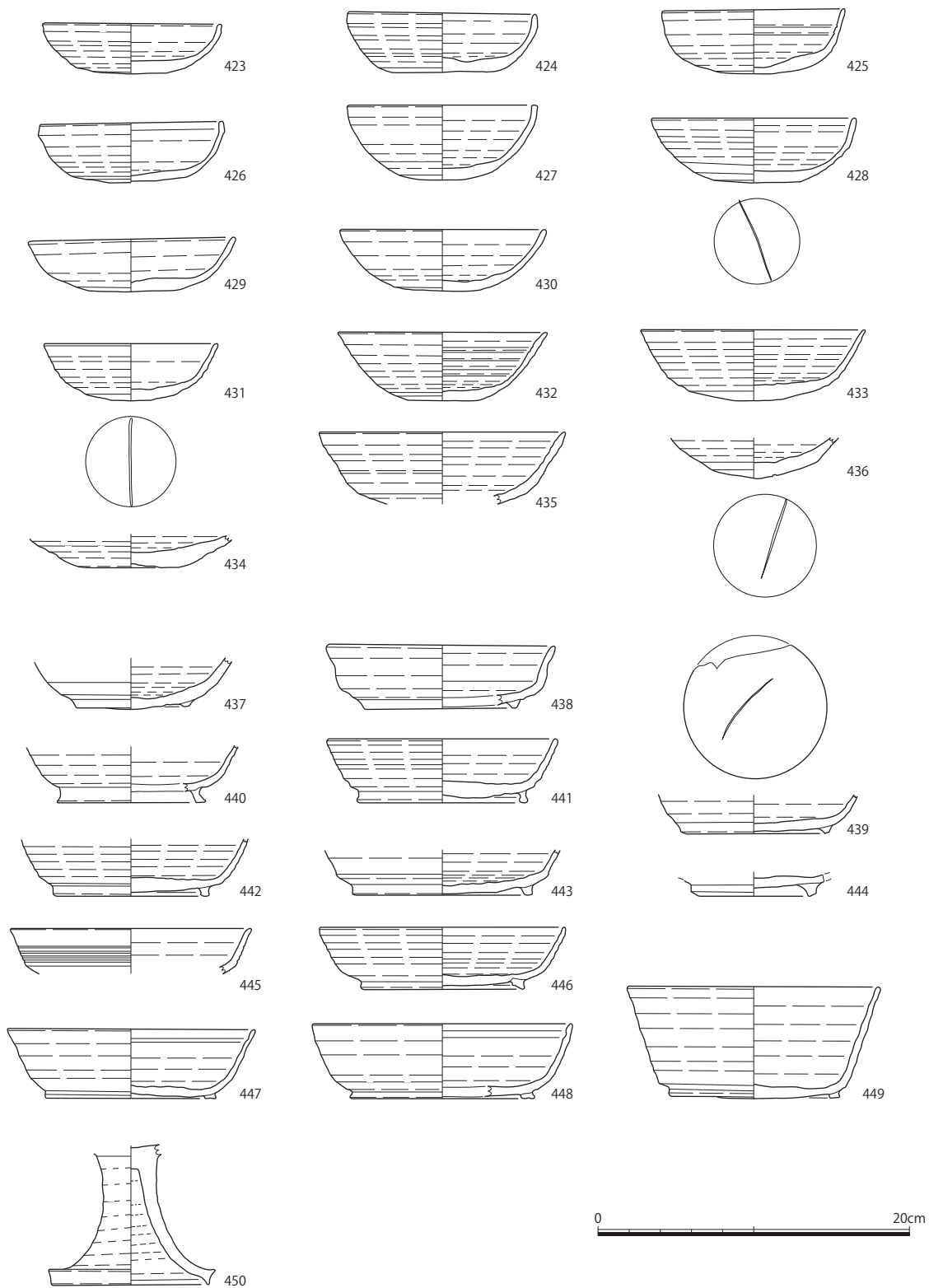
(4) 東向き斜面の遺物

土坑036SX

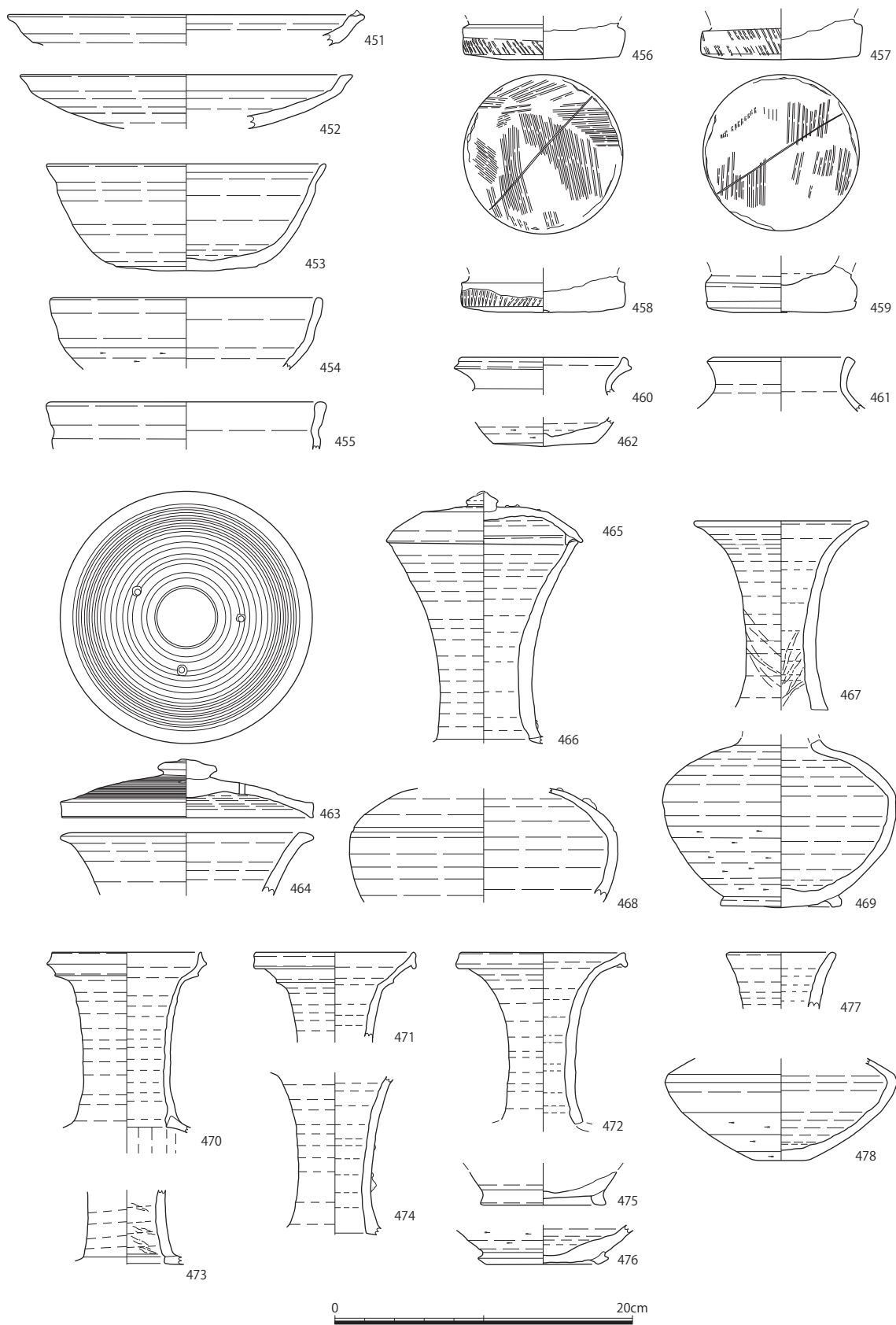
構成	036SXからは須恵器杯類（蓋G・蓋B・杯H・杯G・杯A・杯B）、皿？、高杯、高盤、鉢、陶白、広口壺、長頸瓶（フラスコ形長頸瓶、無蓋長頸瓶、有蓋長頸瓶、大型長頸瓶）、平瓶、土師器甕が出土した。
蓋	杯類・高杯 蓋は蓋G 1（390～401）、蓋G 2（402・403）、蓋G 3（404～407）、
蓋G 1	蓋B 1（408～413）、蓋B 2（414～419）で構成される（第51図）。蓋G 1は摘み形状a（390・391）が少なく、摘み形状b（394～401）が多い。蓋G 2、蓋G 3、蓋B
蓋G 2・G 3	1は408を除いていずれも摘み形状bによって占められる。
蓋B 1	蓋G 1とした391、蓋G 3とした407は内面の返りが著しく退化する。蓋G 3とした404には杯Bを積み重ねて焼成した痕跡が残る。杯Bの高台径は4.3cmに復原される。
蓋G 3と杯B	412は全体に直線で構成され、径がやや大きい（最大径17.3cm）、端部の折り返しが曖昧であることから蓋B 1に含めた。
	420～422は杯H、杯Hの蓋の可能性を考慮して抽出した個体である（第51図）。灰
皿A	原出土の杯H（62～66）の所見を参考として、420は窯内における上下から無高台の皿
蓋G	（皿A）、421は法量が蓋G 1に近似し、色調が灰白色を呈することから（摘みを付さない）
杯H	蓋G、422は色調が青灰色を呈することを勘案して杯Hとした。422の底部は切り離し未調整とする。
杯G・杯A	無高台の杯（第52図）は口縁部から体部の形状を重視して蓋Gを伴う杯G（423～430）と無蓋の杯A（431～436）に分類したが、杯Gとしたもので、底部が曖昧か底径が小さいもの、内面に降灰が認められるもの（427・429）については、杯Aとの判別が難しい。杯Gと杯Aは、法量からそれぞれ杯G 1（423～427）と杯G 2（428～430）、杯A 1（431）と杯A 3（432～436）に分類される。杯G 1とした423・424の底部には同心円状の回転ヘラケズリが施される。
杯B	杯Bは杯B 1（437～445）、杯B 2（446～448）、杯B 3（449）によって構成される（第52図）。437は杯部の形状が無高台の杯Gに類似し、下方に突出する底部に低い断面台形の高台を付す。438は口縁部が屈折気味に外傾し、断面台形の高台（高台形状b）を付す。
杯B 1	440・441の高台はやや細身で（高台形状c）、442～444の高台は断面台形を呈する（高台形状b）。杯B 2とした446～448、杯B 3とした449は体部下位が丸みをもつ杯部に外端接地する低い高台（高台形状d）を付す。
杯B 2	
杯B 3	
高杯	450は高杯で、脚端部は上下に拡張される（第52図）。
	鉢・盤類 鉢・盤類としては、高盤（451～452）、鉢（453～455）、陶白（456～459）、壺類としては、広口壺（460～462）がある（第53図）。
	フラスコ形長頸瓶・長頸瓶・大型長頸瓶 長頸瓶（463～476）としては、蓋を伴う大型長頸瓶（463・464）、蓋を伴う長頸瓶（465・466）、フラスコ形長頸瓶（470）がある
長頸瓶の蓋	（第53図）。463は上面全面にカキメ状の条線を施し、小孔を穿つ。465は杯に伴う蓋に法量・器形が共通するもの（蓋G 2）がある一方、それらと比較して摘み径は著しく小さい。464・466の口縁端部はやはり蓋を受けるように外面側に断面三角形状に引き出され



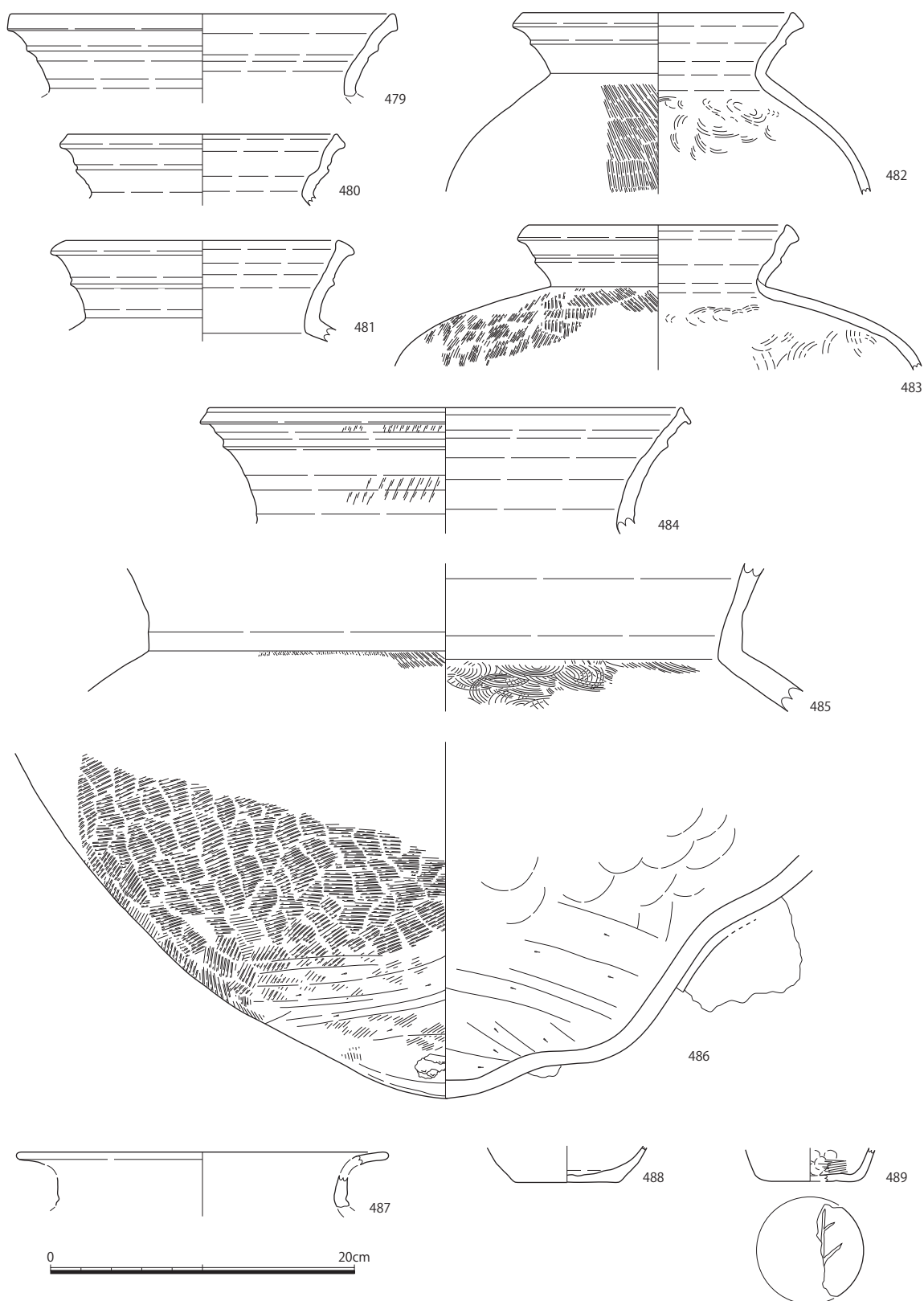
第51図 土坑036SX出土須恵器杯類1 (1:4)



第52図 土坑036SX出土須恵器杯類2・高杯 (1:4)



第53図 土坑036SX出土須恵器鉢類・瓶類 (1:4)



第54図 土坑036SX出土須恵器甕・土師器 (1:4)

る。467は単純に外反する口縁部の形状、内面の降灰の状況から無蓋であったと考えられる。フラスコ形長頸瓶の470は口頸部高が10cm以上で長大化が著しく、口縁部中位に施される沈線を欠く。口縁部は有段状となるもの（470・471）と段を欠くもの（472）、口縁端部が上下に拡張気味のもの（471）とわずかに窪むもの（472）がある。高台は重厚な断面方形のもの（469・475）と断面台形に近いもの（476）がある。

無蓋の長頸瓶

フラスコ形長頸瓶

平瓶 477・478は平瓶で（第53図）、478は底部が小さく、体部中位付近が大きく張り出す。体部下半は回転ヘラケズリ調整を施す。

小さい底部

甕 479～486は甕で（第54図）、およそ479～483が中・小型、484～486が大型に相当する。いずれも口頸部に文様は施されない。中・小型の甕はいずれも口頸部中位を段によって区画する。口縁端部は内外に拡張されるものが多い。体部外面は平行叩きを施す。体部内面は同心円状の当て具痕がかすかに残る。大型の甕の底部（480）は外面に支持具として使用した須恵器甕体部片が粘着する。

中・小型

大型

支持具

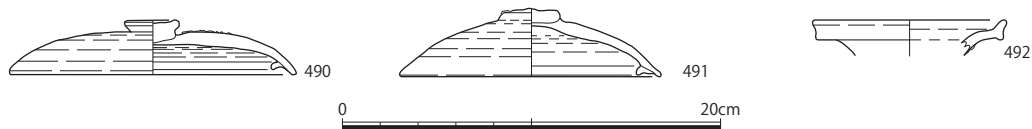
甕

木葉痕

土師器 487～489は土師器甕で（第54図）、484は口頸部の断面が「コ」字状を呈する。488・489は平底を呈する底部で、489の底部外面には木葉痕がある。

緩傾斜面040SX

遺物はごく少ない（第55図）。490は蓋G3で摘み形状a、490は蓋G2で摘み形状bに分類される。492は長頸瓶またはフラスコ形長頸瓶である。

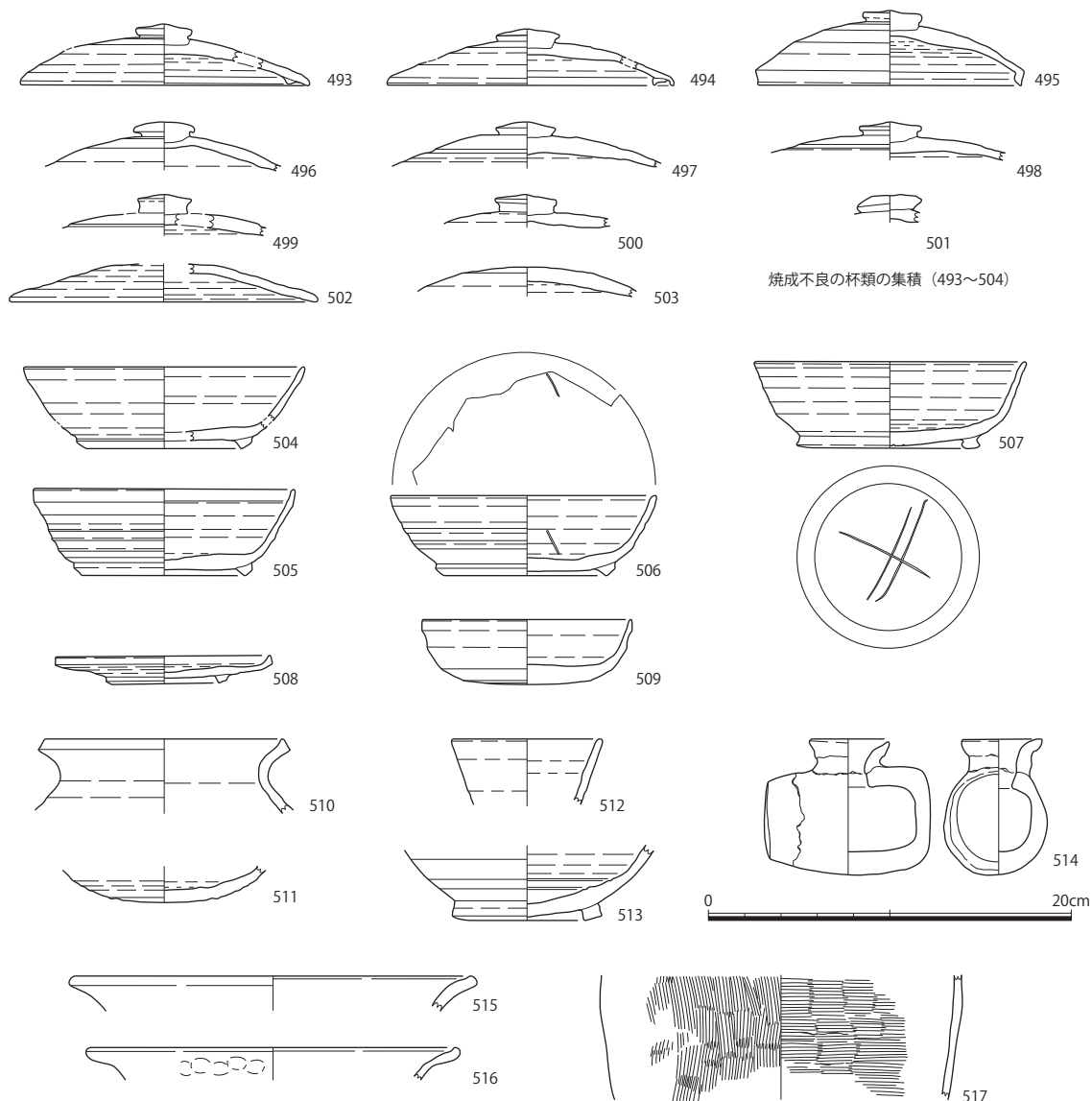


第55図 緩傾斜面040SX出土須恵器（1:4）

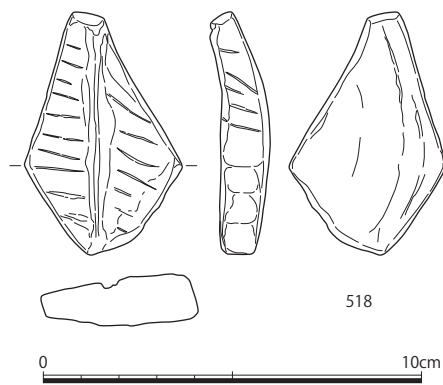
(5) 西向き斜面の遺物

竪穴建物002SX

- 構成 002SXからは須恵器杯類（蓋G 3・蓋B 1・杯B 1・杯G 1）、皿？、広口壺、平瓶、長頸瓶、ミニチュアの横瓶、土師器甕（第56図）、転用砥具（第57図）が出土した。
- 杯類 杯類は蓋G 3（493・494）、蓋B 1（495）、杯B 1（504～507）、杯G 1（509）がある（第56図）。496～504は竪穴の東辺付近に集積されていた焼成不良の一群で、風化が著しい。
- 焼成不良の杯類 502は内面の返りが剥離している可能性がある。503は摘みを付さない蓋とした。杯B 1
- 杯B はいずれも口縁部から体部が直線的で、腰の屈折は曖昧な形状を呈する。高台は内端接地する断面台形のもの（高台形状b）が多い（504～506）。507は口縁部から体部がやや外反し、やや低い断面方形の高台（高台形状a）を付す。
- 皿B 508は蓋の可能性も考慮されるが、窯内における上下を重視して有高台の皿（皿B）とした（第56図）。最大径は12.0cmで、高台の形状は杯Bの高台に類似する。類例に乏しい。



第56図 竪穴建物002SX出土須恵器・土師器（1:4）



第57図 002SX出土転用砥具 (1:2)

竪穴建物003SX

003SXからは須恵器杯類（蓋G 3・蓋B 1・蓋B 2・蓋B 3・杯B 1・杯B 2・杯A 3）、蓋、皿？、高杯、高盤、陶白、小型壺、広口壺、甕、ミニチュア長頸瓶、長頸瓶、平瓶、甕、土師器甕が出土した（第58・59図）。また、竈内より製塩土器が出土した（第59図）。その他、石製品として砥石（第60図）、鉄製品として鉄鏃（第61図）が出土した。

杯類は蓋G 3（520）、蓋B 1（521～528）、蓋B 2（529～537）、蓋B 3（538）、杯B 1（547～552）、杯B 2（553）、杯A 3（554～559）がある（第58図）。519は長頸瓶の蓋で、摘み径は小さく（2.4cm）、摘み高は著しく高い（2.1cm）。それと組み合わせる長頸瓶の口径は12cm前後に復原される。蓋G 3とした520の摘み形状はb、蓋B 1とした521～523の摘み形状はa、524～529の摘み形状はb、蓋B 2とした529～537の摘み形状はb、蓋B 3とした538の摘み形状はcである。529は内面に当て具痕が残る。538は杯Bを積み重ねて焼成した痕跡が残る。杯Bの高台径は10.0cmに復原される。539は摘みを付さずに天井部分を未調整とした蓋Bで、他の蓋Bと比較して法量（最大径）が小さい。

540～542は最大径が12cm前後（3個体の平均12.1cm、最小11.7cm、最大12.6cm）の返りが無い小型の蓋で、蓋Cとしたが、組み合わせとなる器種は不明である。

543～546は蓋の可能性も考慮されるが、竈内における上下を重視して無高台の皿（皿A）とした。類例には乏しい。底部は入念な回転ヘラケズリ調整を施す。最大径は13cm前後（竈内から出土した582を含めた5個体の平均12.9cm、最小12.6cm、最大13.2cm）である。これらの皿は、上下に重ねて焼成されている。

杯Bは口縁部から体部がやや折れ気味で、やや低い断面方形の高台（高台形状a）を付す杯B 1（547～551）、口縁部から体部が直線的で外端接地する高台（高台形状d）を付す杯B 1（552）、杯B 2（553）がある。いずれも腰の屈折は曖昧である。杯Aは法量（口径）が大きい杯A 3（554～559）によってほぼ占められる。底部は切り離し後、曖昧なヘラケズリを施すのみのものが多く、板目圧痕が認められるものもある。

他の器種として、小型の高杯（561）、高盤（562）、陶白（563）、小型壺（564）、広口壺（565・566）、甕（567）、ミニチュア長頸瓶（568）、長頸瓶（569～574）、平瓶（575）、甕（576～578）がある（第58・59図）。ミニチュア長頸瓶は体部をナデ調整で仕上げ、重厚な

その他、広口壺（510・511）、平瓶（512）、長頸瓶（513）、ミニチュアの横瓶（514）がある（第56図）。514は円筒形の体部を成形して上端を塞ぐ。その後、体部側面を穿孔して口頸部を付す。

515～517は土師器甕である（第56図）。518は焼成不良の蓋の破片を再加工し、砥具に転用した土製品で、持ち手となる部分を除く各側面を使用面とする（第57図）。内面と側面にはごく細い線による線刻がある。

ミニチュアの横瓶

土師器甕

転用砥具

構成

杯類

長頸瓶の蓋

蓋G

蓋B 1

蓋B 2・蓋B 3

杯Bの積み重ね

摘みを付さない蓋

蓋C

皿A

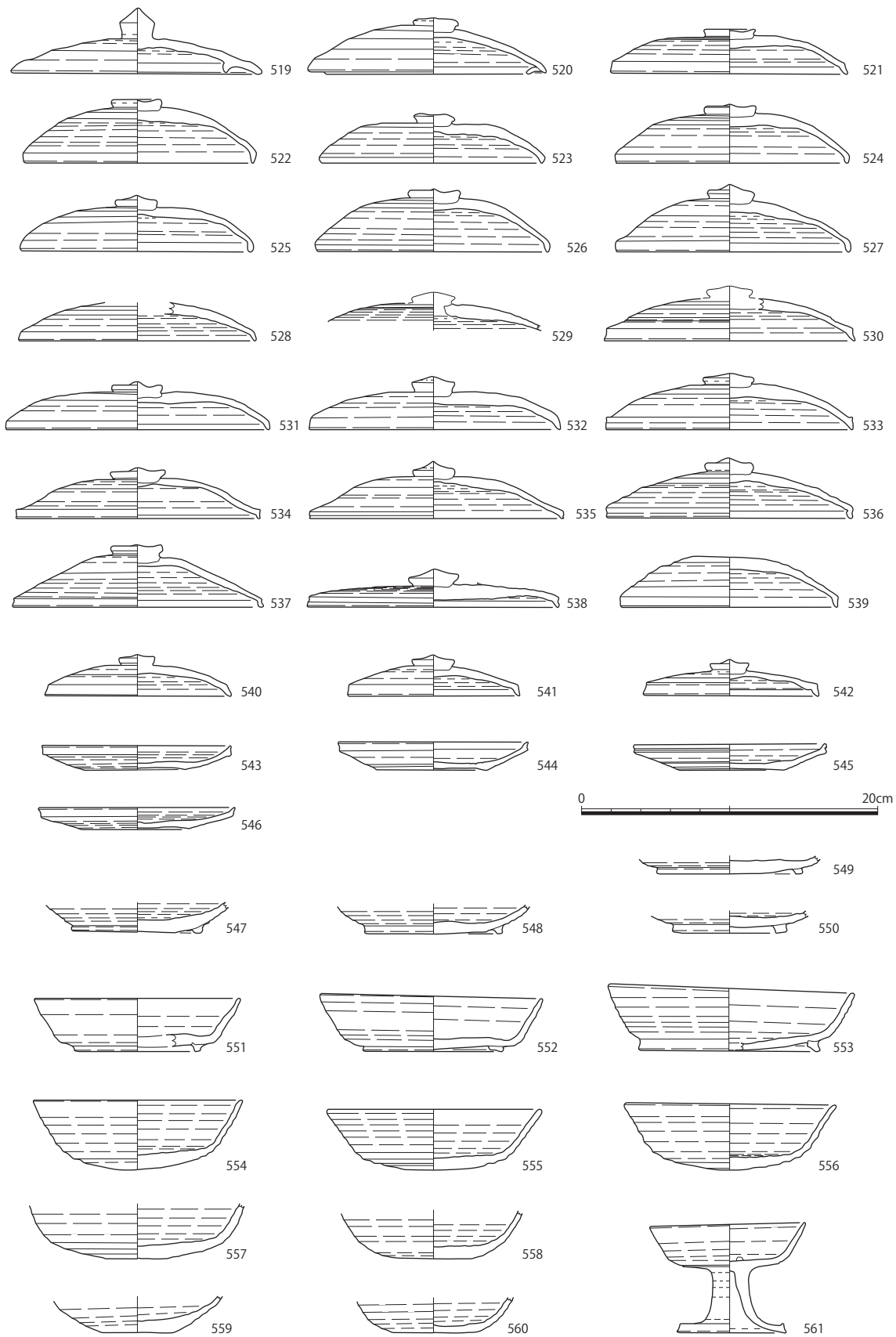
焼成

杯B 1

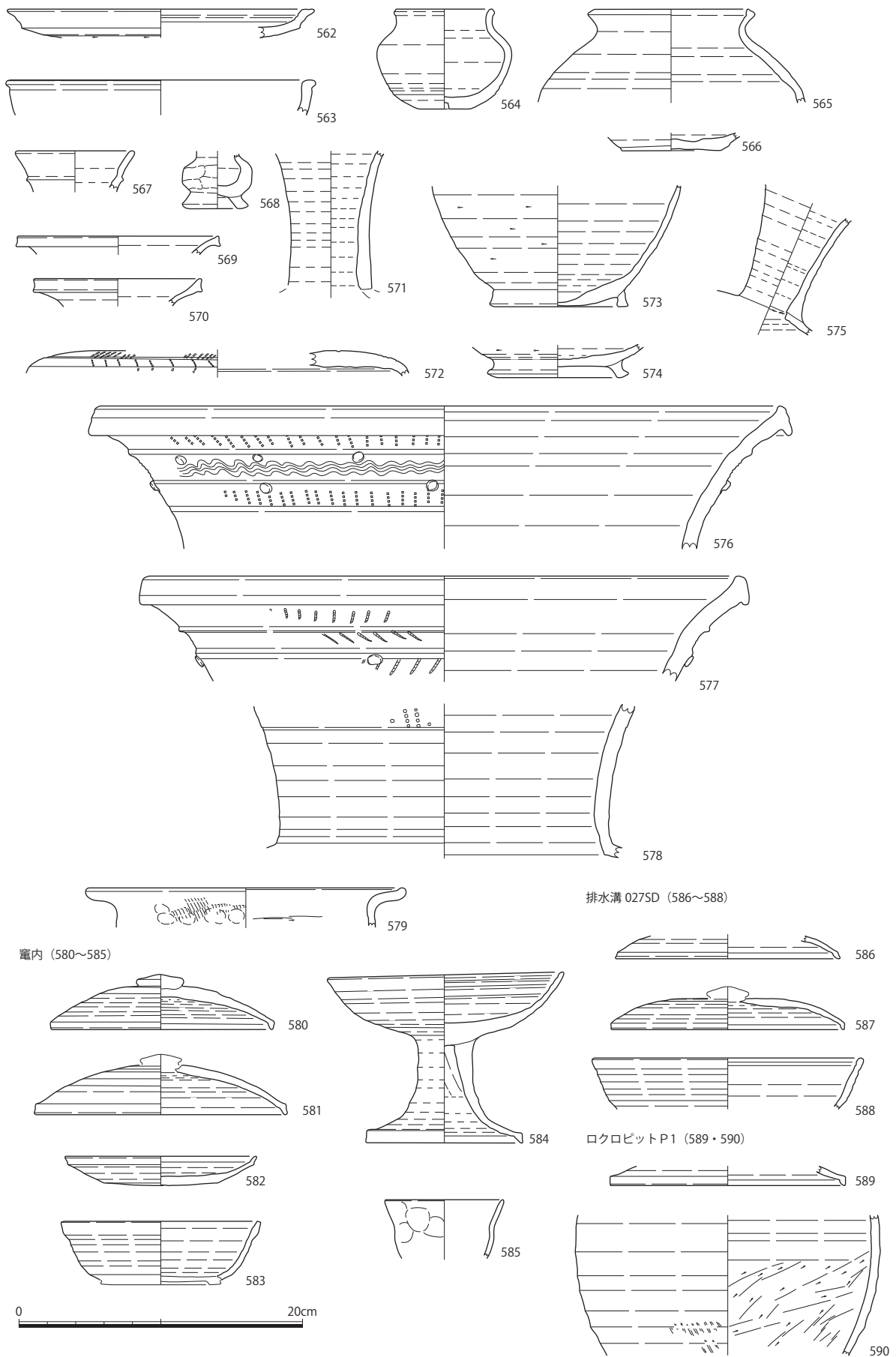
杯B 2

杯A 3

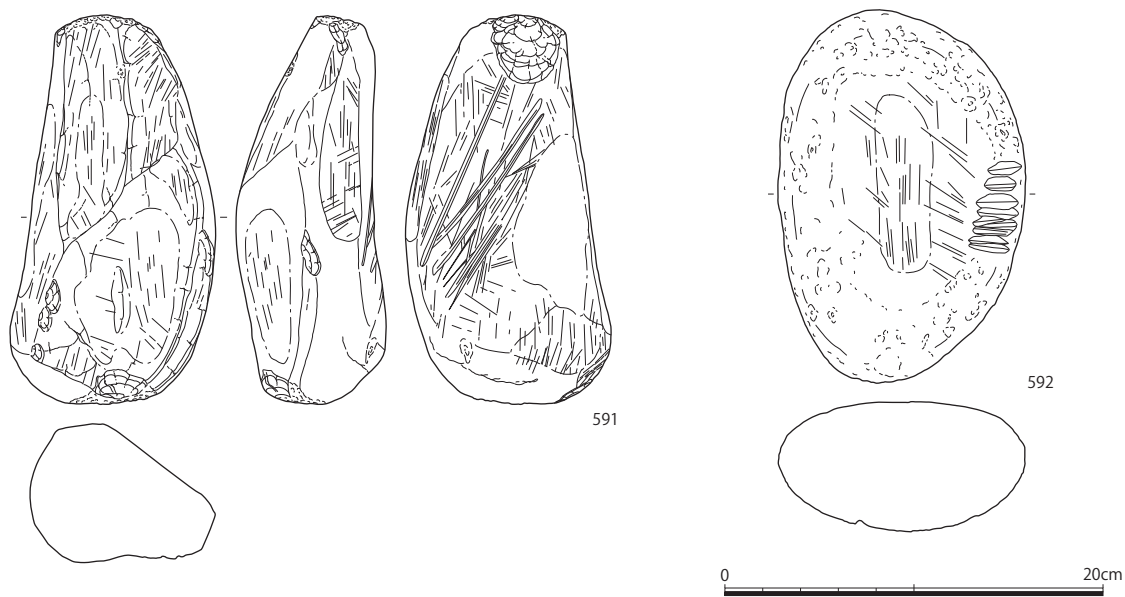
ミニチュア長頸瓶



第58図 竪穴建物003SX出土須恵器杯類・高杯 (1:4)



第59図 竪穴建物003SX出土須恵器・土師器 (1:4)



第60図 003SX出土砥石 (1:4)

長頸瓶

断面方形の高台を付す。長頸瓶はいずれも段を欠くもので、口縁端部がわずかに窪む。571 は頸部が長大化した個体である。高台は断面長方形で、574 は先端が外方に引き出される。575 は体部内面のロクロの回転方向から平瓶とした。頸部はやはり長大かが著しい。

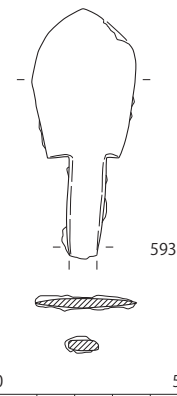
平瓶

大型の甕

甕はいずれも大型で、口縁端部は断面「T」字状に内外に拡張される。口頸部は段や沈線によって区画され、576 は列点文、波状文と円形浮文、577 は列点文と円形浮文、578 は列点文によって文様が構成される。

土師器甕

579 は土師器甕で (第 59 図)、口頸部の断面が「コ」字状を呈する。



第61図 003SX出土鉄鏝 (1:2)

竈内出土遺物

580～585 は竈内、586～588 は排水溝 027SD、589・590 はロクロピット P 1 から出土した (第 59 図)。580 は蓋 B 1 で摘み形状 b、581 は B 2、582 は 543～546 と同様の無高台の皿 (皿 A) で、土師質に焼成 (焼成不良) される。583 は杯 B 1 で、口縁部の先端付近が肥厚する。584 は高杯で、杯部はやや浅く、脚端部は下方に突出する。585 は製塩土器で器壁がごく薄い。棒状脚の有無は不明である。586・587 は蓋 B 1、588 は杯 B、589 は蓋 B、590 は長頸瓶とした。

製塩土器

排水溝出土遺物

ロクロピット出土遺物

砥石

鉄鏝

591・592 は竪穴の床面付近から出土した砥石で、石材としていずれも凝灰質砂岩の円礫を利用する (第 60 図)。593 は鏝身が五角形を呈する平根式の鉄鏝である (第 61 図)。

土坑005SK

構成

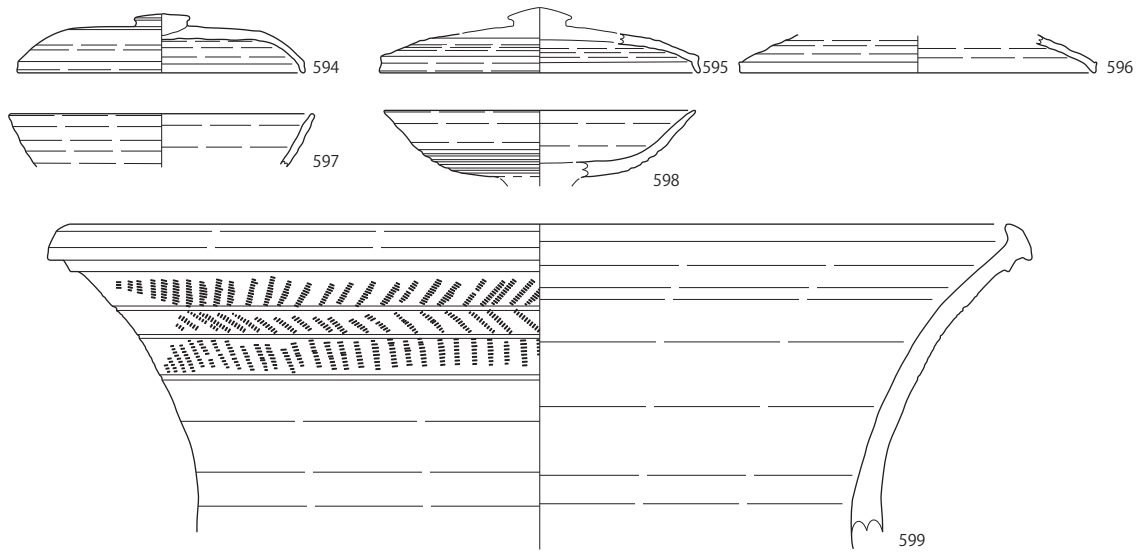
005SX からは杯類 (蓋 B 1・蓋 B 2、杯 B)、高杯、甕が出土した (第 62 図)。

杯類

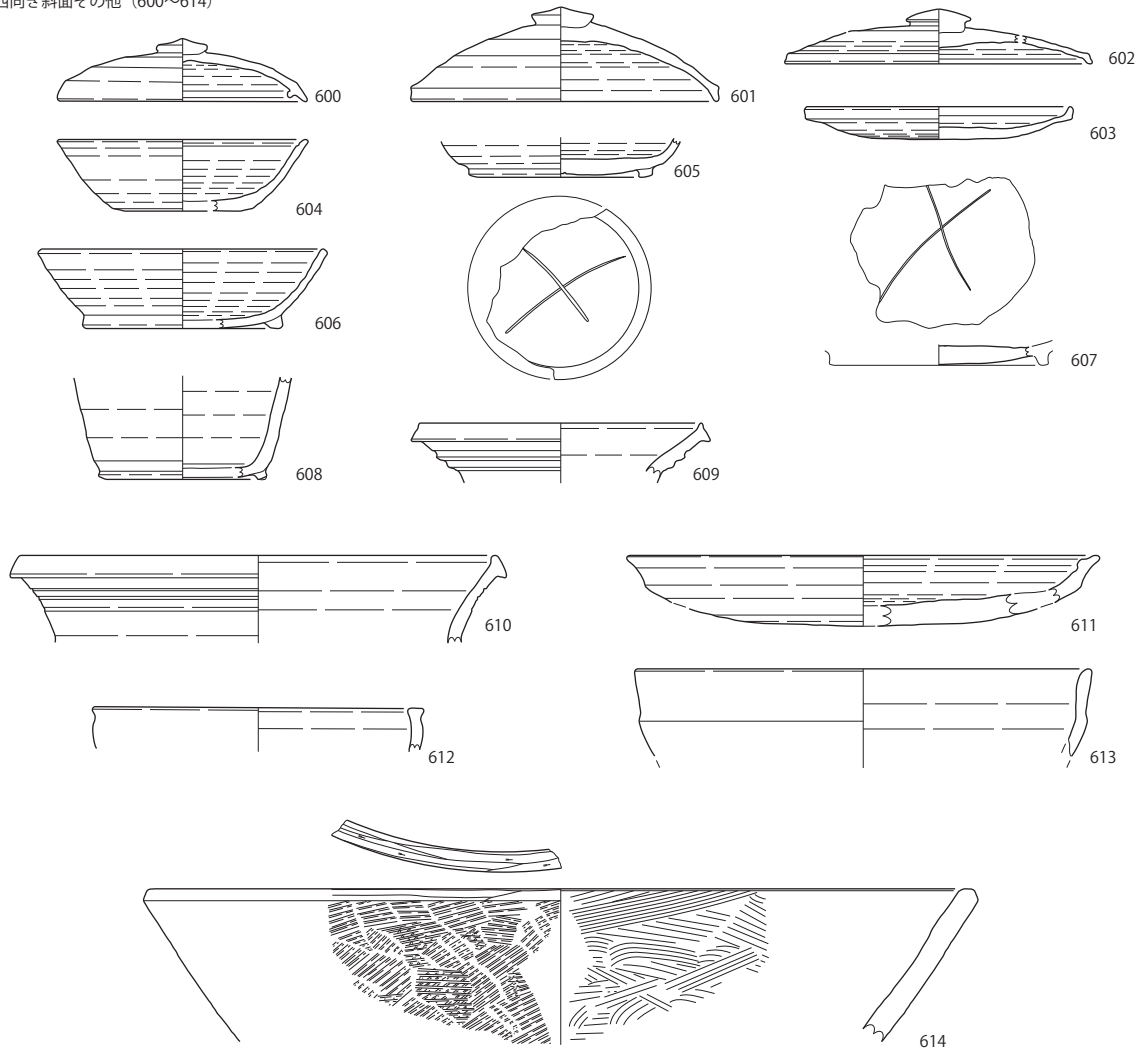
杯類は蓋 B 1 (594)、蓋 B 2 (595・596)、杯 B (597) がある。高杯 (598) は杯部が浅く、杯部下半にカキメ状の条線を施す。大型の甕 (599) は口縁端部が断面「T」字状に内外に拡張される。口頸部上半は沈線によって区画され、区画内には列点文を充填する。

大型の甕

005SX (594~599)



西向き斜面その他 (600~614)



第62図 土坑005SX・遺構外出土須恵器 (1:4)

遺構外出土遺物

004SX出土遺物	600～614は、土坑状の落ち込み004SXから出土した602を含めて、西向き斜面において出土した明確な遺構に伴わない須恵器を図示した（第62図）。
杯類	杯類は蓋G 2（600）、蓋B 1（601・602）、杯A 3（604）、杯B（605～607）がある。
不明器種	603は543～546、582と同様の器形で、無高台の皿（皿A）とした。608は高台を付す器種で、器高が高い小型の杯Bとも思われるが、不明器種とした。609は長頸瓶、610は甕、611は盤、612は陶白、613は鉢、614は大型の鉢。611は脚を付さない盤として破片から復原して図示した。614は口縁部から体部が厚手となる鉢で、類例に乏しい。口縁部先端はヘラケズリによって仕上げられる。
厚手の鉢	

（6）釉着資料・転用焼台

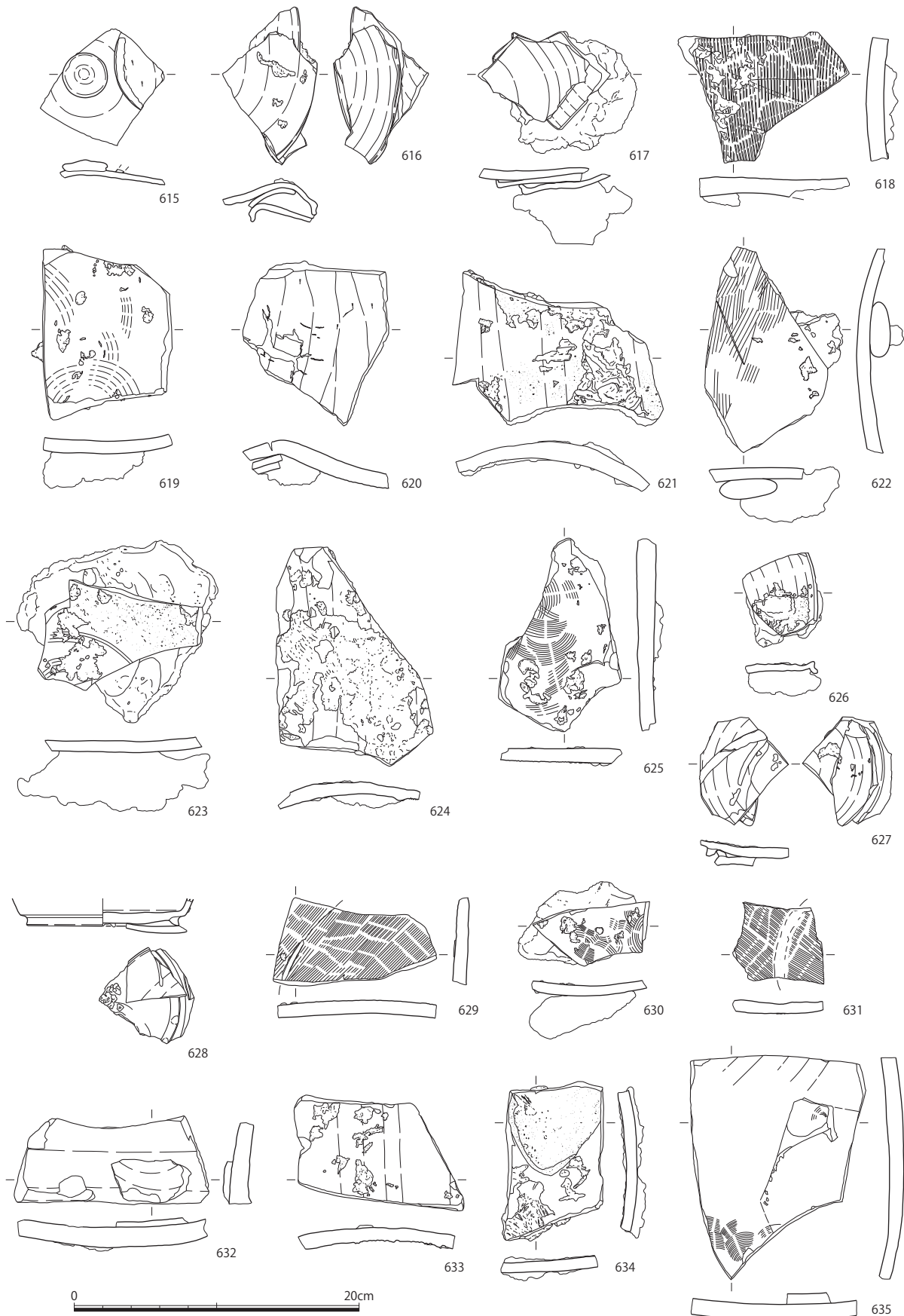
615～635はその他の釉着資料と転用焼台を図示した（第63図）。なお、専用焼台は出土していない。

蓋と杯Bの積み重ね	615は蓋G（G 3）または蓋Bに杯Bを積み重ねて焼成したことを示す。杯Bの高台径は10.0cmに復原される。616は蓋Bと杯Bの組み合わせを積み重ねて焼成したことを示す。
蓋Bと杯B	
支持具	617は蓋Bの破片3点、620は甕の破片1点と不明器種（杯類）の破片2点、626は蓋Bの破片1点、627は杯Bの破片1点、628は蓋Bの破片1点、その他は甕・瓶類の破片を支持具として使用している。これらの支持具には、適当な器種と部位が選択され、622は径約4cmの円礫を同時に使用している。

第4章文献

奈良国立文化財研究所1962『平城宮跡発掘調査報告書Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第15冊
 奈良国立文化財研究所1976『平城宮跡発掘調査報告書Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊
 植崎彰一1982「日本古代の陶硯—とくに分類について—」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社
 山中敏史1983「陶硯の分類」『埋蔵文化財ニュース』41 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
 愛知県教育委員会1983『愛知県古窯跡群分布調査報告書（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）』
 湖西市教育委員会1990『吉美中村遺跡』湖西市文化財調査報告書第25集
 春日井市教育委員会1994『春日井市遺跡発掘調査報告書』第9集
 愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター1999『細口下1号窯・鴻ノ巣古窯・高針原1号窯』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第81集
 長久手町教育委員会・財団法人瀬戸市文化振興財団2007『丁子田窯跡・市ヶ洞1号窯跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第36集

灰原下層 (615・616・618~625) 灰原上位 (626~635) 036SX (617)



第63図 釉着資料・転用焼台 (1:4)

第 5 章 分析・考察

(1) 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani

はじめに

愛知県豊橋市に位置する東中田 A 古窯より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料と方法

試料 測定試料の情報、調製データは第 3 表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C 年代、暦年代を算出した。

結果

ウィグルマッチング 第 2～4 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C 年代、¹⁴C 年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。なお、第 3・4 表はウィグルマッチング結果も示している。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C 年代 ¹⁴C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C 年代（yrBP）の算出には、¹⁴C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ¹⁴C 年代誤差（ $\pm 1 \sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ¹⁴C 年代がその ¹⁴C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

暦年較正 なお、暦年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ¹⁴C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ¹⁴C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ¹⁴C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

試料の年代を得る上での問題は ¹⁴C 年代値から暦年較正を行う際に較正曲線に凹凸があるため単一の測定値から高精度の年代を決定するのが難しいという点である。ウィグルマッチング法では複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと、較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって高精

第3表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-12951	グリッド:9I2j 遺構:008SK 試料No.12	試料の種類:炭化材(マツ属) 試料の性状:最外以外樹皮に近い部分を採取 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)
PLD-12952	遺構:001SY 位置:煙道 試料No.13	試料の種類:炭化材(マツ属) 試料の性状:最外以外樹皮に近い部分を採取 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)
PLD-12953	グリッド:9I1k 遺構:003SX 試料No.16	試料の種類:炭化材(マツ属複雑管束亜属) 試料の性状:最外年輪 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)
PLD-12954	グリッド:9I1a 遺構:036SX 試料No.6 ウイグルマッチング	試料の種類:炭化材(コナラ節) 試料の性状:最外年輪・5年目 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)
PLD-12955		試料の種類:炭化材(コナラ節) 試料の性状:11-15年目 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)
PLD-12956		試料の種類:炭化材(コナラ節) 試料の性状:21-25年目 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)
PLD-12957		試料の種類:炭化材(コナラ節) 試料の性状:31-35年目 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)
PLD-12958		試料の種類:炭化材(コナラ節) 試料の性状:41-45年目 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)
PLD-12959		試料の種類:炭化材(コナラ節) 試料の性状:51-55年目 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)
PLD-12960		試料の種類:炭化材(コナラ節) 試料の性状:最外年輪・5年目 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)
PLD-12961	グリッド:9I2c 遺構:灰原下層 試料No.15 ウイグルマッチング	試料の種類:炭化材(コナラ節) 試料の性状:11-15年目 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)
PLD-12962		試料の種類:炭化材(コナラ節) 試料の性状:21-25年目 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)
PLD-12963		試料の種類:炭化材(コナラ節) 試料の性状:31-35年目 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩 酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩 酸:1.2N)

度で信頼性のある年代値を求めることができる。

測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の¹⁴C年代値から暦年校正を行い、得られた確率分布を年輪幅だけずらしてすべてを足し合わせるにより最外年輪の確率分布を算出する。この確率分布より年代範囲を求める。

考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年校正を行った。試料 No.6 (PLD-12954～12959) と試料 No.15 (PLD-12960～12963) についてはウイグルマッチング法により最外試料の暦年代を求めた。

文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

第4表 試料No.12・13・16の放射性炭素年代測定と暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-12951 試料No.12	-26.86 $\pm$ 0.16	486 $\pm$ 19	485 $\pm$ 20	1421AD(68.2%)1440AD	1414AD(95.4%)1445AD
PLD-12952 試料No.13	-28.75 $\pm$ 0.14	961 $\pm$ 20	960 $\pm$ 20	1026AD(26.8%)1046AD 1092AD(32.9%)1121AD 1140AD(8.5%)1148AD	1020AD(33.7%)1057AD 1076AD(61.7%)1155AD
PLD-12953 試料No.16	-27.41 $\pm$ 0.19	1348 $\pm$ 20	1350 $\pm$ 20	655AD(68.2%)672AD	646AD(94.9%)689AD 755AD(0.5%)757AD

第5表 試料No.6の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-12954	-25.00 $\pm$ 0.13	1383 $\pm$ 22	1385 $\pm$ 20	643AD(68.2%)662AD	615AD(95.4%)670AD
PLD-12955	-27.14 $\pm$ 0.12	1393 $\pm$ 20	1395 $\pm$ 20	638AD(68.2%)660AD	612AD(95.4%)665AD
PLD-12956	-24.65 $\pm$ 0.14	1451 $\pm$ 19	1450 $\pm$ 20	599AD(68.2%)639AD	575AD(95.4%)646AD
PLD-12957	-26.66 $\pm$ 0.12	1482 $\pm$ 22	1480 $\pm$ 20	562AD(68.2%)607AD	545AD(95.4%)634AD
PLD-12958	-25.11 $\pm$ 0.14	1494 $\pm$ 19	1495 $\pm$ 20	558AD(68.2%)598AD	540AD(95.4%)616AD
PLD-12959	-24.54 $\pm$ 0.23	1426 $\pm$ 22	1425 $\pm$ 20	614AD(68.2%)647AD	594AD(95.4%)656AD
最外試料年代				648AD(68.2%)662AD	626AD(95.4%)665AD

第6表 試料No.15の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-12960	-24.84 $\pm$ 0.15	1357 $\pm$ 25	1355 $\pm$ 25	650AD(68.2%)671AD	637AD(93.4%)691AD 751AD(2.0%)763AD
PLD-12961	-24.83 $\pm$ 0.14	1361 $\pm$ 21	1360 $\pm$ 20	651AD(68.2%)668AD	642AD(95.4%)683AD
PLD-12962	-24.91 $\pm$ 0.23	1365 $\pm$ 20	1365 $\pm$ 20	650AD(68.2%)666AD	641AD(95.4%)680AD
PLD-12963	-25.28 $\pm$ 0.15	1440 $\pm$ 20	1440 $\pm$ 20	607AD(68.2%)641AD	580AD(95.4%)650AD
最外試料年代				665AD(68.2%)675AD	660AD(95.4%)680AD

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, 3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

(2) 出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

はじめに

東中田A古窯は豊橋市東細谷町に所在する飛鳥・奈良時代の須恵器窯である。ここでは、主に窯業生産関連遺構から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同じ試料の一部を用いてAMS法による年代測定を行っている（同章（1）を参照）。

年代測定

試料と方法

試料は036SXから11点（No.1～11）、008SKから1点、（No.12）、001SYから2点（No.13、14）、灰原下層から1点（No.15）、003SXから3点（No.16～18）の計18試料であるが、一つの試料から多数の樹種が検出された場合は試料No.の後ろに補助番号を付け、総計で21点の同定を行った。なお、放射性炭素年代測定の結果によると、各遺構から出土した炭化材の時期は036SXが7世紀、008SKが15世紀、001SYが11～12世紀、灰原下層が7世紀、003SXが7世紀である。

試料

最初に試料の形状を確認するとともに径の計測を行い、肉眼もしくは実体顕微鏡で観察して大まかな分類群に分けた。その後、手割りあるいはカッターナイフを用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）を採取した。直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定し、銀ペーストを塗布して乾燥させた後、金蒸着して走査電子顕微鏡（日本電子㈱製JSM-5900LV型）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

方法

結果

樹種同定の結果、マツ科のマツ属複維管束亜属、ブナ科のコナラ属クヌギ節、コナラ節、クリの4分類群を確認した。結果の一覧は第7表に示す。

以下に同定された分類群の木材組織の特徴を記し、写真に示す。

第7表 樹種同定結果一覧

試料No.	グリッド	遺構	樹種	備考
1	9I1a	036SX	クヌギ節	ミカン割り(半径51mm)、54年輪
2	9I1a	036SX	クヌギ節	破片(8×8mm)、26年輪
3	9I1a	036SX	マツ属複維管束亜属	ミカン割り(33×21mm)、7年輪
4	9I1a	036SX	コナラ節	破片(15×13mm)
5	9I1a	036SX	クヌギ節	ミカン割り(半径31mm)、24年輪
6	9I1a	036SX	コナラ節	半截(半径34mm)、55年輪
7	9I1a	036SX	マツ属複維管束亜属	破片(16×8mm)
8	9I1a	036SX	マツ属複維管束亜属	破片(16×10mm)
9	9I1a	036SX	コナラ節	微小片
10	9I1a	036SX	クリ	破片(17×10mm)
11	9I1a	036SX	クリ	破片(15×7mm)
12	9I2j	008SK	マツ属	破片(31×12mm)、6年輪
13	9I2j	001SY	マツ属	破片(20×18mm)、2年輪
14	9I2j	001SY	マツ属複維管束亜属	破片(31×13)mm
15-1	9I2c	灰原下層	マツ属複維管束亜属	破片(50×35mm)、5年輪
15-2	9I2c	灰原下層	コナラ節	ミカン割り(半径44mm)、35年輪
16-1	9I1k	003SX	マツ属複維管束亜属	丸木(直径19mm)、12年輪
16-2	9I1k	003SX	クリ	破片(22×9mm)
16-3	9I1k	003SX	コナラ節	破片(19×10mm)
17	9I1k	003SX	コナラ節	破片(28×14mm)
18	9I1k	003SX	クリ	ミカン割り(半径38mm)、16年輪

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus Subgen. Dploxylon* マツ科 写真3-1a-1c (No.7)

仮道管、垂直・水平樹脂道、放射柔組織、放射仮道管からなる針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道をエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管は内側へ向かって鋸歯状の突起がみられる。なお、放射仮道管の内壁が観察できなかったものはマツ属とした。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。

(2) コナラ属クヌギ節 *Quercus subgen. Quercus sect. Cerris* ブナ科 写真3-2a-2c (No.5)

環孔材で、年輪界はじめは大型でチロースを含んだ道管が1～数列に並ぶが、晩材部に移ると急に大きさを減じ、壁が厚く円形の小道管がやや放射方向に並ぶ。軸方向柔細胞は周囲状もしくは接線状に1～2列に並ぶ。道管の穿孔は単一で、放射組織は単列同性のものと広放射組織とが存在する。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギ・アベマキがある。

(3) コナラ属コナラ節 *Quercus subgen. Quercus sect. Prinus* ブナ科 写真3-3a-3c (No.15-2)

環孔材で、大型の道管が年輪界に沿って1～3列並ぶ。晩材部では薄壁で角ばった小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単一で、放射組織は同性、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

(4) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真3-4a-4c (No.16-2)

環孔材で、大型の道管が年輪界に2～3列集まり、仮道管が道管の周りを厚く取り囲む。晩材部では小道管が火炎状に配列している。道管の穿孔は主に単一で、放射組織は単列同性である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木で、材は耐朽性・耐湿性に優れ、保存性が高い。建築・家具・器具・土木などに利用される。

まとめ

樹種の構成

全体ではマツ属が若干多く、クヌギ節、コナラ節、クリはほぼ均等に検出されたが、遺構別による樹種の違いは確認できなかった。また試料の形状も破片が多かったため、木取りや年輪数の確認が行えたものも限られた。年輪数が数えられたものに関しては、クリやコナラ属類で年輪数が多く、マツ属はやや年輪数が少ないが、破片状であったためすべての年輪を数えることができなかったことは考慮すべきである。

高針原1号窯

飛鳥時代の須恵器窯である高針原1号窯では、クヌギ節とコナラ節が多く検出されていることから遺跡周辺には豊富な落葉広葉樹林があったとみられる。また、二次林におけるクヌギ・コナラ林は薪炭材として頻繁に伐採され年輪数はあまり多くない傾向にあるが、高針原1号窯のクヌギ節やコナラ節は40年輪数以上を持つ試料がほとんどであることから、これらが自然林やそれに近い落葉広葉樹林から燃料を得ていたと考えられる(植田; 1999)。当遺跡においても、クリやコナラ属類では年輪数が50年を超えるものもあることから、これらの落葉広葉樹は自然林を利用した可能性がある。

窯跡におけるマツ属の利用は、燃料材を得るための伐採により自然破壊が進んだ結果、二次林として増加したマツ属を燃料材として利用した可能性や、特に中世以降では火力の強い燃料材として、あえてマツ属を選択利用した可能性も考えられている（早野；2007）。当遺跡周辺には須恵器窯が多くあることから、落葉広葉樹の他に、おそらく二次林として生育していたマツ属も燃料材として利用していた可能性も考えられる。

マツ属の利用

文献

植田弥生（1999）出土炭化材の樹種同定。細口下1号窯 鴻ノ巣古窯 高針原1号窯，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第81集，163-168.

早野浩二（2007）夏敷古窯跡の特質。夏敷古窯跡 蛇廻間古窯跡，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第152集，160-167.

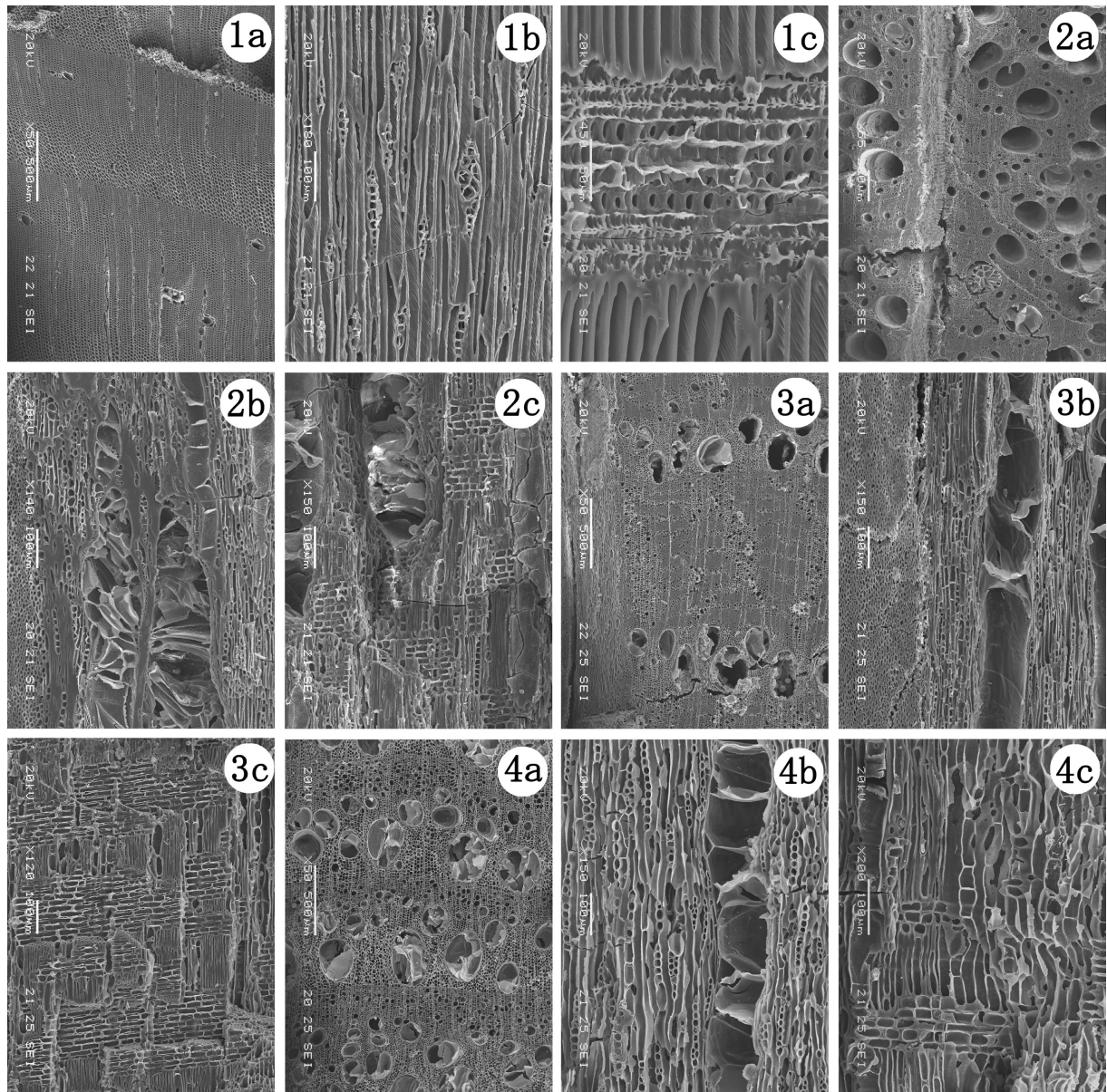


写真3 出土炭化材の顕微鏡写真（a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面）

1a-1c. マツ属単維管束亜属（No.7） 2a-2c. クヌギ節（No.5） 3a-3c. コナラ節（No.15-2） 4a-4c. クリ（No.16-2）

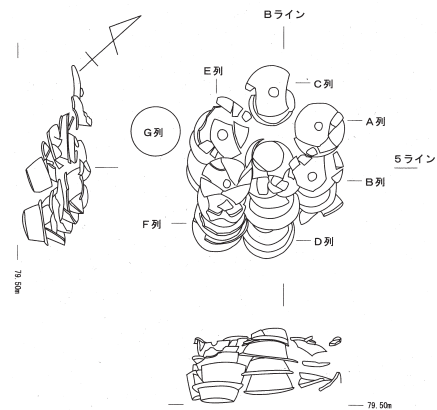
第6章 まとめ

(1) 須恵器生産関連遺構

焼成不良の須恵器杯類の集積

岩崎17号窯跡
岩崎41号窯跡
丁子田1号窯跡
集積の検出位置

灰原中において検出された焼成不良の須恵器杯類の集積については、日進市岩崎17号窯跡灰原中央、同岩崎41号窯跡灰原中央、長久手市丁子田1号窯跡の灰原中等の事例がある。岩崎17号窯跡の集積は焚口から約10m離れた灰原のほぼ中央部、丁子田1号窯跡の集積は前庭部から約10m離れた斜面中腹において検出されたもので、東中田A古窯において、前庭部付近と想定した040SXから約10m離れて焼成不良の須恵器杯類が検出された状況とも類似する。



第64図 丁子田1号窯跡の集積 (1:20)

杯類の構成

岩崎17号窯式を主体とする丁子田1号窯跡は、返りを有する蓋(蓋G)と無台杯(杯G)の組み合わせ5段8列を積み重ねた事例が詳細に報告されている(第64図)。この事例については、同一器種が集積されながらも、個体間には形態や製作技法に差が観察されることから、複数の工人が関与した製品が集積されたものと理解されている。東中田A古窯においても、集積された杯類が無蓋の無台杯(杯A)のみによって構成されながらも、法量から細分が可能で、製作技法が異なる個体も含まれていことから、やはり複数の工人が関与した製品によって構成されているものと推定される。

竪穴建物内の集積

なお、竪穴建物002SX内に集積されていた焼成不良の須恵器杯類の集積は、蓋G・蓋B・杯Gによって構成される。灰原中、竪穴建物内に集積される事例の相対化も必要であろう。窯体に付属する土坑

不整形の土坑

窯体に付属する不整形の土坑は湖西窯跡群の前庭部付近において検出されることが通例で、東中田A古窯の東向き斜面において検出された土坑036SX等も、窯体(の前庭部)の付近に掘削されたと考えられる。翻って、036SXの付近の東向き斜面に窯体の存在を推定することも可能であろう。

窯体の存在

土坑の諸例

土坑036SXは大小の土坑が連続して掘削されたような状況を呈し、類似した規模、形状の土坑として、東麓田古窯、一ノ宮峠場第1地点Ⅱ号窯、同第2地点Ⅰ号窯に伴う土坑がある。特に東中田A古窯にも近い東麓田古窯において検出された土坑は「付属遺構」と称され、036SXと遺構の時期、形状、遺物出土状況が相互に類似する。

東麓田古窯

土坑状の落ち込み

東中田A古窯の西向き斜面において検出された広く浅い土坑状の落ち込み004SXについても、類似した遺構は一ノ宮峠場第1地点、殿田第4地点、東笠子第12地点、古見第14地点、古見第16地点など、湖西窯跡群に多く確認されている。これらの遺構は窯体に伴う「作業場」と推測されている。

竪穴建物

湖西窯跡群の窯体周囲において検出された竪穴建物の事例として、西笠子 64 号窯跡の 1 号住居・2 号住居・3 号住居、加賀山第 2 地点の 1 号住居・2 号住居、東笠子第 25 地点の I・II 号窯住居、大沢第 5 地点の 1 号住居、東笠子第 36 地点の 1 号住、境川遺跡の SB01・SB02 がある（第 8 表・第 65 図）。これらは「住居跡及び作業場としての平坦面を付属施設として有」する「A 型窯場構造」を構成し、後藤健一による編年の湖西第 II 期第 2～6 小期（後藤 1989）、6 世紀後半から 7 世紀前半の窯場の状況を示すものとして把握されている（後藤 1987）。東中田 A 古窯の窯体 001SY 周囲において検出された竪穴建物 002SX・003SX はこれらに追加される事例であるが、竪穴建物は湖西第 IV 期第 1 小期に相当し（後述）、東笠子第 36 地点、境川遺跡を含め、湖西第 III 期後半以降、7 世紀後葉から 8 世紀前葉に帰属する事例となる。

東中田 A 古窯の竪穴建物を含めて、窯体の周囲において検出された竪穴建物はいずれも竈を布設し、居住施設として利用されたことが判明している。平面形は西笠子第 64 号窯跡 2 号住居・3 号住居が方形、加賀山第 2 地点 1 号住居、東笠子第 36 地点 1 号住、境川遺跡 SB01、東中田 A 古窯 003SX が長方形である。支柱穴は 4 本で構成される竪穴と、明確な支柱穴を伴わない竪穴の両者がある。湖西第 IV 期第 1 小期に帰属する境川遺跡と東中田 A 古窯の竪穴建物はいずれも明確な支柱穴を伴わない。また、いずれの窯跡においても竪穴建物が相互に重複することはない。竪穴建物が須恵器生産に伴う短期的な設営であったことの証左であろう。

竪穴建物の帰属時期を参考とすると、7 世紀後半（湖西第 III 期）に、竪穴の平面形は長方形に集約化し、それに伴って支柱穴を欠くようになる傾向が認められる。この傾向は、建物の上屋構造が簡略化し、居住施設としての機能が低下したことを示唆する。なお、竪穴建物の規模は時期、建物の構造と機能とは必ずしも相関しない。竪穴の規模は生産状況と工人編成に応じて可変的であったとも考えられる。

また、境川遺跡 SB01・SB02 に粘土（焼土）塊、東中田 A 古窯 002SX に粘土溜まりと焼成不良の須恵器杯類の集積が認められること、東中田 A 古窯 003SX が各種生産工房に特徴的な「連房式竪穴遺構」に類似し、粘土溜まりとロクロピットを付随することを加味すれば、窯跡周囲の竪穴建物は、（竈の布設から）一貫して居住施設としての機能を備えながら、須恵器生産に伴う作業施設としての機能が段階的に付加され、「工房」的な施設に変化する流れを認めることが可能である。工房とされる竪穴建物に平面長方形が多く（坂詰 1980）、長方形の竪穴が方形に対してより專業度が高いとする示唆（渡辺 1994）が想起されるところである。

8 世紀前葉以降、窯体周囲に竪穴建物が配置されることはなく、窯跡周囲は作業施設としての平坦面（大きく浅い土坑状のもの）によって構成される「B 型窯場構造」、土坑（小さく深い土坑）によって構成される「C 型窯場構造」、窯体以外に付属施設を伴わない「D 型窯場構造」へと推移するとされる（後藤 1987）。東中田 A 古窯においても、003SX（または 002SX）が付属する窯体 001SY の操業後、作業施設と考えられる浅い土坑状の落ち込み 004SX が配置されることが判明している。この変化は「生産と居住の分離」（後藤 1987）、生産の恒常化・安定化に伴う居住地の固定化を背景としたものと考えられる。つま

竪穴建物の諸例

竈の布設

平面形

支柱穴

分布

帰属時期

変化の傾向と背景

規模

付属施設

連房式竪穴遺構

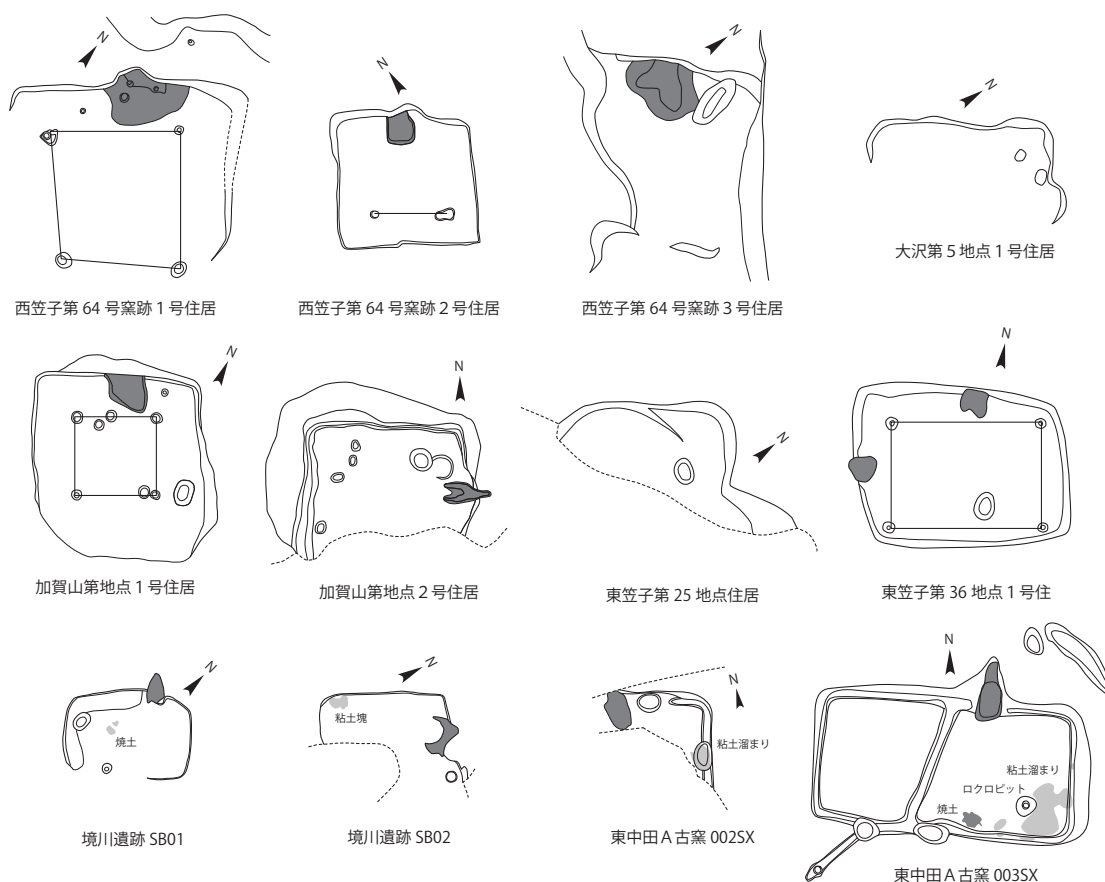
生産工房

空間構成の変化

変化の背景

第8表 湖西窯跡群竪穴建物一覧

窯跡	遺構	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	竈	主柱穴	その他付属施設	時期 (後藤1989)	備考
西笠子第64号窯跡	1号住居	長方・方	5.8	4.8以上	竈	主柱穴4		64号窯 (Ⅱ期2～4小期) 以前	竈再構築
	2号住居	方形	3.75	3.75	竈	主柱穴2		64号窯 (Ⅱ期2～4小期) 以前	竈は顕著に被熱しない
	3号住居	方形	5.0	5.0	竈			64号窯 (Ⅱ期2～4小期) 以前	
加賀山第2地点	1号住居	長方形	5.0	4.4	竈	主柱穴4	貯蔵穴	2号窯 (Ⅱ期第3・4小期) 直前	段状遺構が付随
	2号住居	長方・方	4.5	-	竈		貯蔵穴	2号窯 (Ⅱ期第3・4小期) 以前	砥石
大沢第5地点	1号住居	長方形	5.0	3.0	不明	主柱穴1	焼土4	I号窯 (Ⅱ期5小期) 以前	
東笠子第25地点	I・II号窯住居	長方・方	4.0	-	不明			Ⅱ期第5小期～Ⅲ期第1小期	
東笠子第36地点	1号住	長方形	5.6	4.4	竈2	主柱穴4		窯跡群に先行 (Ⅲ期後半)	
境川遺跡	SB01	長方形	3.38	2.42	竈		粘土塊	Ⅳ期第1小期	
	SB02	長方形	3.5	2.4以上	竈		粘土 (焼土) 塊	Ⅳ期第1小期	
東中田A古窯	002SX	長方・方	-	-	竈		粘土溜まり	Ⅳ期第1小期	転用砥具・ミニチュア
	003SX	長方形	7.4	4.0	竈		粘土溜まり・ロクロビット	Ⅳ期第1小期	外周溝・排水溝・間仕切り溝 砥石2・鉄鏝・ミニチュア



第65図 湖西窯跡群における竪穴建物の諸例 (1:200)

り、須恵器生産の専門化を背景として、生産地周辺における居住から工人集落の設営に変化する過程に東中田A古窯の竪穴建物が位置することが確かめられる。

特徴的な遺物

その他、東中田A古窯SX003において出土した特徴的な遺物として、砥石2点、鉄鏝1点、製塩土器がある。また、同002SXにはミニチュア横瓶、003SXにはミニチュア長頸瓶がそれぞれ伴う。砥石は加賀山第2地点2号住居、転用砥具は東中田A古窯SX002に出土例があるが、須恵器生産者の生活と祭祀、その他の生産活動に関係するこれらの特徴的な遺物についても、今後、研究の対象とする必要がある。

（2）須恵器の編年的考察

はじめに

東中田A古窯出土須恵器について、灰原出土資料を下層出土の「灰原下層」、上層出土の「灰原上層」、灰原上位の包含層出土の「灰原上位」、土坑 036SX 出土を「036SX」、
堅穴建物 002SX 出土資料を「002SX」、堅穴建物 003SX 出土資料を「003SX」として各資料の内容を比較検討しつつ、編年的位置を明確にしたい。

杯類の型式構成

以下、各出土資料の杯類の型式構成と各型式の特徴を整理する（第9表上段）。

杯H 合子状の蓋杯の杯Hは灰原下層、灰原上層、036SXにおいて確認されるが、数量はごく少なく、杯は無高台で有蓋の杯G、無高台で無蓋の杯A、有高台の杯Bが大半を占める。また、明らかな杯Hの蓋はなく、蓋は返りがある蓋G、返りが消失した蓋Bのみによって占められる。境川遺跡灰原は受け部が著しく退化した杯Hが出土しているが、やはり杯Hの蓋は確認されない。

蓋 灰原下層、灰原上層の蓋は蓋G 1・G 2・G 3、蓋B 1によって構成され、蓋Gが蓋Bに対して優越する。なお、灰原下層と灰原上層の構成にはほとんど差が認められない。一方、002SXの蓋は蓋G 3、蓋B 1、003SXの蓋は蓋G 3、蓋B 1・B 2・B 3によって構成され、蓋G 1・G 2は含まれない。特に003SXは蓋G 3がごく少なく、その蓋G 3も最大径16.1cmで、蓋Bの法量に近似し、同様の法量の蓋G 3は灰原や他の遺構には認められない。

東中田A古窯において出土した蓋Gの最大径の最小値（56 個体）は 11.3cm で、10cm 前後の小型の蓋Gは含まれない。殿田第4地点1号窯、峠場第2地点1号窯等においては、

第9表 器種の構成

杯類	杯H	蓋G 1		蓋G 2		蓋G 3	蓋B 1	蓋B 2	蓋B 3	蓋C	杯G 1	杯G 2	杯G 3	杯A 1	杯A 2	杯A 3	杯B 1	杯B 2	杯B 3	皿？
		摘みa	摘みb	摘みa	摘みb	摘みb	摘みb	摘みb	摘みc											
灰原下層	2	9	7	1	7	3	4				2	1	1	3	2	25	1	○		
灰原上層	3	2	9	1	7	3	1					3		3		2	4			
灰原上位		5	10	4	7	2	4	3	3		5	1	1	2		2	1			
036SX	1	2	8		2	4	6	2			5	3		1		4	5	2	1	○
002SX						2	1				1						3			1
003SX						1	8	7	1	3						6	5	○		5

その他	高杯		高盤	陶白	應	広口壺	甕(中)		甕(大)		フラスコ	長頸瓶			平瓶	大型平瓶		その他
	沈線	なし					無段	有段	無段	有段		有蓋	無蓋	大型		無段	有段	
灰原下層	○	7	○	○		◎	◎		○	◎	◎	◎	○	○	○	○		円面碗・陶馬
灰原上層	○	2	◎	◎	◎	○			○	◎	○		○	○				小杯
灰原上位	○	2	○	◎	○	○	○	◎	○	◎	○	○	○	◎	○		◎	陶鍾
036SX		1	○	◎		○	○	◎			○	◎	○	◎	○			
002SX						○							○		○			ミニチュア
003SX		2	○	○	○	○			○	◎			○		○			ミニチュア

段階の推移	10cm 前後の小型の蓋Gは杯Hと共伴することから、10cm 前後の小型の蓋Gが伴う段階はそれを伴わない段階に先行する。蓋G主体の構成が蓋B主体の構成に先行するとすると、蓋Gの構成については、杯Hと10cm 前後の小型の蓋Gを伴う段階（東中田A古窯以前）から、蓋G主体で蓋G 1・G 2・G 3で構成される段階（東中田古窯灰原）、蓋B主体で大型の蓋G 3のみが含まれる段階（東中田古窯 002SX・003SX）、蓋Bのみで構成される段階（東中田A古窯以後）へと推移することが予測される。
段階の細分	また、東中田A古窯において出土した蓋Gの摘み径の最小値（52 個体）は2.2cm で、小突起状の摘みを付した蓋Gは含まれない。東中田A古窯に先行する段階に伴う小型の蓋Gは小突起状の摘みが付される個体が多く、それに加えて、摘み形状aとした低平で中央が窪む摘みが付される個体が含まれる。東中田A古窯灰原下層の蓋G 1は摘み形状aが扁平な宝珠形の摘み形状bより多く、蓋G 2・G 3に摘み形状aは少ない。つまり、蓋Gの摘みについては、小突起状の摘みと摘み形状aで構成される段階（東中田A古窯以前）から、摘み形状aと摘み形状bで構成される段階（東中田A古窯灰原下層）、摘み形状bが多い段階（東中田A古窯の灰原下層以外）に推移することが予測され、灰原下層が灰原上層に対して先行する可能性が導かれる。受け部が著しく退化した杯H、蓋G、蓋Bによって構成される境川遺跡灰原の蓋Gは、最大径が東中田A古窯の蓋Gの最小値に近似し、摘み形状aの摘みが付されることから、東中田A古窯の最初期の段階と対比することが可能であろう。
境川遺跡灰原	
摘み径の変化	東中田A古窯における蓋Gと蓋Bの摘み径は蓋G 1が平均2.7cm・最大3.2cm（52 個体）、蓋G 2が平均2.8cm・最大3.4cm（30 個体）、蓋G 3が平均3.1cm・最大3.7cm（16 個体）、蓋B 1が平均3.3cm・最大3.8cm（25 個体）で、蓋の大型化に対応して摘み径も最大3.8cmまで増大する。003SXの蓋B 2の摘み径は平均3.3cm・最大3.8cm（7 個体）であることから、摘み径の増大化はより大型の蓋B 2には対応せず、摘み径は縮小化に転じると思われる。灰原上位には、摘み径3.0cm 前後(2.8～3.1cm)の蓋B 2が含まれるが、これらはより後出する個体であろう。
法量分化	杯G 灰原下層は杯Gと杯Aの法量が多様で、灰原中に集積された口径が近似する焼成不良の一群についても、器高による細分が可能である。一方、002SXは杯Gがごく少なく、003SXは杯Aと杯Bによって構成され、杯Aも大型の杯A 3のみで構成される。
杯B	002SXと003SXの段階、つまり、蓋B主体で大型の蓋G 3のみが含まれる段階は、蓋G 3に杯Bを積み重ねて焼成している例があること、002SXにおいて検出された焼成不良の杯類の集積が蓋G 3、蓋B 1、杯B 1によって構成されることから、蓋G 3は杯Bの蓋として生産され、有蓋の無台杯である杯Gはこの段階にはほぼ消滅している可能性が高い。
底部調整	杯Gと杯Aの底部に施される同心円状の回転ヘラケズリは灰原下層における出現率が低く、灰原上層と灰原上位における出現率が高い一方、003SXの杯Aには採用されていない。また、回転糸切り技法は灰原上位に混在する箱形の杯を含めて出土須恵器中には全く確認されていない。
段階区分	
東中田A古窯以前	以上から、東中田A古窯出土須恵器杯類は、一定量の杯Hと最大径10cm 前後で小

突起状の摘みを付す蓋Gが伴う段階、後藤健一による編年の湖西第Ⅲ期第2小期（後藤1989）、鈴木敏則による編年のⅣ期後葉（鈴木2004）に後続し、蓋G主体で多様な法量の杯G・杯Aと杯Bが伴う段階の灰原は後藤湖西第Ⅲ期第3小期、鈴木Ⅳ期末葉、蓋B・杯Bが主体で大型の蓋G3のみが含まれる段階の002SXと003SXは後藤湖西第Ⅳ期第1小期、鈴木Ⅴ期初葉に概ね対比される。前者の段階を1段階、後者の段階を2段階とする。1段階は境川遺跡灰原と青平Ⅱ号窯・青平Ⅲ号窯、2段階は青平Ⅰ号窯の内容に近い。

また、1段階、後藤湖西第Ⅲ期第3小期、鈴木Ⅳ期末葉とした灰原は杯Hが残存し、蓋Gに摘み形状aが多い段階から、杯Hが消滅し、蓋Gに摘み形状bが多い段階へと推移する期間に形成されたと考えられ、両段階は古新の様相として細分される余地もある。このことは、灰原が形成される期間中に杯Hの生産が終了し、杯B（蓋G3・蓋B）の生産が開始された（杯Hと杯Bが共存しない）可能性も示唆する。

同様に、2段階とした一定量の蓋G3とごくわずかに杯Gが伴う002SX、より後出的な蓋G3がごくわずかに伴い杯Gを伴わない003SXについても古新の様相として細分される可能性もある。ただし、002SXの竈と003SXの竈において出土した須恵器甕には接合関係が認められることから、その様相差は連続的で、ごく短期間の時間差に還元されるであろう。

さらに灰原上位などには、摘み径3.0cm前後（2.8～3.1cm）の蓋B2、箱形の杯など、後続する段階、後藤湖西第Ⅳ期第2・3小期、鈴木Ⅴ—2・3期（鈴木2005）まで、あるいは湖西窯跡群において回転糸切り技法が出現する以前までの個体がわずかに混在する。この段階を3段階（東中田A古窯以後）とする。

その他の器種

その他の器種は全形を知る個体が少なく、十分な検討は難しいが、主として相対的な出土量の多寡から、その消長を簡単に整理する（第9表下段）。

高杯は全体の器種組成においても低率で（第1表・第28図）、生産量はそれほど多くなかったと推測される。また、灰原下層には一定量の出土が認められるが、灰原上層、036SX、002SX、003SXのいずれにおいても、出土個体数はごく少ない。このことから高杯の生産量は減少する傾向にあったことが予測される。灰原の高杯は杯部が全体に浅く、杯部の中位に沈線を施すものがなお散見される。003SXの高杯は沈線を欠くが、確認される個体数が少ないので、単純に沈線の消失を型式変化の指標とすることは難しい。高盤（盤）についても、1段階とした灰原中には安定して出土するが、2段階とした002SX・003SXにおける出土は少ないことから、高杯と同様、生産量は減少する傾向にあったと考えられる。

フラスコ形長頸瓶は口頸部が長大化したもので、沈線が消失していることから、後出的な型式として把握される（岡林1994・高橋2009）。また、灰原下層において比較的安定して出土し、036SXにおける出土が確認されるが、灰原上層、灰原上位、002SX、003SXにおける出土は確実ではない。このことから、フラスコ形長頸瓶の生産は1段階でほぼ終了していた可能性が高いと思われる。

平瓶は十分に検討するだけの資料に恵まれないが、灰原と各遺構において出土が確認される。灰原上位に口頸部が短く沈線を施すもの、003SXに頸部が長大化した沈線を欠く

1段階

2段階

境川遺跡灰原

青平古窯跡

1段階の細分

杯H・蓋G・蓋B

2段階の細分

3段階

高杯

高盤（盤）

フラスコ形長頸瓶

平瓶

もの、また、大型平瓶については、灰原下層に頸部の段がないもの、灰原上位に頸部中位に段による区画があるものが確認できることから、平瓶については、口頸部の長頸化と沈線の消失、大型平瓶については、頸部の有段化を1段階から2段階にかかる変化として認識できる可能性がある。なお、前者の一群が高橋透による平瓶「Ⅰ群」、後者の一群が平瓶「Ⅱ群」（高橋 2011）に概ね対応する。

年代

伊場遺跡群の木簡

湖西窯の須恵器の年代については、伊場遺跡群における紀年銘木簡の共伴が一つの有力な検討材料とされている。それによると、辛巳年（681）を記した伊場遺跡第3号木簡、乙未年（695）を記した同第9号木簡が後藤湖西第Ⅲ期第2小期の一端を示すことから、第Ⅲ期第3小期が7世紀第4四半期後半、第Ⅳ期第1小期が7世紀最終末に相当する（後藤 1987）、または巳卯年（679）を記した梶子遺跡第12号木簡に鈴木Ⅳ期後半、辛卯年（691）を記した伊場遺跡第7号木簡にⅣ期末葉の土器群が伴うことから、鈴木Ⅳ期末葉が7世紀第4四半期、Ⅴ期初葉が7世紀末から8世紀初頭に相当するとされている。これによれば、後藤第Ⅲ期第3小期、または鈴木Ⅳ期末葉に対応する東中田A古窯の1段階は7世紀第4四半期、後藤第Ⅳ期第1小期、鈴木Ⅴ期初葉に対応する2段階は7世紀末から8世紀初頭の年代を与えることができる。

猿投窯との対比

一方、猿投窯の須恵器編年と東中田A古窯の各段階の須恵器を対比させると、全体的な様相としては、東中田A古窯の1段階は杯Hがほとんど伴わないことから、杯類に杯Hと杯Hの蓋を多く含む岩崎17号窯式（城ヶ谷 2003）に後続し、杯Hと返りを有する蓋が消失した岩崎41号窯式（城ヶ谷 2005）に先行することは明らかである。また、岩崎41号窯式には無高台の杯の法量分化が解消すること、高杯が激減すること、（岩崎41号窯式に相当する市ヶ洞1号窯跡において高台を付したフラスコ形長頸瓶が出土していることから）フラスコ形長頸瓶の安定した生産は岩崎17号窯式までと考えられることから、東中田A古窯の2段階とした様相は岩崎41号窯式の様相に重なる部分が多い。

猿投窯の年代

猿投窯の須恵器の年代については、660年代から670年代に相当する飛鳥Ⅲ（菱田 2011）の大官大寺下層SK121から岩崎17号窯式を主体とする猿投窯の須恵器が出土していることから（城ヶ谷 2005）、岩崎17号窯式の一端を660年代から670年代に求めることができる。また、岩崎17号窯式の須恵器が主体で岩崎41号窯式の須恵器を含む名古屋市高針原1号窯跡灰層Ⅱ群上層から「黒見田五十戸」を刻書した須恵器、岩崎41号窯式に相当する長久手市市ヶ洞1号窯跡から「瓮五十戸口」を刻書した須恵器が出土していることから（城ヶ谷 2005）、岩崎17号窯式から岩崎41号窯式の変化は、奈良県石神遺跡における紀年銘木簡において「五十戸」から「里」の表記に変化する天武10年（681）から12年（683）の以前、680年前後と考えられる。

飛鳥編年との対比

猿投窯の須恵器編年を介在させつつ、飛鳥編年との対応を求めれば、東中田A古窯の1段階が岩崎17号窯式から岩崎41号窯式で飛鳥Ⅳに、2段階が岩崎41号窯式で飛鳥Ⅳから飛鳥Ⅴに対応する。猿投窯編年、飛鳥編年の年代（菱田 2011）からは、およそ東中田A古窯の1段階は680年代から690年代、同2段階は690年代から700年代の年代が与えられる。ただし、各編年の整合性にはなお課題も多い。今後の詳細な検証が必要である。

(3) 有蓋長頸瓶と長頸瓶の蓋

東向き斜面において検出した土坑 036SX において、蓋が軸着した状態の長頸瓶と大型長頸瓶が出土した（第 66 図 463・464・465・466）。また、灰原から出土した長頸瓶、大型長頸瓶の口縁部に蓋が軸着した例がある（同 319・352・354）。これらから、有蓋長頸瓶は、長頸瓶と蓋を同時に製作し、蓋を被せた状態で焼成されていたことが判明する。

同様の事例として、藤枝市白砂ケ谷 D-10 号墳の石室内から出土した長頸瓶の蓋（第 66 図 1～6）がある。白砂ケ谷 D-10 号墳の長頸瓶の蓋はいずれも受け部に長頸瓶の蓋の口縁端部が軸着することから、石室内から出土している他の長頸瓶と組み合わせた状態で同時に焼成されたことが推測されている。その白砂ケ谷 D-10 号墳の長頸瓶の蓋の多く（同 2～6）は小孔を穿つ。東中田 A 古窯 036SX の大型長頸瓶の蓋（同 463）にも小孔が穿たれ、同様の穿孔が認められる灰原出土の蓋（同 23）も、外面の全面に降灰が認められることから、長頸瓶の蓋と推測される。

大型長頸瓶の蓋については、摘みの周囲に刺突文を施す特徴（第 66 図 60・97）、または法量と器形の特徴が明らかに異なる特徴（同 519）から杯類の蓋（蓋 G）との識別が容易であることが多いものの、通有の法量の長頸瓶の蓋（465）は全体の器形と法量が杯類の蓋とほとんど変わるところがない。ただ、長頸瓶の蓋であることが明らかな 465、その可能性が高い 23 を詳細に観察すると、杯（杯 G）に伴う返りを有する蓋（蓋 G）に比して、小さくて高い宝珠形（摘み形状 c）の摘みが付されていることが分かる。また、大型長頸瓶の蓋についても、いずれも高い摘みが付されている。

このことから、小さくて高い摘み（摘み形状 c）を付し、外面の全面に降灰が認められる蓋（第 66 図 25・35）は、杯類の蓋ではなく、長頸瓶、大型長頸瓶の蓋である可能性が高いと考えられる。翻って、長頸瓶、大型長頸瓶で、外面に降灰が認められながら、口頸部内面に全く降灰が認められないものは、有蓋の長頸瓶である可能性が考慮される。特に口縁端部が蓋を受けるようにして外面側に引き出さされる特徴（同 464・466・352・354）はその可能性をより明確に示すものであろう。

ここに示した有蓋長頸瓶にかかる知見は、同器種に対する生産志向を示唆するものである。また、白砂ケ谷 D-10 号墳の例にも示されている通り、長頸瓶の製作から流通の過程を追求する際の重要な視点にもなりえよう。

土坑 036SX

灰原

白砂ケ谷 D-10 号墳

小孔

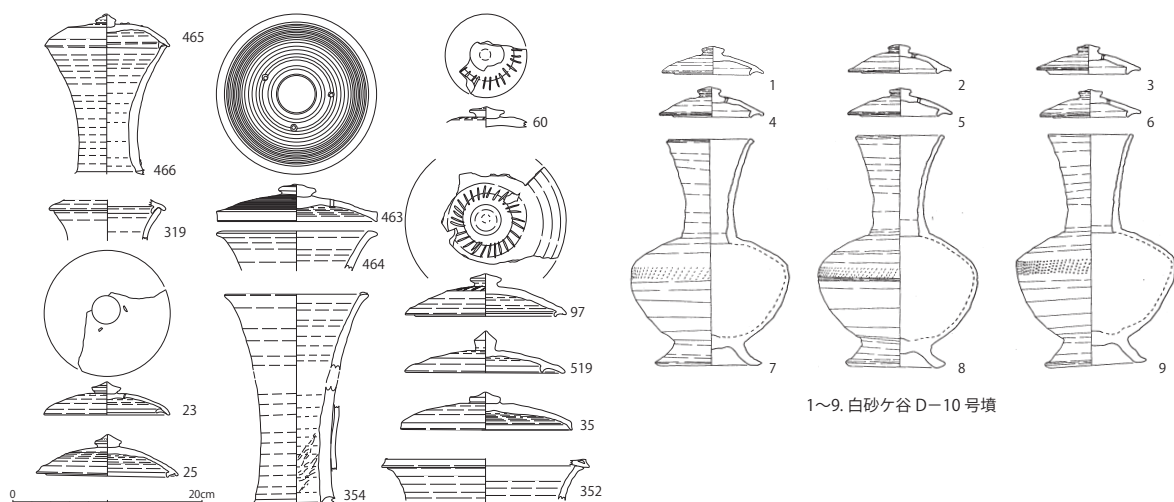
刺突文

法量と器形

摘みの形状

蓋の有無の識別

小結



1～9. 白砂ケ谷 D-10 号墳

第66図 東中田A古窯と白砂ケ谷D-10号墳の有蓋長頸瓶 (1:8)

（４）東中田A古窯の位置

須恵器窯	東中田A古窯は7世紀後葉から8世紀前葉にかけて小支谷の東西の斜面を利用して須恵
生産関連遺構	器を生産した古窯である。古窯周辺には須恵器生産に関連する遺構が分布する。同時期、
湖西窯跡群	湖西窯跡群は分布が急速に拡大する時期を迎え、やがて猿投窯にも匹敵する一大窯業生産
	地に発展する（後藤 1995）。今回の調査成果は、湖西窯跡群の生産が拡大する過程にお
	ける窯跡周囲の空間構成と須恵器生産従事者の編成と専業度、当時の社会が要請した生産
	内容等々の実体解明に寄与するものである。
中田古窯群	その一方、本報告は基礎的な内容の検討に終始し、中田古窯群あるいは一里山古窯群内
一里山古窯群	における相対的な位置を確認するための詳細な比較検討、検出遺構と出土遺物の技術的な
技術系譜	系譜を明らかにするための作業は未着手のままとした。課題は多いが、今回の調査成果を
	基礎として、今後、着実に問題の解決を図りたい。

第6章文献

- 岡林孝作1994「須恵器フラスコ形長頸瓶の編年と問題点」『日本と世界の考古学—現代考古学の展開—』雄山閣
- 後藤健一1987「6世紀を中心とした湖西窯跡群の諸様相」『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』湖西市教育委員会
- 後藤健一1989「湖西窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡 本文編』静岡県文化財調査報告書第42集 静岡県教育委員会
- 後藤健一1995「東海東部（静岡）」『須恵器集成図録 第3巻 東日本編Ⅰ』雄山閣
- 坂詰秀一1980「窯工一窯とその関連遺構—」『新版考古学講座 第9巻 特論・中』雄山閣
- 城ヶ谷和広2003「猿投窯岩崎17号窯出土須恵器の検討」『愛知県史研究』第7号 愛知県
- 城ヶ谷和広2005「猿投窯における須恵器生産の変革について—岩崎41号窯出土須恵器の検討から—」『愛知県史研究』第9号 愛知県
- 鈴木敏則2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会
- 鈴木敏則2005「出土須恵器について」『東若林遺跡』財団法人浜松市文化振興財団
- 高橋透2009「東日本太平洋岸地域出土須恵器フラスコ瓶の編年—湖西産を中心に—」『考古学集刊』第5号 明治大学文学部考古学研究室
- 高橋透2011「7世紀の東日本における湖西産須恵器瓶類の流通」『駿台史学』第143号 駿台史学会
- 菱田哲郎2011「後期・終末期の実年代」『古墳時代の考古学Ⅰ 古墳時代史の枠組み』同成社
- 森下章司・鈴木一有・鈴木敏則2000「磐田郡豊岡村神田古墳—中国鏡出土の後期古墳—」『浜松市博物館報』浜松市博物館
- 渡辺一1994「須恵器作りのムラー工人集落の歴史的な性格—」『古代王権と交流 2 古代東国の民衆と社会』名著出版
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1991『境川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第36集
- 長久手町教育委員会・財団法人瀬戸市文化振興財団2007『丁子田窯跡・市ヶ洞1号窯跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第36集
- 豊橋市教育委員会2003『東籠田古窯・橋良東郷古窯』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第74集
- 豊橋市教育委員会2008『中田古窯』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第98集
- 湖西市教育委員会1983『西笠子遺跡群発掘調査概報』
- 湖西市教育委員会1984『青平古窯跡・新古古窯跡発掘調査報告書』
- 湖西市教育委員会1985『大沢第4・5地点遺跡発掘調査報告書』
- 湖西市教育委員会1987『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』
- 湖西市教育委員会1991『加賀山第1～3地点・古見第14・16地点古窯跡発掘調査報告書』湖西市文化財調査報告書第27集
- 湖西市教育委員会1992『湖西一ノ宮工業団地内遺跡発掘調査報告書 平成3年度』湖西市文化財調査報告第29集
- 静岡県教育委員会・藤枝市教育委員会1980『国道1号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書第3冊 原古墳群白砂ヶ谷支群』

遺物一覧表

番号	グリッド	遺構	器種 (分類)	法量 (mm)							残 (/12)		出土地点			備考
				a	b	c	d	e	f	g	口縁	底部	X	Y	Z	
1	9I 2b	灰原下層	蓋G1	102	126		30	6	30	24	1					外面全面に降灰
2	9I 2c	灰原下層	蓋G1	103	124		27	5	33	28	10					外面全面に降灰、歪みあり
3	9I 2c	灰原下層	蓋G1	96	116		28	6	33	27	3					外面全面に降灰、焼き膨れ
4	9I 2c	灰原下層	蓋G1	108	128		25	6	28	22	8					外面全面に厚い降灰、窯壁等付着
5	9I 1c	灰原下層	蓋G1	125	128		29	4	30	25	4					
6	9I 2c	灰原下層	蓋G1	123	124		32	6	35	29	7					外面全面に薄い降灰
7	9I 2c	灰原下層	蓋G1	118	120		26	6	33	27	2					外面全面に厚い降灰
8	9I 2c	灰原下層	蓋G1	118	120		28	5	33	28	6					外面全面に降灰
9	9I 1c	灰原下層	蓋G1	126	128		24	5	25	21	6					
10	9I 1c	灰原下層	蓋G1	102	119		25	8	38	30	10					歪みあり
11	9I 1c	灰原下層	蓋G1	98	122		25	9	35	24	1					外面全面に薄い降灰
12	9I 1c	灰原下層	蓋G1	95	121		28	7	25	18	2					外面全面に降灰
13	9I 2c	灰原下層	蓋G1	118	121		22	10	30	20	1					外面全面に厚い降灰、杯口縁部軸着
14	9I 2c	灰原下層	蓋G1	122	124		23	8	32	24	1					
15	9I 2c	灰原下層	蓋G1	118	120		29	8	35	27	4					外面全面に厚い降灰
16	9I 2c	灰原下層	蓋G1	122	125		32	9	35	26	6					外面全面に厚い降灰
17	9I 2c	灰原下層	蓋G2	113	131		26	4	27	22	11					外面全面に降灰
18	9I 1c	灰原下層	蓋G2	110	131		26	8	33	25	4					外面全面に厚い降灰
19	9I 2d	灰原下層	蓋G2	116	138		34	7	38	31	1					焼成不良
20	9I 2c	灰原下層	蓋G2	135	137		21	5	28	23	10					外面全面に降灰、積み重ね痕跡
21	9I 2c	灰原下層	蓋G2	137	139		30	9	33	24	8					外面全面に厚い降灰、窯壁等付着
22	9I 2c	灰原下層	蓋G2	133	134		31	10	36	26	5					
23	9I 2c	灰原下層	蓋G2	130	132		30	12	35	23	5					外面全面に厚い降灰、穿孔（2孔）
24	9I 2c	灰原下層	蓋G2	135	136		26	10	33	23	0					
25	9I 2c	灰原下層	蓋G3	128	150		23	14	44	30	8					外面一部に降灰
26	9I 2c	灰原下層	杯B1?	148	152				*20		3	0				外面に降灰
26	9I 2c	灰原下層	蓋G3	156	158				*10		3					外面に降灰
27	9I 2c	灰原下層	蓋G3	159	160		35	9	28	26	10					外面全面に降灰
28	9I 1c	灰原下層	蓋G3	147	150		34	10	39	29	7					外面全面に薄い降灰
29	9I 2c	灰原下層	杯B1?			108										
29	9I 2c	灰原下層	蓋G3	152	154		32	5	28	23	1					積み重ね痕跡（杯B高台付着）
30	9I 1c	灰原下層	蓋B1	159	160				*30		3					外面全面に厚い降灰
31	9I 2c	灰原下層	蓋B1	159	161		36	8	32	24	8					外面全面に厚い降灰
32	9I 2d	灰原下層	蓋B1	159	161		38	8	32	24	9					
33	9I 2c	灰原下層	蓋B1	158	162		32	6	29	23	4					外面全面に降灰
34	8I 20c	灰原下層	蓋B1	164	166		37	7	38	31	8					
35	9I 2c	灰原下層	蓋B	180	182		33	10	40	33	11					外面全面に厚い降灰
36	9I 1b	灰原上層	蓋G1	118	120		24	6	28	22	1					外面全面に厚い降灰
37	9I 2b	灰原上層	蓋G1	98	125		25	5	23	18	10					外面全面に降灰
38	9I 2c	灰原上層	蓋G1	98	120		27	9	33	24	7					歪みあり
39	9I 2b	灰原上層	蓋G1	108	125		27	5	36	31	1					
40	9I 2c	灰原上層	蓋G1	101	120		29	6	27	21	0					外面全面に薄い降灰
41	9I 2c	灰原上層	蓋G1	123	125		25	8	35	27	5					
42	9I 2b	灰原上層	蓋G1	122	123		26	9	36	27	5					外面全面に厚い降灰
43	9I 1b	灰原上層	蓋G1	120	122		32	7	28	21	1					
44	9I 2c	灰原上層	蓋G1	118	119		28	8	32	24	3					外面全面に厚い降灰、積み重ね痕跡
45	9I 1b	灰原上層	蓋G1	124	127		25	9	35	26	10					外面全面に厚い降灰
46	9I 2c	灰原上層	蓋G1	119	120		28	9	33	24	7					外面全面に降灰
47	8I 20b	灰原上層	蓋G1	124	126				*29		10					焼成不良
48	9I 1b	灰原上層	蓋G2	110	130		24	4	28	24	2					
49	9I 1b	灰原上層	蓋G2	114	135		34	7	33	26	2					
50	9I 2b	灰原上層	蓋G2	131	133		32	8	31	23	2					
51	9I 2b	灰原上層	蓋G2	129	132		28	10	33	23	2					外面全面に厚い降灰、細礫等付着
52	9I 1c	灰原上層	蓋G2	128	130		28	7	30	23	5					外面全面に厚い降灰
53	9I 2b	灰原上層	蓋G2	136	138		26	7	30	23	4					外面全面に降灰、蓋G口縁部付着
54	8I 20b	灰原上層	蓋G2	128	130		31	7	36	29	9					
55	9I 2c	灰原上層	蓋G2	134	136		24	7	33	26	3					外面全面に降灰
56	9I 2c	灰原上層	蓋G3	132	154		28	8	25	17	5					外面全面に降灰
57	9I 2c	灰原上層	蓋G3	122	144		29	10	29	19	3					外面全面に降灰、積み重ね痕跡（杯B高台付着）
58	9I 2b	灰原上層	杯B1?			94					0	2				外面に降灰
58	9I 2b	灰原上層	蓋G3	144	164				*20	*20	2					外面に降灰
59	9I 1c	灰原上層	蓋G3	158	160		30	5	31	26	3					外面全面に薄い降灰
60	9I 2b	灰原	蓋				36	11	*22		0					外面全面に降灰
61	9I 1b	灰原上層	蓋B1	156	158		35	6	43	37	3					歪みあり
62	9I 1c	灰原下層	杯H	101	124	60			31		6					
63	8I 20c	灰原下層	杯H	108	130	58			28		4					
64	9I 2c	灰原上層	杯H	106	126	70			27		8					
65	9I 2c	灰原上層	杯H	112	135	78			24		8					
66	9I 1c	灰原上層	杯H	111	113	44			24		5					内面全面に厚い降灰
67	9I 1d	検出	蓋G1	102	123		30	4	26	22	4					
68	9I 2b	検出	蓋G1	103	123		28	5	32	27	9					
69	9I 2c	検出	蓋G1	110	113		26	6	32	26	4					外面全面に厚い降灰、歪みあり
70	9I 2c	検出	蓋G1	123	125		31	6	22	16	4					外面全面に厚い降灰
71	9I 2c	検出	蓋G1	124	126		26	6	36	30	2					
72	9I 1c	検出	蓋G1	121	122		28	9	33	24	5					歪みあり
73	9I 2c	検出	蓋G1	102	124		26	9	28	19	2					外面全面に厚い降灰
74	9I 2b	検出	蓋G1	114	115		26	6	25	19	2					
75	9I 1c	検出	蓋G1	125	126		28	7	31	24	2					外面全面に厚い降灰、窯壁等付着
76	9I 1b	検出	蓋G1	125	126		25	5	28	23	1					外面全面に降灰、歪みあり
77	9I 1b	検出	蓋G1	127	128		30	9	34	25	2					外面全面に降灰
78	9I 1c	検出	蓋G1	121	124		27	5	29	24	3					外面全面に厚い降灰、杯口縁部付着
79	9I 1d	検出	蓋G1	124	126		26	8	31	23	2					歪みあり
80	9I 2c	検出	蓋G1	118	119		31	7	33	26	7					外面全面に厚い降灰

東中田A古窯

番号	グリッド	遺構	器種 (分類)	法量 (mm)							残 (/12)		出土地点			備考
				a	b	c	d	e	f	g	口縁	底部	X	Y	Z	
81	9I 1b	検出	蓋G1	117	119		22	5	24	19	2					
82	8I 19b	検出	蓋G2	130	131		26	6	27	21	3					外面全面に厚い降灰、細礫等付着
83	8I 19b	検出	蓋G2	114	131		30	4	29	25	2					
84	9I 2b	検出	蓋G2	103	133		34	4	33	29	3					外面全面に薄い降灰、歪みあり
85	8I 18a	検出	蓋G2	113	136		31	4	27	23	1					外面全面に厚い降灰、窯壁等付着
86	9I 2d	検出	蓋G2	134	136		30	7	37	30	6					
87	9I 2b	検出	蓋G2	115	135		28	8	28	20	6					外面全面に厚い降灰、蓋G口縁部付着
88	9I 2d	検出	蓋G2	112	137		26	10	33	23	1					外面全面に降灰
89	9I 1c	検出	蓋G2	133	135		23	6	26	20	3					外面全面に厚い降灰
90	8I 19b	検出	蓋G2	133	136		30	9	28	19	5					外面全面に薄い降灰
91	8I 18a	検出	蓋G2	130	132		27	6	38	32	4					歪みあり
92	9I 1d	検出	蓋G2	129	131		28	9	30	21	3					外面全面に厚い降灰、歪みあり
93	8I 19a	検出	蓋G3	121	142		29	10	37	27	5					外面全面に厚い降灰
94	9I 2c	検出	蓋G3	149	151		31	10	35	25	3					外面全面に厚い降灰
95	8I 20b	検出	杯B1?						*16		1	0				外面に降灰
95	8I 20b	検出	蓋G3						*12		1					外面に降灰
96	9I 1d	検出	杯B1?	150	152				*29		1	0				外面に降灰
96	9I 1d	検出	蓋G3	156	158				*14		1					外面に降灰
97	9I 2c	検出	蓋G3	148	171			13	45	32	3					外面全面に厚い降灰
98	9I 2c	検出	蓋B1	173	175		37	7	33	27	1					
99	9I 2b	検出	蓋B1	160	165		36	9	34	25	1					
100	-	検出	蓋B1	165	167		38	9	34	25	2					
101	9I 2b	検出	蓋B1	160	165		38	8	36	28	3					外面全面に薄い降灰
102	9I 2c	検出	蓋B2	167	172		29	9	36	27	3					外面全面に厚い降灰
103	9I 1c	検出	蓋B2	168	172		31	8	34	26	3					外面全面に降灰
104	9I 2b	検出	蓋B2	173	178		28	9	39	30	7					
105	9I 2b	検出	蓋B3	156	157		27	10	24	14	3					歪みあり
106	9I 2d	検出	蓋B3	157	159		29	10	20	10	1					歪みあり
107	-	灰原	蓋B3	192	194		28	13	28	15	1					外面全面に厚い降灰、歪みあり、積み重ね痕跡
108	9I 1c	検出	蓋?			71			*15		0					
109	9I 1c	灰原下層	杯G1	117	119	70			36		9	12				
110	9I 2c	灰原下層	杯G1	119	122	71			40		6	12				
111	9I 2c	灰原下層	杯G2	122	123	52			44		3	12				
112	9I 1c	灰原下層	杯G3	135	136	75			44		6	12				焼成不良
113	9I 2c	灰原下層	杯A1	114	116	60			40		3	2				
114	9I 1c	灰原下層	杯A1	118	120	37			38		5	7				
115	9I 2c	灰原下層	杯A1	121	122	61			37		1	12				焼き膨れ
116	9I 1c	灰原下層	杯A2	128	129	32			32		1	4				
117	9I 2c	灰原下層	杯A2	145	147	58			37		2	12				
118	9I 2c	灰原下層	杯A3	135	137	40			44		1	7				
119	8I 20c	灰原下層	杯A3	134	136	35			50		4	5				
120	8I 20c	灰原下層	杯A3	141	143	41			49		1	12				
121	8I 19c	灰原下層	杯A			40			*12		0	7				
122	9I 2c	灰原下層	杯A			56			*25		0	6				
123	9I 2c	灰原下層	杯A3	129	133	40			40		2	12	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
124	9I 2c	灰原下層	杯A3	133	134	50			37		5	11	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
125	9I 2c	灰原下層	杯A3	142	144	58			40		2	5	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
126	9I 3c	灰原下層	杯A3	136	138	46			46		2	1	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
127	9I 2c	灰原下層	杯A3	130	131	51			45		4	12	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
128	9I 2c	灰原下層	杯A3	135	136	42			44		2	12	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
129	9I 2c	灰原下層	杯A3	134	137	44			46		5	12				焼成不良
130	9I 2c	灰原下層	杯A3	135	138	56			42		2	12	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
131	9I 3c	灰原下層	杯A3	132	134	52			43		1	12	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
132	9I 2c	灰原下層	杯A3	132	134	52			46		2	12				焼成不良
133	9I 3c	灰原下層	杯A3	130	134	52			42		1	12	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
134	9I 3c	灰原下層	杯A3	136	138	53			46		2	12	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
135	9I 3c	灰原下層	杯A3	136	137	52			*45		2	6	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
136	9I 2c	灰原上層	杯A3	134	137	45			45		1	12				焼成不良
137	9I 2c	灰原下層	杯A3			51			*34		0	12	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
138	9I 2c	灰原下層	杯A3			50			*38		0	12	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
139	9I 2c	灰原下層	杯A3			62			*39		0	12	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
140	9I 2c	灰原下層	杯A3	147	150				*37		4	0	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
141	9I 2c	灰原下層	杯A3	140	143	42			47		1	7	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
142	9I 2c	灰原下層	杯A3	138	139	54			50		4	12	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
143	9I 3c	灰原下層	杯A3	135	137	49			52		2	12	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
144	9I 2c	灰原下層	杯A3	135	137	63			48		3	8	-144810.13	28812.83	56.91	焼成不良
145	9I 2c	灰原上層	杯G2	123	125	33			43		10	12				
146	9I 2b	灰原上層	杯G2	128	130	59			46		2	12				焼成不良
147	9I 2b	灰原上層	杯G2	122	124	52			49		2	12				
148	9I 2c	灰原上層	杯A1	108	111	53			34		2	12				
149	9I 2c	灰原	杯A1	125	127	67			39		1	7				焼き膨れ
150	9I 1b	灰原	杯A1	123	124	45			44		2	12				内面全面に厚い降灰、窯壁等付着
151	9I 2b	灰原上層	杯A3	134	135	68			37		4	12				
152	9I 2b	灰原上層	杯A			64			*15		0	7				
152	9I 2b	灰原上層	蓋G3	120	156				*16		2					転用焼台
153	9I 1c	灰原上層	杯A3			41			*30		0	12				火だすき
154	8I 19b	検出	杯G1	108	110	32			38		3	12				
155	8I 19b	検出	杯G1	111	112	36			37		3	12				歪みあり
156	9I 2c	検出	杯G1	105	108	50			38		3	6				
157	9I 2d	検出	杯G1	108	110	53			39		1	12				
158	9I 2c	検出	杯G1	111	112	64			39		1	12				
159	9I 2b	検出	杯G2	124	126	55			43		3	12				
160	8I 20b	検出	杯G3	139	140	61			46		4	9				

遺物一覧表

番号	グリッド	遺構	器種 (分類)	法量 (mm)							残 (/12)		出土地点			備考
				a	b	c	d	e	f	g	口縁	底部	X	Y	Z	
161	91 1c	検出	杯G3	136	138	52			44		2	4				
162	81 19a	検出	杯	132	136	50			31		6	5				
163	91 2c	検出	杯A1	109	112	64			38		1	5				
164	91 2e	検出	杯A1	117	119	49			38		2	4				
165	81 18a	検出	杯A3	130	133	55			39		1	12				
166	91 2c	検出	杯A3	138	140	73			39		2	6				
167	91 2b	検出	杯A3	144	146	63			40		2	7				
168	91 2c	灰原下層	杯B1	130	133		95	89	41	41	5	12				歪みあり
169	91 1c	灰原下層	杯B1	149	151		119	120	42	37	1	2				
170	91 2d	灰原下層	杯B2	164	168				*37		10	0				
171	- -	灰原	杯B1	143	144		78	75	46	43	3	12				
172	81 20b	灰原	杯B1	144	146		99	97	43	41	8	12				外面全面に降灰
173	91 1d	灰原	杯B1	136	139		88	88	39	36	2	2				
174	91 1c	灰原	杯B1				98	101	*18	*10	0	12				
175	91 2b	灰原	杯B1				104	107	*10	*9	0	3				
176	91 2b	検出	杯B1	146	148				*30	*30	1	0				
177	91 2c	検出	杯B1	150	152		108	107	42	38	5	4				
178	91 1d	検出	杯B1	139	140		94	93	42	*39	1	1				外面全面に薄い降灰
179	91 2c	検出	杯B1	144	147		112	110	45	*41	2	2				
180	91 2b	検出	杯B1				120	118	*33	*28	0	3				
181	91 2b	検出	杯B1	139	140		96	99	45	39	3	5				
182	91 2b	検出	杯B1	148	150		101	97	35	*30	2	1				
183	91 2b	検出	杯A	118	119				*28		1	0				
184	91 2b	検出	杯A	154	155	127			*33		1	1				
185	91 2c	灰原下層	高杯	152	154				*39		1	0				杯部内面全面に降灰
186	91 2b	灰原下層	高杯		124	122					0	2				
187	91 2c	灰原下層	高杯		100	99	34	76	*81		0	12				
188	81 20c	灰原下層	高杯		98	93	37	69	*88		0	5				
189	81 20c	灰原下層	高杯				24		*41		0	0				脚部外面全面に降灰
190	91 2d	灰原下層	高杯		104	104					0	3				脚部外面全面に降灰
191	91 2c	灰原下層	高杯		107	105	37	86	*86		0	12				脚部外面全面に降灰
192	91 2c	灰原下層	高杯		102	99	36	80	*100		0	8				
193	91 2c	灰原下層	高杯		108	106	39	81	*87		0	5	-144805.48	28813.89	56.37	歪みあり
194	91 2c	灰原下層	高杯		106	103	38	82	*82		0	10				接合沈線
195	91 1b	灰原上層	高杯	150	154				*27		2	0				杯部外面全面に降灰
196	91 1c	灰原上層	高杯	164	165				*36		2	0				杯部外面全面に降灰
197	91 2c	灰原上層	高杯		109	101	40	72	*72		0	10				
198	91 2c	灰原	高杯		100	98	34	76	*100		0	12				杯部内面全面に降灰
199	91 1b	灰原上層	高杯				24		*21		0	0				杯部外面全面に降灰
200	91 2c	灰原	高杯		107	104					0	3				
201	81 19b	検出	高杯	166	167				*33	32	3	0				
202	91 19b	検出	高杯	150	153				*27		2	0				
203	91 2c	検出	高杯	144	149				*25		1	0				杯部外面全面に降灰
204	81 19a	検出	高杯				37		*40		0	0				
205	81 20b	検出	高杯		104	102	38	70	*79		0	4				歪みあり
206	91 2c	検出	高杯		102	100			*38		0	3				
207	81 19b	検出	高杯		108	104			*48		0	3				
208	81 19b	検出	高杯		113	105	38	82	*84		0	5				
209	91 1c	検出	高杯		118	116			*43		0	3				内外面に降灰
210	91 2c	灰原下層	高盤	284					*38		1	0				杯部内面全面に降灰
211	81 20c	灰原下層	高盤	234					*25		2	0				
212	91 2c	灰原上層	高盤	238					*25		4	0				脚部透孔(4・5方)
213	91 2c	灰原上層	高盤						*37		0	0				杯部内面全面に降灰、杯部大きく歪む
214	91 1b	灰原上層	高盤	276					*30		1	0				口縁部先端付近に降灰
215	91 1c	灰原上層	高盤	232					*35		3	0				杯部内面全面に降灰
216	91 1b	検出	高盤	252					*33		1	0				杯部内面全面に降灰、杯部内面に補修痕跡
217	91 2b	検出	高盤	232					*14		2	0				杯部内外面に降灰
218	91 2b	検出	高盤	242					*38		2	0				口縁部先端付近に降灰
219	91 2e	検出	高盤	230					*45		2	0				
220	91 2b	灰原上層	鉢	206					*73		1	0				杯部内外面に降灰
221	81 20b	検出	鉢	236					*72		1	0				
222	81 17a	検出	鉢	216					*48		1	0				口縁部先端付近に降灰
223	91 1c	検出	把手付鉢	232		142			166		2	1				図上復原
224	91 1c	灰原下層	陶白	222					*31		1	0				
225	91 1c	灰原下層	陶白	202					*32		4	0				
226	91 1c	灰原下層	陶白	184					**37		2	0				内面全面に降灰
227	91 1c	灰原下層	陶白			98			*14		0	6				
228	91 1b	灰原	陶白	198					*49		2	0				内外面に厚い降灰
229	81 18b	灰原	陶白			102			*31		0	6				
230	91 1b	灰原上層	陶白			95			*30		0	12				
231	91 2b	灰原上層	陶白			104			*21		0	6				
232	91 2c	検出	陶白	202					*65		2	0				外面全面に降灰
233	91 1b	検出	陶白	152					*43		2	0				内面全面に降灰
234	81 18a	検出	陶白			110			*29		0	5				
235	91 2c	検出	陶白			92			*15		0	0				
236	91 1c	検出	陶白			81			*48		0	12				内面全面に厚い降灰、窯壁等付着
237	91 2d	検出	片口鉢	184					*58		2	0				内面に降灰
238	91 2c	検出	片口鉢	190					*24		2	0				内面に降灰
239	91 1c	灰原下層	筒形器台						*43		0	0				
240	91 2c	灰原	筒形土製品			250			*179		0	5				
241	91 2c	灰原上層	甕	102					*20		1	0				口縁部内面全面に降灰
242	81 20c	灰原	甕	102					*52		5	0				内外面に降灰
243	91 1d	検出	甕	114					*19		2	0				

東中田A古窯

番号	グリッド	遺構	器種 (分類)	法量 (mm)				*は残存値			残 (/12)		出土地点			備考
				a	b	c	d	e	f	g	口縁	底部	X	Y	Z	
244	9I 1d	検出	甕						*58		0	0				内外面に降灰、窯壁等付着
245	9I 2b	灰原上層	甕						*36		0	0				内外面に降灰
246	8I 20b	灰原	甕						*37		0	0				
247	9I 2c	検出	甕				65		*20		0	1				
248	9I 1b	検出	甕			58			*20		0	6				内面に降灰
249	9I 1c	灰原下層	広口壺	114					*55		2	0				内外面に降灰
250	9I 1c	灰原下層	広口壺	106					*23		3	0				内外面に降灰
251	8I 20c	灰原下層	広口壺	120					*115		1	0				外面全面に降灰
252	9I 2d	灰原下層	広口壺						*42		0	12				外面一部に降灰
253	9I 2c	灰原上層	広口壺	108					*25		3	0				内外面に厚い降灰、窯壁等付着
254	8I 18a	検出	広口壺	110					*48		3	0				
255	9I 2c	検出	広口壺	164					*25		2	0				外面に降灰
256	8I 18d	検出	広口壺						*47		0	0				外面全面に降灰
257	9I 1c	灰原下層	壺			75			*32		0	6				内外面に降灰
258	9I 2c	検出	壺			60			*22		0	5				
259	9I 2c	検出	壺			67			*20		0	5				
260	9I 1c	灰原下層	甕	180					*52		2	0				内外面に降灰
261	-	灰原	甕	208					*44		1	0				内外面に降灰
262	9I 1c	灰原下層	甕	174					*29		2	0				内面に降灰
263	9I 2d	灰原下層	甕	272					*55		2	0				内外面に降灰
264	9I 2c	灰原下層	甕	198					*53		4	0				外面に降灰
265	9I 1b	検出	甕	296					*49		1	0				
266	9I 1c	検出	甕	180					*54		1	0				
267	9I 2d	検出	甕	210					*36		1	0				外面に降灰
268	8I 19b	検出	甕	214					*74		2	0				内外面に降灰、歪みあり
269	9I 2b	検出	甕	182					*35		3	0				内外面に降灰
270	9I 2c	検出	甕	192					*57		3	0				
271	8I 19c	灰原下層	甕	430					*200		3	0				
272	9I 2c	灰原下層	甕	342					*130		4	0				
273	8I 20c	灰原下層	甕	476					*52		1	0				
274	9I 1c	灰原下層	甕	504					*45		1	0				
275	8I 20c	灰原下層	甕	460					*50		1	0				
276	8I 20c	灰原下層	甕	544					*117		5	0				
277	9I 2b	灰原上層	甕	500					*40		1	0				
278	9I 2b	灰原上層	甕	466					*44		1	0				
279	9I 1b	灰原上層	甕	440					*41		1	0				
280	9I 2c	灰原上層	甕	370					*82		1	0				
281	9I 2c	検出	甕	516					*169		1	0				
282	9I 1b	検出	甕	346					*68		1	0				
283	8I 20b	検出	甕	486					*48		1	0				
284	9I 2b	検出	甕	382					*38		1	0				
285	8H 18t	検出	甕	514					*228		1	0				
286	9I 1b	検出	甕	400					*72		1	0				
287	8I 20a	表土	甕	430					*185		2	0				
288	9I 2c	灰原下層	甕								0	0				線刻
289	9I 2c	灰原下層	フラスコ形	108					*194		5	0				内外面に降灰
290	9I 2c	灰原下層	フラスコ形	120					*115		12	0				内外面に降灰、歪みあり、窯壁等付着
291	9I 1c	灰原下層	長頸瓶	106					*102		8	0				内外面に降灰、歪みあり
292	9I 1c	灰原下層	長頸瓶	122					*50		3	0				内外面に降灰
293	9I 1b	灰原上層	長頸瓶	108					*17		2	0				内外面に降灰
294	9I 1b	灰原上層	長頸瓶	132					*24		3	0				内外面に厚い降灰、窯壁等付着
295	9I 1c	灰原上層	長頸瓶	112					*46		4	0				内外面に降灰
296	9I 1b	灰原上層	長頸瓶	130					*39		2	0				内面に降灰
297	8I 19a	検出	長頸瓶	110					*29		4	0				内外面に降灰
298	8I 20b	検出	長頸瓶	112					*31		2	0				外面に薄い降灰
299	8I 19b	検出	長頸瓶	120					*26		2	0				内面に降灰
300	9I 1b	検出	長頸瓶	116					*21		2	0				内外面に降灰
301	9I 2c	検出	長頸瓶	128					*31		2	0				内外面に降灰
302	9I 2d	検出	長頸瓶	110					*22		3	0				内外面に降灰、窯壁等付着
303	9I 2d	検出	長頸瓶	120					*28		2	0				内外面に降灰
304	9I 1d	検出	長頸瓶	106					*29		2	0				内外面に降灰
305	9I 2c	検出	長頸瓶	114					*33		4	0				内面に降灰
306	8I 19b	検出	長頸瓶	110					*26		2	0				内外面に降灰
307	9I 1b	検出	長頸瓶	106					*27		3	0				内外面に降灰
308	9I 2c	検出	長頸瓶	112					*56		2	0				内面に降灰
309	9I 2b	検出	長頸瓶	114					*30		2	0				内面に降灰
310	9I 2c	検出	長頸瓶	116					*44		3	0				内面に降灰
311	9I 2b	検出	長頸瓶	124					*24		2	0				外面に薄い降灰
312	9I 2c	検出	長頸瓶	116					*68		2	0				内面に降灰
313	9I 2b	検出	長頸瓶	130					*27		1	0				内面に降灰
314	9I 2c	検出	長頸瓶		124	118			*37		0	4				内外面に降灰
315	9I 2b	検出	長頸瓶	112					*41		2	0				内面に降灰
316	9I 1c	灰原下層	長頸瓶	122					*77		11	0				外面に降灰
317	9I 2c	灰原下層	長頸瓶	110					*31		6	0				外面に降灰
318	8I 20b	灰原	長頸瓶	116					*115		3	0				
319	9I 1c	灰原下層	長頸瓶	108					35		4	0				外面に降灰
319	9I 1c	灰原下層	長頸瓶	122	134				15		4					外面に降灰
320	9I 2b	検出	長頸瓶	122					*69		1	0				外面に降灰
321	8I 18b	灰原	長頸瓶			89			*156		0	6				内外面に降灰
322	9I 2c	灰原下層	長頸瓶			89			*27		0	12				外面一部に降灰
323	9I 2c	灰原下層	長頸瓶			90			*25		0	12	-144804.87	28813.34	56.46	
324	9I 1c	灰原下層	長頸瓶			90			*30		0	10				内面に降灰、窯壁等付着
325	9I 1c	灰原下層	長頸瓶			81			*20		0	5				外面に降灰、窯壁等付着

遺物一覧表

番号	グリッド	遺構	器種 (分類)	法量 (mm)							残 (/12)			出土地点			備考
				a	b	c	d	e	f	g	口縁	底部		X	Y	Z	
326	9I 1c	灰原下層	長頸瓶			82					*20	0	5				内面一部に降灰
327	8I 19c	灰原下層	長頸瓶			78					*17	0	5				
328	9I 1c	灰原下層	長頸瓶			82					*20	0	4				内面一部に降灰
329	9I 1c	灰原下層	長頸瓶			82			*14			0	12				内面に降灰
330	8I 20c	灰原下層	長頸瓶			83			*44			0	12				内面に降灰、 窯壁等付着
331	9I 2b	灰原上層	長頸瓶						*71			0	0				外面全面に降灰
332	9I 2c	灰原上層	長頸瓶			100			*25			0	9				焼き膨れ、 歪みあり
333	9I 2c	灰原上層	長頸瓶			112			*22			0	3				外面一部に降灰
334	9I 2c	灰原上層	長頸瓶			82			*27			0	12				
335	9I 1c	灰原上層	蓋B1	158	160				*15			3					転用焼台
335	9I 1c	灰原上層	長頸瓶			86			*19			0	12				杯B蓋転用焼台付着
336	9I 2c	灰原上層	長頸瓶			86			*18			0	9				砂付着
337	9I 2c	灰原上層	長頸瓶			78				*25		0	2				
338	-	灰原上層	長頸瓶			82			*38			0	4				内面に降灰
339	9I 2b	検出	長頸瓶			110				*31		0	4				外面に降灰、 窯壁等付着
340	9I 1e	検出	長頸瓶			91				*25		0	5				外面一部に降灰
341	8I 19b	検出	長頸瓶			80			*39			0	6				窯壁等付着
342	9I 2d	検出	長頸瓶			86				*13		0	4				
343	9I 2b	検出	長頸瓶			80			*35			0	12				
344	9I 2b	検出	長頸瓶			87				*37		0	3				
345	9I 1b	検出	長頸瓶			90				*19		0	4				内面に降灰
346	9I 1b	検出	長頸瓶			94				*51		0	3				内面に降灰
347	9I 2d	検出	長頸瓶			81				*57		0	3				
348	8I 20j	表土	長頸瓶			97				*57		0	5				内面に降灰
349	9I 2c	検出	長頸瓶			77				*26		0	6				内面一部に降灰
350	9I 2c	検出	長頸瓶			78			*35			0	8				内面に降灰
351	9I 1b	検出	長頸瓶			76				*44		0	1				外面に降灰
352	9I 2c	灰原下層	大型長頸瓶	206					*38			1	0				外面に降灰
352	9I 2c	灰原下層	大型長頸瓶	220	220				*9			1					外面に降灰
353	9I 2b	灰原	大型長頸瓶	230					*51			1	0				外面に降灰
354	9I 1c	灰原下層	大型長頸瓶	150					*214			1	0				外面に降灰、 蓋口縁部付着
355	9I 2d	灰原下層	大型長頸瓶						*94			0	0				内外面に降灰
356	9I 1b	検出	大型長頸瓶	188					*76			1	0				
357	8I 19b	検出	大型長頸瓶	216					*48			2	0				内面に降灰
358	9I 2c	灰原下層	大型長頸瓶						*106			0	0				外面に降灰、 歪みあり
359	8I 20c	検出	大型長頸瓶			134			*53			0	5				接合沈線
360	9I 2b	灰原	大型長頸瓶			180				*27		0	3				外面に降灰、 接合沈線
361	9I 1c	灰原下層	大型長頸瓶			122			*25			0	12				
362	8I 20c	灰原上層	大型長頸瓶			123				*25		0	2				
363	9I 1c	灰原下層	大型長頸瓶			120			*17			0	12				窯壁等付着、接合沈線
364	9I 2c	検出	大型長頸瓶			140				*13		0	3				接合沈線
365	8I 20c	灰原下層	大型長頸瓶						*12			0	0				接合沈線
366	9I 2b	灰原	平瓶	72					*48			4	0				内外面に降灰
367	9I 1d	検出	平瓶	72					*76			3	0				内外面に降灰
368	9I 2b	検出	平瓶	98					*40			4	0				内面に降灰
369	8I 20c	灰原下層	大型平瓶	134					*75			6	0				内外面に厚い降灰
370	9I 2c	灰原上層	大型平瓶	110					*70			5	0				内外面に降灰
371	8I 18a	検出	大型平瓶	152					*73			4	0				内外面に降灰
372	9I 2c	灰原上層	小杯	60	62	33				24		3	7				内外面に降灰
373	9I 1b	検出	小杯			34			*12			0	3				
374	9I 2c	灰原上層	小碗			60				*24		0	2				外面全面に降灰
375	9I 1c	検出	盤	182	184		92	5	19	14		2	4				
376	9I 2c	検出	碗	174					*75			1	0				
377	9I 2d	灰原下層	円面硯	72	100				*22			2	0				外面全面に降灰
378	8I 20b	検出	円面硯	96	124				*14			2	0				外面全面に降灰
379	9I 2c	灰原下層	円面硯			122			*60			0	2				内外面一部に降灰
380	9I 1c	検出	陶鍾		長75		幅25		孔径12			重*36g					
381	9I 1c	検出	陶鍾		長75		幅25		孔径13			重 34g					
382	9I 1b	検出	陶鍾		長72		幅24		孔径12			重 44g					
383	8H 20t	検出	陶鍾		長102		幅37		孔径16			重 134g					
384	9I 1c	灰原下層	陶馬														
385	9I 1c	灰原下層	陶馬														
386	8I 20c	灰原	切取粘土														
387	9I 1c	灰原下層	土師器甕	192					*64			2	0				
388	9I 2b	灰原上層	土師器甕	*180					*18			1	0				
389	9I 2c	検出	土師器碗	*132					*22			1	0				
390	9I 1a	036SX	蓋G1	98	119		24	4	26	22		7		-144800.65	28800.08	57.23	外面全面に降灰、 歪みあり
391	9I 1a	検出	蓋G1	120	122		26	7	38	31		5					歪みあり
392	8H 20t	036SX	蓋G1	97	120				*25	25		3					
393	9I 1a	036SX	蓋G1	100	125				*25	25		8					
394	8I 20a	表土	蓋G1	115	116		28	6	24	18		4					
395	9I 1a	036SX	蓋G1	124	125		29	5	36	31		9		-144801.9	28802.48	57.09	
396	9I 1a	036SX	蓋G1	125	127		28	6	33	27	10			-144800.2	28801.88	56.94	
397	8H 20t	036SX	蓋G1	118	119		26	5	31	26		5					外面全面に降灰
398	9I 1a	036SX	蓋G1	120	121		26	8	35	27		9		-144800.45	28801.09	57.16	歪みあり
399	8I 20a	036SX	蓋G1	120	122		28	8	34	26		9		-144796.8	28800.18	57.01	
400	9I 1a	036SX	蓋G1	120	124		29	9	33	24	12			-144802.14	28802.26	57.04	外面全面に降灰
401	8H 20t	036SX	蓋G1	120	124		25	7	31	24	12						外面全面に降灰、 小粘土塊付着
402	8H 20t	036SX	蓋G2	138	139		30	9	33	24		1					
403	9I 1a	036SX	蓋G2	130	132		28	7	27	20		7		-144801.38	28801.73	56.97	歪みあり
404	9I 1a	036SX	蓋G3	120	144		32	9	35	26	12			-144800.04	28801.46	57.05	外面全面に降灰、 積み重ね痕跡
405	8I 20a	036SX	蓋G3	158	159		37	9	34	25	12						外面全面に降灰、 窯壁等付着
406	8I 20a	検出	蓋G3	146	149		27	10	41	31		7					外面全面に降灰

東中田A古窯

番号	グリッド	遺構	器種 (分類)	法量 (mm)			*は残存値			残 (/12)		出土地点			備考	
				a	b	c	d	e	f	g	口縁	底部	X	Y		Z
407	9H 1t	036SX	蓋G3	154	156		25	9	35	26	8		-144800.6	28799.98	57.07	外面全面に降灰、 歪みあり
408	8H 20t	036SX	蓋B1	157	159		33	6	41	35	4					
409	8H 20t	036SX	蓋B1	158	160		29	6	36	30	7					歪みあり
410	9I 1a	036SX	蓋B1	157	160		37	8	40	32	2		-144801	28800.14	57.27	
411	8H 20t	036SX	蓋B1	159	164		32	9	37	28	5					
412	8H 20t	036SX	蓋B1	170	173				*25	25	8					外面全面に降灰
413	8H 20t	036SX	蓋B1	157	161		29	8	41	33	10					外面全面に降灰
414	9I 1a	036SX	蓋B2	174	178		36	8	39	31	3					
415	8I 20t	036SX	蓋B2	169	171		38	7	36	29	1					
416	8H 20t	036SX	蓋B2	168	171				*25	25	10					外面全面に厚く降灰
417	8H 20t	036SX	蓋B2	171	173		29	8	37	29	6					
418	8H 20t	036SX	蓋B2	172	174				*23	23	1					
419	8H 20t	036SX	蓋B2	168	170				*25		1					歪みあり
420	9I 1a	036SX	皿A ?	116	118				20	20	3	4				
421	9I 1a	036SX	蓋G1 ?	104	125				28	28	9		-144801.58	28802.58	57.01	
422	8I 20a	検出	杯H	86	107				49	49	2					
423	9I 1a	検出	杯G1	112	115	47			32		6	12				
424	8H 20t	036SX	杯G1	119	122	58			39		3	12				
425	8I 20a	036SX	杯G1	116	118	43			43		11	12				歪みあり
426	8I 20a	036SX	杯G1	117	120	52			39		7	9	-144798.41	28801.29	56.91	
427	8I 20a	検出	杯G1	119	121	55			47		3	12				内面一部に降灰
428	9I 1a	036SX	杯G2	130	132	42			42		5	12				
429	8H 20t	036SX	杯G2	131	134	56			34		1	12				内面全面に降灰、 窯壁等付着
430	9I 1a	036SX	杯G2	131	133	49			40		3	12	-144801.89	28803.05	57.18	
431	9I 1a	検出	杯A1	110	112	58			36		9	12				歪みあり
432	8I 20a	036SX	杯A3	133	135	55			44		3	12				
433	9I 1a	036SX	杯A3	142	144	53			46		2	12				
434	8H 20t	036SX	杯A3			55			*20	*20	0	6				
435	8I 20a	036SX	杯A3	157	159				*46	*46	3	0				
436	8H 20t	036SX	杯A3			64			*26	*26	0	12				
437	9I 1a	036SX	杯B1				73	78	*33	*33	0	12	-144800.39	28801.64	57.22	
438	8H 20t	036SX	杯B1	145	148		98	104	42	39	11	11				
439	9I 1a	036SX	杯B1				96	100	*25	*23	0	9				
440	8I 20a	036SX	杯B1				95	91	*37	*29	0	6				
441		036SX	杯B1	146	148		110	108	41	38	1	3				
442	9I 1a	036SX	杯B1				100	100	*49	*46	0	11				
443	8I 20a	検出	杯B1				115	117	*29		0	6				
444	9I 1a	036SX	杯B1				80	84	*14	*9	0	12	-144801.98	28802.43	57.15	
445	8I 20a	検出	杯B1	152	154				*29		1	0				
446	9I 1a	036SX	杯B2	156	158		105	105	40	37	4	12	-144800.51	28800.05	57.25	
447	8H 20t	036SX	杯B2	158	160		110	108	45	44	4	10	-144799.98	28800.15	57.2	
448	8H 20t	036SX	杯B2	166	168		119	117	48	47	6	5				
449	9I 1a	036SX	杯B3	160	162		109	108	75	75	3	8	-144800.23	28800.1	57.21	内面一部に降灰
450	9I 1a	036SX	高杯		107	100	35	81	*90		0	10				杯部内面・脚部外面に降灰
451	9I 1a	検出	高盤	238					*20		2	0				内外面に降灰
452	8I 20a	036SX	高盤	222					*36		1	0				
453	8H 20t	036SX	鉢	186		94			72		4	4				
454	8I 20a	表土	鉢	184					*43		1	0				内面に薄い降灰
455	8H 20t	036SX	鉢	184					*32		2	0				
456	8I 20a	検出	陶白			104			*26		0	12				
457	8H 20t	036SX	陶白			106			*27		0	12				
458	8H 20a	036SX	陶白			110			*24		0	5	-144799.72	28800.55	56.94	
459	8I 20a	036SX	陶白			100			*32		0	12	-144798.13	28801.35	56.86	
460	8I 20a	表土	広口壺	108					*25		3	0				内外面に降灰
461	8I 20a	表土	広口壺	90					*36		2	0				内外面に降灰
462	9I 1a	検出	壺			69			*21		0	12				
463	8I 20a	036SX	長頸瓶蓋	168	170		40	11	39	28	12		-144798.75	28801.12	56.93	外面全面に降灰、 穿孔（3孔）
464	8I 20a	036SX	長頸瓶	152	170				*43		6	0	-144798.75	28801.12	56.93	外面全面に降灰
465	9I 20a	036SX	長頸瓶蓋	112	132		25	10	35		12					外面に降灰
466	9H 1t	036SX	長頸瓶	127	128				*136		8	0	-144800.84	28799.4	57.22	外面に降灰
467	8I 20t	036SX	長頸瓶	116					*123		2	0				
468	9I 1a	036SX	長頸瓶						*77		0	0	-144800.11	28801.09	57.12	外面に降灰
469	8H 20t	036SX	長頸瓶			80			*114		0	12				外面に降灰
470	8I 20a	検出	フラスコ形	99					*121		2	0				内外面に降灰
471	9I 1a	036SX	長頸瓶	106					*60		3	0	-144800.32	28801.6	57.19	内面に降灰
472	9I 1a	036SX	長頸瓶	110					*115		12	0				内面に降灰
473	9I 1a	036SX	長頸瓶						*50		0	0	-144800.92	28800.16	57.25	外面に降灰
474	9I 1a	036SX	長頸瓶						*110		0	0	-144800.88	28800.08	57.21	内面に降灰
475	8I 20a	検出	長頸瓶			84			*22		0	6				
476	8I 20a	検出	長頸瓶			87			*26		0	7				内面に降灰
477	9I 1a	検出	平瓶	72					*37		3	0				
478	9I 1a	036SX	平瓶			40			*68		0	8	-144801.88	28802.84	57.09	外面に降灰
479	9I 1a	検出	甕	252					*54		1	0				内外面に降灰
480	8I 20a	036SX	甕	177					*46		2	0				外面に降灰
481	9I 1a	036SX	甕	180					*65		3	0	-144801.9	28802.48	57.09	外面に降灰
482	8I 20a	036SX	甕	178					*119		6	0	-144797.91	28801.54	56.92	内外面に降灰
483	9I 1a	036SX	甕	172					*109		4	0				
484	9I 1a	036SX	甕	310					*82		2	0				内面に降灰
485	9I 1a	036SX	甕						*98		0	0	-144800.1	28801.39	57.09	
486	8I 20a	036SX	甕						*235		0	12				
487	8H 20t	検出	土師器甕	244					*30		1	0				
488	-	036SX	土師器甕			70			*24		0	4				
489	8I 20a	036SX	土師器甕			70			*22		0	4				

遺物一覧表

番号	グリッド	遺構	器種 (分類)	法量 (mm) *は残存値							残 (/12)		出土地点			備考
				a	b	c	d	e	f	g	口縁	底部	X	Y	Z	
490	9I 2b	040SX	蓋G3	150	152		29	6	28	22	6					外面全面に降灰
491	9I 2a	040SX	蓋G2	136	138		31	6	36	30	11		-144808.54	28805.04	57.95	外面全面に降灰
492	9I 2b	040SX	長頸瓶	100					*14			2	0			内面に降灰
493	9I 1j	002SX	蓋G3	*156	*160		31	7	*34	*27	3		-144802.05	28844.89	60.37	
494	9I 1j	002SX	蓋G3	*157	*159		35	7	*31	*24	2					
495	9I 1I	002SX	蓋B1	142	147		32	6	41	35	10		-144801.44	28843.96	60.04	
496	9I 1i	002SX	蓋				33	8	*26	*18	0		-144801.36	28843.46	60.01	焼成不良
497	9I 1i	002SX	蓋				33	7	*25	*18	0		-144802.7	28844.96	60.05	焼成不良
498	9I 1i	002SX	蓋				34	7	*22	*15	0		-144802.89	28844.96	60.07	焼成不良
499	9I 1i	002SX	蓋				30	10	*23	*13	0		-144803.06	28844.9	60.09	焼成不良
500	9I 1i	002SX	蓋				34	9	*18	*9	0		-144803.14	28844.82	60.12	焼成不良
501	9I 1i	002SX	蓋				35	9	*15	*6	0		-144803.06	28844.9	60.09	焼成不良
502	9I 1i	002SX	蓋	*170					*21	*21	1		-144803.44	28844.77	60.08	焼成不良
503	9I 1i	002SX	蓋						*17	*17	0		-144803.28	28844.8	60.11	焼成不良
504	9I 1i	002SX	杯B1	152	154		96	97	*45	*41	3	3	-144802.78	28845.01	60.05	焼成不良
505	9I 1i	002SX	杯B1	143	145		99	99	48	45	6	12	-144802.27	28844.38	60.11	
506	9I 1i	002SX	杯B1	146	148		99	99	44	42	6	12	-144803.05	28844.58	60.1	
507	9I 1i	002SX	杯B1	148	150		102	100	47	46	10	12	-144801.84	28844.83	60.11	
508	9I 1i	002SX	皿B ?	117	120		66	67	15	12	12	12	-144802.27	28844.73	60.13	歪みあり
509	9I 1i	002SX	杯G1	114	116				36		2	6				
510	9I 20i	002SX	広口壺	132					*41		2	0				内外面に降灰
511	9I 1i	002SX	広口壺						*20		0	12	-144802.83	28844.76	60.08	
512	9I 1i	002SX	平瓶	82					*36		2	0				内外面に降灰
513	9I 1j	002SX	長頸瓶			83			*42		0	11				
514	9I 1i	002SX	横瓶	43					73		9		-144802.42	28845	60.06	外面に薄い振灰
515	9I 1j	002SX	土師器甕	216					*19		1	0				
516	9I 1i	002SX	土師器甕	202					*18		2	0				
517	9I 1i	002SX	土師器甕						*68		0	0	-144801.48	28843.96	60.05	
518	9I 1i	002SX	転用砥具		長64		幅42		厚13			重26.2g				焼成不良
519	9I 1k	003SX	蓋	168	169		24	21	44	23	8		-144802.13	28854.24	60.79	外面全面に降灰
520	9I 1k	003SX	蓋G3	160	161		31	5	38	33	8		-144803.79	28851.57	60.68	
521	9I 1k	003SX	蓋B1	158	160		34	5	30	25	7		-144803.25	28853.26	60.74	歪みあり
522	9I 1I	003SX	蓋B1	153	157		34	5	43	38	8		-144803.76	28854.84	60.83	
523	9I 1k	003SX	蓋B1	148	153		28	6	32	26	10		-144803.89	28851.51	60.64	
524	9I 1I	003SX	蓋B1	156	158		35	7	40	33	8		-144803.56	28856.28	60.8	
525	9I 1k	003SX	蓋B1	154	158		28	8	37	29	8		-144803.74	28852.48	60.67	
526	9I 1k	003SX	蓋B1	155	158		35	6	42	36	12		-144803.91	28853.24	60.63	
527	9I 1k	003SX	蓋B1	156	159		31	10	46	36	9		-144803.54	28852.62	60.74	
528	9I 1k	003SX	蓋B1	158	160				*25		5		-144803.16	28853.8	60.99	外面全面に薄い降灰
529	9I 1k	003SX	蓋B2						*19		0		-144802.47	28853.57	60.99	内面に当て具痕跡
530	9I 1k	003SX	蓋B2	168	170				*28		4		-144803.09	28851.23	60.74	
531	9I 1I	003SX	蓋B2	177	179		34	7	33	26	9		-144803.33	28855.36	60.76	
532	9I 1k	003SX	蓋B2	168	170		29	10	36	26	12		-144800.71	28853	60.77	外面全面に降灰
533	9I 1I	003SX	蓋B2	166	167		34	7	38	31	4		-144803.9	28856.37	60.82	
534	9I 1k	003SX	蓋B2	165	166		37	7	34	27	3		-144800.74	28852.2	61.04	
535	9I 1k	003SX	蓋B2	171	172		28	10	39	29	6		-144801.07	28854.16	60.82	外面全面に降灰
536	9I 1I	003SX	蓋B2	164	167		33	9	41	32	4		-144801	28855.93	60.84	
537	9I 1k	003SX	蓋B2	167	169		35	6	42	36	2		-144802.42	28851.15	60.78	図上復原
538	9I 1k	003SX	蓋B3	168	170		33	11	26	15	11		-144803.83	28851.94	60.62	外面全面に降灰、積み重ね痕跡
539	9I 1k	003SX	蓋B	145	148				35	35	10		-144803.64	28851.49	60.71	
540	9I 1k	003SX	蓋	124	126		24	7	28	21	10		-144800.36	28851.04	60.71	
541	9I 1k	003SX	蓋	115	117		29	7	28	21	12		-144803.32	28851.4	60.75	
542	9I 1k	003SX	蓋B	117	119		26	7	25	18	12		-144803.1	28850.35	60.71	
543	9I 1k	003SX	皿A ?	127	128	68			16		10		-144800.48	28852.74	60.06	歪みあり
544	9I 1k	003SX	皿A ?	126	128	74			19		5		-144803.13	28851.57	60.74	
545	9I 1k	003SX	皿A ?	129	131	71			17		8		-144803.13	28851.57	60.74	
546	9I 1k	003SX	皿A ?	132	133	73			15		12		-144803.96	28853.26	60.63	歪みあり
547	9I 1k	003SX	杯B1				89	90	*20	*20	0	12	-144803.49	28853.7	60.97	
548	9I 1I	003SX	杯B1				94	95	*20	*20	0	3	-144801.58	28856.74	61.24	内面に降灰
549	9I 1k	003SX	杯B1				99	97	*12	*12	0	7	-144801.25	28855.67	61.19	
550	9I 1I	003SX	杯B1				77	77	*15	*11	0	8	-144802.45	28855.82	60.94	
551	9I 1j	003SX	杯B1	138	140		86	90	36	32	2	2				
552	9I 1I	003SX	杯B1	150	151		95	94	39	37	8	12	-144802.96	28850.38	60.71	
553	9I 1I	003SX	杯B2	165	167	123	121	49	48	10	11		-144803.59	28856.66	60.9	歪みあり
554	9I 1k	003SX	杯A3	140	142				47		3	12	-144802.73	28850.32	60.72	
555	9I 1k	003SX	杯A3	143	145				41		1	12	-144803.83	28854.01	60.77	
556	9I 1k	003SX	杯A3	141	143				45		9	12	-144800.68	28853.89	60.72	
557	9I 1k	003SX	杯A3						*37		0	10	-144802.34	28852.77	60.91	
558	9I 1I	003SX	杯A3						*33		0	12	-144801.28	28857.23	61.3	
559	9I 1k	003SX	杯A3						*25		0	12	-144800.9	28852.86	60.97	
560	9I 1I	003SX	杯A			45			*24		0	6	-144802.47	28855.38	60.77	
561	9I 1k	003SX	高杯	104	105	71	24	41	75	34	11	12	-144803.91	28853.03	60.63	杯部内面・脚部外面に降灰
562	9I 1k	003SX	高盤	216					*20		3	0	-144804.01	28852.68	60.75	
563	9I 1I	003SX	陶白	214					*25		1	0				
564	9I 1I	003SX	小型壺	68		38			61		1	6	-144802.69	28856.58	61.16	内外面一部に降灰
565	9I 1k	003SX	広口壺	108					*68		2	0	-144803.82	28851.92	60.69	外面に降灰
566	9I 1k	003SX	広口壺						*13		0	12	-144801.48	28853.69	61.08	
567	9I 1I	003SX	庵	82					*29		2	0	-144802.08	28856.43	60.91	内面に降灰
568	9I 1I	003SX	長頸瓶			47			*41		0	12	-144802.07	28855.29	60.96	内外面に降灰
569	9I 1k	003SX	長頸瓶	140					*13		1	0				内外面に降灰
570	9I 1k	003SX	長頸瓶	118					*19		4	0	-144804.1	28853.42	60.67	内外面に降灰
571	9I 1k	003SX	長頸瓶						*96		0	0	-144803.49	28853.31	60.82	外面に降灰
572	9I 1k	003SX	大型長頸瓶						*17		0	0	-144801.58	28857.17	61.36	外面に降灰

東中田A古窯

番号	グリッド	遺構	器種 (分類)	法量 (mm)							残 (1/2)		出土地点			備考
				a	b	c	d	e	f	g	口縁	底部	X	Y	Z	
573	9I 1I	003SX	長頸瓶			98			*90		0	9	-144801.72	28856.51	60.83	外面一部に降灰
574	9I 1k	003SX	長頸瓶			100			*23		0	11	-144814.99	28865	61.82	外面に降灰
575	9I 1k	003SX	長頸瓶						*106		0	0				内面一部に降灰
576	9I 1k	003SX	甕	484					*101		5	0	-144801.84	28852.92	60.82	
577	9I 1k	003SX	甕	416					*74		1	0	-144800.95	28852.05	60.94	
578	9I 1k	003SX	甕						*108		0	0	-144803.31	28853.18	60.78	
579	9I 1k	003SX	土師器甕	224					*27		6	0	-144803.79	28852.47	60.68	
580	9I 1k	003SX電	蓋B1	155	158		33	8	39	31	11		-144800.88	28854.53	60.77	
581	9I 1k	003SX電	蓋B2	175	178				*34		4		-144800.05	28854.8	60.9	
582	9I 1k	003SX電	皿A ?	132	135	80			21		3		-144800.53	28854.56	60.81	焼成不良
583	9I 1k	003SX電	杯B1	137	142				*42		1	0	-144801	28854.65	60.81	外面に降灰
584	9I 1k	003SX電	高杯	166	168	108	39	72	120	48	7	7	-144800.75	28854.92	60.8	
585	9I 1k	003SX電	製塩土器	80					*42		4	0				
586	9I 2k	003SX電	蓋B1	158	158				*16	*16	2					外面全面に降灰
587	9I 1k	003SX電	蓋B1	164	164				*22	*22	2		-144804.84	28850.38	60.6	
588	9I 1k	003SX電	杯B	190	192				*36		2	0	-144804.72	28850.45	60.56	
589	9I 1I	003SXP1	蓋B	166	166				*13	*13	1					
590	9I 1I	003SXP1	長頸瓶						*94		0	0				外面一部に降灰
591	9I 1k	003SX	砥石	長20.6		幅10.9		厚9.3			重203.3g		-144804.24	28853.38	60.68	凝灰質砂岩門礫
592	9I 1k	003SX	砥石	長19.5		幅13.0		厚6.8			重243.2g		-144803.95	28853.84	60.67	凝灰質砂岩門礫
593	9I 1I	003SX	鉄鍬	長66		幅28		厚2.5			重8.6g		-144803.04	28855.92	60.81	平根式
594	9I 2j	005SK	蓋B1	150	152	30	6	32	26	3			-144807.05	28846.83	60.08	
595	9I 2j	005SK	蓋B2	168	170				*21	*21	3		-144806.36	28846.85	60.22	
596	9I 2j	005SK	蓋B2	188	189				*20	*20	1		-144806.61	28846.52	60.2	
597	9I 2j	005SK	杯B2?	160	162				*28		3	0	-144806.64	28846.48	60.2	焼成不良
598	9I 2j	005SK	高杯	166	166				*36	35	3	0	-144806.59	28846.62	60.14	内外面に降灰、窯壁等付着
599	9I 2j	005SK	甕	494					*172		4	0	-144806.5	28846.81	60.15	
600	9I 2j	表土	蓋G2	130	132		26	7	33	26	8					
601	9I 3j	表土	蓋B1	162	164		33	9	50	41	1					
602	9I 2j	004SX	蓋B1	*162	*164		34	9	*29	*20	1		-144808.38	28846.29	59.99	外面全面に降灰
603	9I 2j	表土	皿A ?	139	142				17		3					内面一部に降灰、重ね焼き痕跡
604	9I 2j	検出	杯A3	131	133	60			38		2	7				
605	9I 1j	表土	杯B1				98	98	*21	*19	0	5				
606	9I 2j	検出	杯B1	150	154		106	104	42	42	2	7				
607	9I 2k	検出	杯B						*10		0	0				
608	9I 1k	検出	不明				89	88	*55		0	2				
609	9I 1k	検出	長頸瓶	148					*22		3	0				内面に降灰
610	9I 2k	表土	甕	252					*47		1	0				
611	9I 1k	検出	盤	*248					*38		1					
612	9I 4k	表土	陶白	174					*23		2	0				
613	9I 1j	表土	鉢	240					*46		1	0				
614	9I 2j	004SX	鉢	432					*86		2	0	-144807.14	28847.27	60.32	
615	9I 1a	灰原下層	釉着資料・転用焼台													
616	-	灰原	釉着資料・転用焼台													
617	9I 3d	灰原下層	釉着資料・転用焼台													
618	8H 20t	036SX	釉着資料・転用焼台													
619	9I 1c	灰原下層	釉着資料・転用焼台													
620	9I 1c	灰原下層	釉着資料・転用焼台													
621	9I 2b	灰原	釉着資料・転用焼台													
622	9I 1c	灰原上層	釉着資料・転用焼台													
623	-	灰原	釉着資料・転用焼台													
624	9I 2c	灰原	釉着資料・転用焼台													
625	9I 2c	灰原	釉着資料・転用焼台													
626	9I 2d	検出	釉着資料・転用焼台													
627	9I 2b	検出	釉着資料・転用焼台													
628	9I 2c	検出	釉着資料・転用焼台													
629	9I 2c	検出	釉着資料・転用焼台													
630	9I 2e	検出	釉着資料・転用焼台													
631	9I 2b	検出	釉着資料・転用焼台													
632	9I 2c	検出	釉着資料・転用焼台													
633	9I 1c	検出	釉着資料・転用焼台													
634	9I 1b	検出	釉着資料・転用焼台													
635	8I 20a	表土	釉着資料・転用焼台													

法量計測値

[蓋]	a：口径	b：最大径		d：摘み径	e：摘み高	f：器高	g：杯部高
[杯H・杯A・杯G]	a：口径	b：最大径	c：底径			f：器高	
[杯B]	a：口径	b：最大径		d：高台径	e：底径	f：器高	g：杯部高
[高杯]	a：口径	b：最大径	c：脚径	d：脚径	e：脚高	f：器高	g：杯部高
[その他の器種]	a：口径		c：底径			f：器高	

残存率

「残・口縁」は口縁部残存率（n／12） 「残・底部」は底部（高台）残存率（n／12）

写 真 図 版



東中田A古窯遠景・全景

上段：遠景（弓張山地を臨む）

下段：調査区全景（西向き斜面、小支谷、東向き斜面）

東中田A古窯



小支谷の谷底付近に形成された灰原（1）

上段：灰原の検出状況

下段：灰原の堆積状況



小支谷の谷底付近に形成された灰原（2）

上段：灰原の完掘状況

下段：灰原下位の溝048SD

東中田A古窯



小支谷の谷底付近に形成された灰原（3）

上段：推定される窯体付近の堆積状況

下段：灰層の検出状況



灰原土層断面

上段：南北（谷方向）土層断面

中段：東西方向（谷の直交方向）土層断面近景

下段：調査区南壁（溝048SD）土層断面

東中田A古窯



東向き斜面の遺構

上段：東向き斜面全景

中段左：緩傾斜面040SX検出状況 中段右：040SX土層断面

下段左：土坑037SX・038SX・掘立柱建物051SB 下段右：037SX土層断面



土坑036SX

上段：完掘状況

中段：土層断面

下段左：甕（486）・焼土塊等出土状況 下段右：蓋が軸着した有蓋長頸壺（465・466）の出土状況

東中田A古窯



西向き斜面の遺構（1）

上段：全景

下段：窯体001SY・竪穴建物003SXと周辺の遺構



西向き斜面の遺構（２）

上段：窯体001SY周辺遺構検出状況

中段：落ち込み004SXの堆積状況

下段：窯体前面の状況

東中田A古窯



窯体001SY (1)

上段左：窯体断面露出状況 上段右：検出状況（右上方に煙道の先端）
 中段左：煙道土層断面 中段右：煙道内炭化材出土状況
 下段：完掘状況



窯体001SY (2)

上段：断面断ち割り状況

中段：窯体断面（被熱の状況）

下段左：煙道付近断面（被熱の状況） 下段右：煙道部分完掘状況

東中田A古窯



竪穴建物002SX（1）

上段：竪穴内遺物出土状況

中段左：須恵器杯類出土状況 中・下段右：焼成不良の須恵器杯類（496～504）の集積状況

下段左：ミニチュア横瓶（514）出土状況



竪穴建物002SX（2）

上段左：土層断面 上段右：完掘状況

中段左：焼土・須恵器甕検出状況 中段右：須恵器甕出土状況

下段左：粘土溜まり検出状況（土坑内） 下段右：粘土溜まり断面

東中田A古窯



竪穴建物003SX全景

上段：全景（排水溝方向より）

下段：全景（長軸方向）



竪穴建物003SX土層断面・遺物出土状況（全景）

上段：土層断面（短軸方向）

中段：土層断面（長軸方向）

下段：竪穴内遺物出土状況

東中田A古窯



竪穴建物003SX遺物出土状況（近景）

上段左：高杯（561）出土状況 上段右：ミニチュア長頸瓶（568）出土状況

中段左：砥石（591・592）出土状況 中段右：鉄鏟（593）出土状況

下段左：窯壁出土状況 下段右：皿？（546）・炭化材等出土状況



竪穴建物003SX竈・焼土

上段左：竈検出状況 上段右：竈土層断面

中段左：竈内遺物出土状況 中段右：完掘状況

下段左：焼土検出状況 下段右：焼土断面

東中田A古窯



竪穴建物003SX周辺・付属施設

上段左：外周溝034SD 上段右：排水溝027SD

中段左：粘土溜まり検出状況 中段右：粘土溜まりとロクロピットP1の位置関係

下段左：P1遺物（590）出土状況 下段右：P1断面



西向き斜面のその他の遺構

上段左：小土坑028SK粘土塊検出状況 上段右：028SK粘土塊断面
 中段左：ロクロピット？008SK土層断面 中段右：008SK完掘状況
 下段左：土坑005SK遺物出土状況 下段右：005SK土層断面

東中田A古窯



出土遺物集合写真（1）

上段：灰原出土遺物

下段：土坑036SX出土遺物



出土遺物集合写真（2）

上段：竪穴建物002SX出土遺物

下段：竪穴建物003SX出土遺物

東中田A古窯



灰原出土須恵器杯類（1）



灰原出土須恵器杯類（2）

東中田A古窯



31



32



34



35



61



101



104



105



107



108

灰原出土須恵器杯類（3）



灰原出土須恵器杯類（4）



灰原出土焼成不良須恵器杯（1）



灰原出土焼成不良須恵器杯（2）

東中田A古窯



灰原出土須恵器杯類（5）



灰原出土須恵器高杯

東中田A古窯



灰原出土須恵器鉢類他・甕



灰原出土須恵器瓶類

東中田A古窯



灰原出土須恵器その他の器種・土師器甕



土坑036SX出土須恵器杯類（1）

東中田A古窯



土坑036SX出土須恵器杯類（2）



457



459



463



466



463・464



469



472



474

土坑036SX出土須恵器瓶類

東中田A古窯



土坑036SX出土須恵器甕・緩傾斜面040SX出土須恵器杯類



竪穴建物002SX出土須恵器・転用砥具

東中田A古窯



豎穴建物003SX出土須恵器杯類（1）



豎穴建物003SX出土須恵器杯類 (2)



竪穴建物003SX出土須恵器・製塩土器



竪穴建物003SX出土石製品・窯壁・鉄製品・西向き斜面出土須恵器



ふ り が な	ひがしなかだAこよう
書 名	東中田A古窯
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シ リ ー ズ 番号	第178集
編 著 者 名	早野浩二(編集)・パレオ・ラボAMS年代測定グループ・黒沼保子
編 集 機 関	公益財団法人愛知県教育スポーツ・振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL 0567(67)4161
発 行 年 月 日	西暦2013年3月31日

ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしなかだA 東中田A	あいちけんとはしし 愛知県豊橋市 ひがしほそやちょう 東細谷町	23201	79712	34度 41分 33秒	137度 28分 52秒	2007.07.02 ～2007.10.06	1,591	一般国道 23号豊橋東 バイパス建設

所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東中田A古窯	古窯跡	古代	窯体 灰原 土坑 竪穴建物	須恵器・土師器 製塩土器 石製品 鉄製品	灰原出土須恵器 焼成不良杯類の集積 竪穴建物で粘土溜まり とロクロピットを検出

文 書 番 号	発掘届出(19埋セ第22号・2007.5.23) 通知(19教生第639号・2007.7.2) 終了届・保管証・発見届(19埋セ第69号・2007.10.17) 鑑査結果通知(19豊教美第331号・2007.10.25)
---------	---

要 約	東中田A古窯は、一里山窯跡群または湖西窯跡群一里山支群の一角に分布する須恵器窯である。窯体は大部分が破壊されていたが、反対側の斜面において灰原と別の窯体に付属する土坑、窯体付近において竪穴建物2棟を検出した。竪穴建物は粘土溜まりとロクロピットが付属することから、居住施設兼作業施設として利用されたと考えられる。古窯跡は出土須恵器から7世紀後葉から8世紀前葉にかけて操業したと推測される。
-----	---

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第178集

東 中 田 A 古 窯

2013年3月31日

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社

